164/124

廣瀨桂次郎
原田八十八 共譯

産氏診斷學

第五

朝香屋書店發兌

目次

第三章　消化器ノ診査……二九五
緒言……二九六
第一節　口腔ノ診査……三〇〇
第二節　咽頭ノ診査……三〇〇
第三節　食道ノ診査……三〇三
（イ）食道ノ視診……三一一
（ロ）食道ノ觸診……三一四
（ハ）食道ノ打診……三一七

帝國圖書館藏

(二) 食道ノ聽診……三三八
第四節 胃腑ノ診査……三四〇
(イ) 胃部ノ視診……三四〇
(ロ) 胃腑ノ觸診……三四八
(ハ) 胃腑ノ打診……三五七
(二) 胃腑ノ聽診……三七五
第五節 腸管ノ診査……三七九
(イ) 視診……三七九
(ロ) 觸診……三八二
(ハ) 打診……三八六
(二) 聽診……三八七
第六節 肝臟ノ診査……三八八

(イ) 肝部ノ視診……三八九
(ロ) 肝臟ノ觸診……三九四
(ハ) 肝臟ノ打診……四一一
(二) 肝臟ノ聽診……四三三
第七節 膵腺ノ診査……四三四
第八節 網膜ノ診査……四三八
第九節 腸間膜及腹膜後淋巴腺ノ診査……四三九
第十節 腹膜ノ診査……四四一
(イ) 腹膜表面ノ粗糙……四四二
(ロ) 腹膜腔內ノ可動性遊離液……四四四
(ハ) 腹膜腔內ノ可動性遊離瓦斯……四五一
(二) 腹膜腔內ノ液體及瓦斯……四五三

(ホ) 腹膜腔内ノ包裹液……四五五
第十一節 吐物ノ診査……四五七
(イ) 水液嘔吐……四七五
(ロ) 粘嘔嘔吐……四七八
(ハ) 血液嘔吐……四八〇
(ニ) 膿汁嘔吐……四八三
(ホ) 膽汁嘔吐……四八三
(ヘ) 吐糞……四八四
第十二節 大便ノ診査……四八七
(イ) 膽液便……五一〇
(ロ) 粘液便……五一一
(ハ) 膿液便……五一三

(ニ) 粘液膿便……五一四
(ホ) 水樣便……五一四
(ヘ) 血便……五一五
(ト) 脂肪便……五一六
第七章 脾臟ノ診査……
第一節 脾部ノ視診……五六一
第二節 脾臟ノ觸診……五六四
第三節 脾臟ノ打診……五七三
第四節 脾臟ノ聽診……五八八

東京醫學會圖書館藏

第六章 消食器ノ診査 Untersuchung des Verdauungsapparates.

獨逸 ヘルマン、アイヒホルスト 著
廣瀬桂次郎
原田八十八 共譯

以下論セントスル臓器ハ專ラ腹腔ニ屬スルカ故ニ先ツ茲ニ腹腔ニ於ル病變ノ位置ヲ定ムルノ標目ト爲スヘキモノヲ掲クルハ決メ無用ニアラサルヘシ通常之ニ用ユルハ胸腔臓器ヲ診査スルノ際應用スル線條ヲ延長セルモノニメ更ニ臍ヲ以テ高低ヲ計測スルノ基點トセリ又解剖家ノ慣用セル區分法ニ據ルモ時トメ精密ナル占地(ロカリザタオン)ヲ得ルヿアリ

即チ之ニ依レハ前腹壁ヲ上中及下腹ノ三部ニ分チ上腹部ハ両第十二肋骨ノ遊離端ヲ連接スル地平線ニ依リテ中腹部ヨリ分レ中腹部ト下腹部トハ両腸骨前上棘ノ結合線之カ境ヲ爲シ而ノ側方ハ一側ノ胸鎖關節ヨリ同側ノ腸骨前上棘ニ劃ケル線條ニ由リテ經界セラル

其他腹壁ノ側部ハ上(季肋部)下(腸骨部)ノ二部ニ分レ腰部ハ腹壁ノ後面ニ屬セリ

第一節　口腔ノ診査 *Untersuchung der Mundhöhle.*

口腔ノ診査ハ其手技通常容易ニシテ濶ク口ヲ開キ口唇ヲ把テ之ヲ齦肉ヨリ離隔シ且舌尖ヲ遠ク挺出セシムルトキハ口腔ノ諸部ヲ窺視スルニ足ルナリ但此際輝照ヲシテ宜シキヲ得セシムヘキハ固ヨリ言ヲ待タス

是ヲ以テ檢査ノ際ハ患者ヲ窓前ニ誘フテ頭部ヲ少シク仰向セシムル後陰光ヲ口腔内ニ落射シ以テ口腔ノ諸部ヲ鮮明ナラシムヘシ時トシテ頭部ヲ側方ニ廻轉セシメ光線ノ射入ヲ十分ナラシムルノ必要ナルコアリ而シテ醫ハ常ニ患者ノ側方ニ占位スヘキハ勿論トス是レ然ラサレハ其廣濶ナル背部ヲ以テ光線ヲ遮絶スルノ恐レアレハナリ

口篦又舌子 *Mund-oder Zungenstapel.* ノ應用ハ口腔ノ各部ヲ明カニ視察シ又之ヲ露出セシムルヲ得ルモノニシテ實地上ニ於テハ是レニ普通ノ匙柄ヲ用ユ或ハ扁平ニシテ滑澤ナル木桿ヲ以テスルモ可ナリ然レトモ醫自宅ニ於テ診査スルトキハ殊別ノ舌子ヲ用ユヘシ其形狀ハ甚タ種々アリト雖モ畢竟各人ノ嗜好ニ出ツルモノニシテ其間ニ優劣アルニアラス余等ノ使用セル舌子ハ新銀製ニシテ茲ニ圖スル所ノモノ是ナリ(第百七十三圖)

第百七十三圖

舌子、二分一大

口腔ノ檢査ハ患者ノ嫌惡ニヨリ之ヲ遂クルヲ得サル「屢、之アリ是レ小兒及精神病患者ニ於テ殊ニ見ル所ナリ此際患者ハ口唇及齒列ヲ緊閉シ以テ特殊ノ手技ヲ行フニアラサルヨリハ舌子ノ挿入ヲ得サラシム斯ノ如キニ際シテハ患者ノ兩鼻孔ヲ閉塞シ患者ノ空氣ヲ吸啜セントシテ開口スルヲ窺ヒ快手、舌子ヲ口腔內ニ送入スヘシ「ザックス」氏ハ之ニ羽毛若ク

ハ粗毛ヲ附セル菲薄ノ消食子ヲ齒齒及頰粘液膜間ノ罅隙ヲ通シテ後方ニ送リ之ニ由テ軟口蓋ヲ刺戟シ絞約運動ノ發現ヲ俟テ舌子ヲ迅速ニ口腔內ニ送致セリ若シ以上ノ方法ニ由リテ舌子ノ一旦口腔內ニ固定セラルヽトキハ强ク下顎ヲ壓下シ口腔內ヲ窺察シ得ル「多クハ容易ナリ

「ブルック」氏ハ「ミッデルドルフ」氏ノ創意ニ遵ヒ一種ノ口腔檢査器ヲ創製シ「クロップシュ」氏之ヲ口鏡 *Stomatoskop.* ト名ケタリ是レ瓦爾華尼電流ニ由テ紅熾セル白金線ヲ齒列ノ後際ニ送リ口腔ノ各部ヲ照輝セシムルモノニシテ「クロップシュ」氏ノ報告ニ據レハ其際齒牙全ク透見シ得ヘクシテ顎骨ニ於ケル齒根ノ全徑ヲ視認シ得ルト云ヘリ若シ果シテ氏ノ說ノ如クナラシメハ此檢査法ハ口腔病ノ診斷ニ亦有益ナルヤ論ヲ要セサルナリ近世「ニッツエ」及「ライテル」

ノ両氏再ヒ此法ヲ採用スルニ至レリ

顯微鏡檢査ハ時トシテ頗ル口腔檢査ヲ裨益スルヿアリ例之口腔粘液膜及舌等ニ於ル白色若クハ帶黃色ノ沈着物ノ微菌ナルカ否ラサルカハ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢スルトキハ容易ニ之ヲ決定スルヲ得ルカ如シ若シ診斷上唾液腺ノ分泌物ヲ攝取スルヲ要スルトキハ尖端鈍緣ヲ爲セル細小ノ硝子管ヲ唾液管ニ送入シ以テ唾液ヲ攝取スヘシ

第二節　咽頭ノ診査 *Untersuchung der Schlundhohle.*

咽頭ノ檢査ハ視診及觸診ノ二法ニ依ルモノトス

(イ) 視診 *Inspection.*

咽頭腔ノ直達視診ハ其視察ノ部位甚シク狹隘ナリトス何トナレハ開口ノ際直接ニ目擊シ得ルハ僅ニ咽頭後壁ノ口峽ニ對スル部分ニ止マレハナリ加之口峽ハ各人ニ從ヒ甚シク其大サヲ異ニスルモノニメ或者ニ於テハ殆ト咽頭後壁ヲ窺視スヘカラサルカ如キヿアリ

咽頭腔ノ窺視ハ喉頭鏡檢査ニ於ルカ如ク舌ヲ遠ク挺出セシメ兼テ深ク吸息セシムルカ或ハ *ae* ヲ發聲セシムルトキハ其視野頗ル廣濶トナルモノトス是レ之ニ由テ軟口蓋上擧シ舌背低下スルニ由ルナリ

又舌子ヲ挺出セル舌面ニ沿フテ舌根ニ送リ之ヲ前下方ニ壓抵スルトキハ視野ヲ更ニ廣濶ナラシムルヲ得ヘシ此際絞約運動發現スルヿアリト雖モ是レ却テ咽頭腔深部ノ窺視ヲ容易ナラシムルモノニシテ屢〻之ニ由テ會厭及披裂軟骨幷ニ咽頭腔ノ深部ヲ目視シ得ルヿアリ

亦「ウォルトリニー」氏ハ左手ノ拇指及示指ヲ以テ挺出セル舌ヲ把持シ第

三及四指ヲ以テ喉頭ノ「アダム」氏果ヲ强ク扛擧スルノ法ヲ稱用セリ若シ此際同時ニ舌子ヲ以テ舌背ヲ强ク壓下スル片ハ會厭ニ至ル迄窺視スルヲ得ヘシ

咽頭腔ヲ十分ニ視察セント欲スル片ハ特別ノ照輝裝置ヲ要スルモノニメ其上部ハ鼻鏡ヲ以テ診スヘク側壁及下部ハ喉頭鏡及附屬照輝裝置ヲ以テ足レリトス

其他咽頭粘液膜沈着物ノ顯微鏡檢査ハ亦診斷上大ニ貴要ナルハ宜シク之ヲ銘記セスンハアルヘカラス

(ロ) 觸診 *Palpation.*

咽頭ノ觸診ハ右手ノ示指ヲ以テ行フヘキモノニメ口腔ヨリ咽頭腔ノ上部或ハ下部ニ送入スルモノトス其詳細ノ規則ニ至テハ喉頭觸診ノ條下ニ掲載セルモノニ異ナラス宜シク就テ視ルヘシ其他時トメ消息子若クハ「カテーテル」ヲ以テ介達觸診ヲ行ハサルヘカラサルヿアリ

第三節　食道ノ診査 *Untersuchung der Speiseröhre.*

食道ハ三部ニ區別セラルヽモノニメ其經過セル身體ノ部位ニ應シ之ヲ頸部、胸部及腹部食道ト爲ス就中直達ニ檢査シ得ルモノハ頸部食道ニメ爾餘ノ両部ニ至テハ唯リ複雜ナル檢査法ニ由テノミ達スルヲ得ルモノトス

食道ノ始部即チ咽頭ノ食道ニ移行スルノ部ハ殆ト第六七頸椎ヲ連接セル關節間軟骨ノ部ニ在リテ其下端即チ胃腑トノ境界部ハ

多クハ第十一胸椎ノ部位ニ位ス然レ𪜈下端ハ時トシテ既ニ第九胸椎ノ高サニ終ルヿアリ又食道前際ノ臓器ヨリ之ヲ云ヘハ食道ノ始部ハ環狀軟骨ノ下縁ニ應シ其末端ハ第七肋軟骨ノ胸骨附着部即チ胸骨體ト劍狀突起トノ接合部ニ在リ

食道ノ長サハ成人ニ於テ平均二十五「センチメーテル」ヲ算スルモノナルカ故ニ今食道ノ始端ヲ以テ截齒ヲ距ルヿ十五「センチメーテル」ノ處ニアリトスレハ口腔ヨリ食道ニ送入セル消息子ハ四十「センチメーテル」ニメ始テ胃腑内ニ達スルモノタルヲ知ルヘシ此食道ノ全長ヲ前記ノ三部ニ從テ分ツトキハ左ノ如シ

頸部……五「センチメーテル」
胸部……十七「センチメーテル」
腹部……三「センチメーテル」

此尺數ハ消息子檢査ノ際病竈ノ位置ヲ定ムルニ當リ有用ノモノナルハ素ヨリ言フヲ俟タサルナリ其際猶食道ト左氣管枝トノ交叉部ニ注目スルヲ要ス此部ハ通常第四、五胸椎ノ接合部ニ應スルモノニメ食道始部ヨリ凡八「センチメーテル」下際ニ位ス然レ𪜈固ト食道ノ長サハ年齡ニ從ヒ變化アルモノナルカ故ニ此尺度ハ唯成人ノミニ適スルモノナルハ宜シク之ヲ銘記セサルヘカラス「ムートン」氏ノ說ニ初生兒ニ在テハ齒齦緣ヨリ計算セル食道ノ全長僅ニ十七「センチメーテル」ニ過キサリシト云フ

食道ハ空虛ノ際凋萎セルモノニメ其前後壁互ニ接着シ僅カニ横徑ノ破裂ヲ殘スニ過キス而メ其廣狹ハ部位ニ從ヒ同シカラスメ上部及下部ハ最モ狹隘ナリトス「ムートン」氏ハ「ギプス」模型ニ就テ之ヲ計測セシニ氣管分岐部ニ到ルノ上三分一ニ於テハ其直徑十

四「ミルリメーテル」中部ハ平均二十二「ミルリメーテル」ニメ下部ハ十二「ミルリメーテル」ナリシモ之ヲ擴脹スルトキハ上部ハ十八「ミルリメーテル」中部ハ三十五「ミルリメーテル」及下部ハ二十五「ミルリメーテル」ニ增大スルヲ發見セリト云フ蓋此數價ハ實地上大ニ緊要ナルモノトス何トナレハ食道ノ消息子檢査ノ際直徑十八「ミルリメーテル」以上ノモノヲ使用スヘカラサルヲ示セハナリ

食道ノ理學的檢査法ヲ理解セントセハ先ツ食道ノ位置ト近接器關トノ關係ニ注目スルヲ要ス

抑モ食道及氣管ハ其始端ニ於テハ共ニ正中線(第百七十四圖(イ))内ニ位スト雖モ速カニ兩者其位置ヲ變スルモノニシテ此變位ハ氣管ノ中線ヲ超ヘテ强ク右方ニ移行スルニ因シ食道ハ之カ爲メニ氣管ノ左緣ヨリ聳出ス(第百七十四圖(ロ))此位置ハ食道ノ全頸部ニ亘リ實地ニ於テ食道ノ直達診査ヲ行フニ頸ノ左側ニ於テスヘキハ此理ニ基クナリ

頸部食道ヨリ胸部食道ニ移ルヤ食道自ラ其方向ヲ轉シテ左方ニ向ヒ第三胸椎ノ部ニ於テ最左方ニ達ス(第百七十四圖(ハ))然レモ第四胸椎ニ到ルモ尙中線ヲ距ル「著クメ其氣管ト交叉スルヤ分岐部ニ於テセスメ却テ左氣管枝ニ於テス(第百七十四圖(ニ))此理ニ由リ胸部食道ノ上半部ハ脊柱ノ左側ニ於テ檢索セサルヘカラス然レモ之ヲ解剖ニ徵スルニ胸部食道ノ下半部ハ之ニ反シ脊柱ノ右側ニ於テ之ヲ搜索セサルヘカラス何トナレハ食道ハ既ニ第六胸椎ノ部ニ於テ再ヒ身體ノ中線内ニ歸リ(第百七十四圖(ホ))第七乃至九胸椎ノ間ニ於テハ脊柱ノ右側ヲ去リ(第百七十四圖(ヘ))第十胸椎ニ到リ始テ鋭ク左方ニ彎屈シテ横隔膜ノ食道孔ヲ通過シ遂ニ

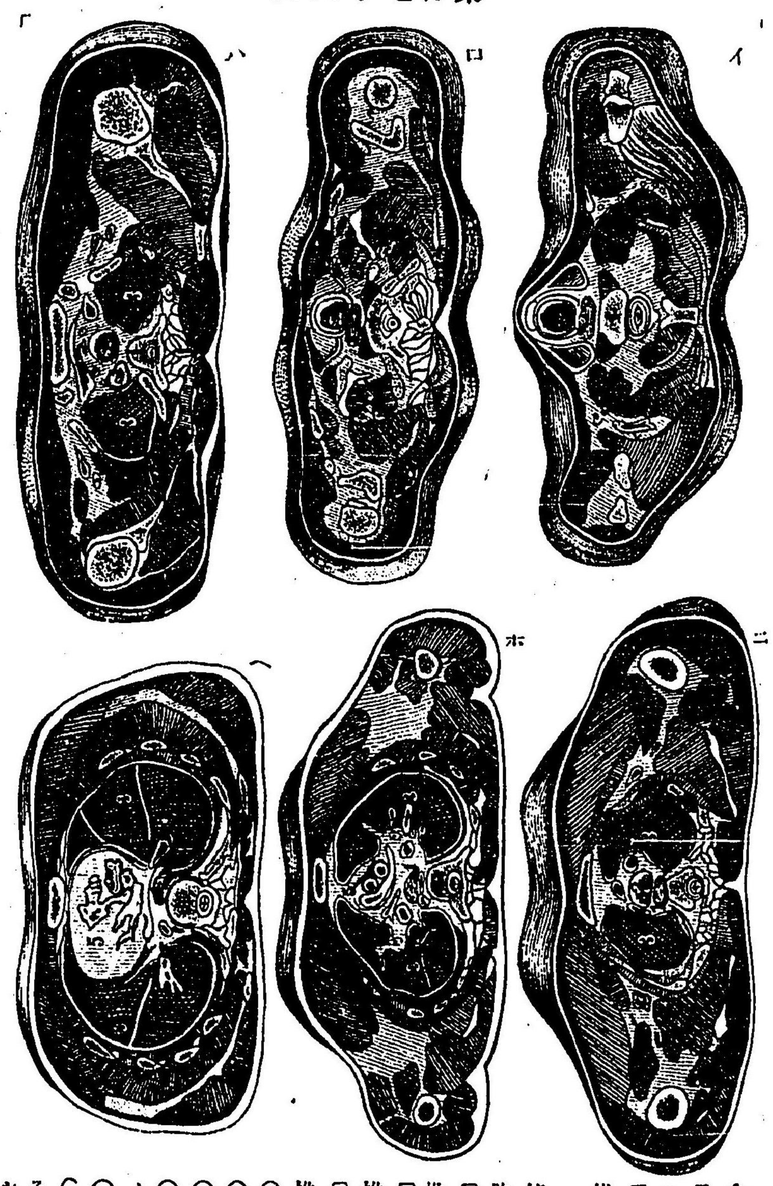
其下際ニ「センチメーテル」ニノ胃腔ヱ開口スレハナリ

通常世ノ唱フル所ニ依レハ胸部食道ハ其全部脊柱ノ左側ニ在ルモノナリト此説タル謬見ヲ免レサルナリ是レ余ノ解剖上ヨリ之カ位置ノ關係ヲ詳述スルノ止ムヲ得サル所以ナリ

以上論スル所ヲ以テスレハ胸部食道ハ上下ノ両半ニ區別スヘキモノニシテ其境界ハ恰モ第六胸椎ヨリ成リ而シテ上部ハ脊柱ノ左側ニ位シ下部ハ之ニ反シ右側ニ在リ

食道ノ氣管始部ヨリ其分岐部ニ到ルノ間ニ於テハ氣管之カ前際ニ在リテ存シ又分岐部ノ下部ニ於テハ氣管枝淋巴腺叢合シ三、五「センチメーテル」高徑ノ楔狀體ヲナシ以テ之ニ接在ス是レ此腺疾患ニ罹ルノ際容易ニ食道ヲ侵襲スルヿアルノ理ナリ之ヨリ下部ニ於テハ食道、心囊ノ後面ニ密接セル部位ニ在ルヿ五「センチメー

第百七十四圖



食道ノ氣管及脊椎ニ於ル位置

〔イ〕第七頸椎部〔ロ〕第一胸椎ノ下緣〔ハ〕第四胸椎ノ上緣〔ニ〕第四胸椎ノ中部〔ホ〕第六胸椎ノ上緣〔ヘ〕第八胸椎ノ上緣

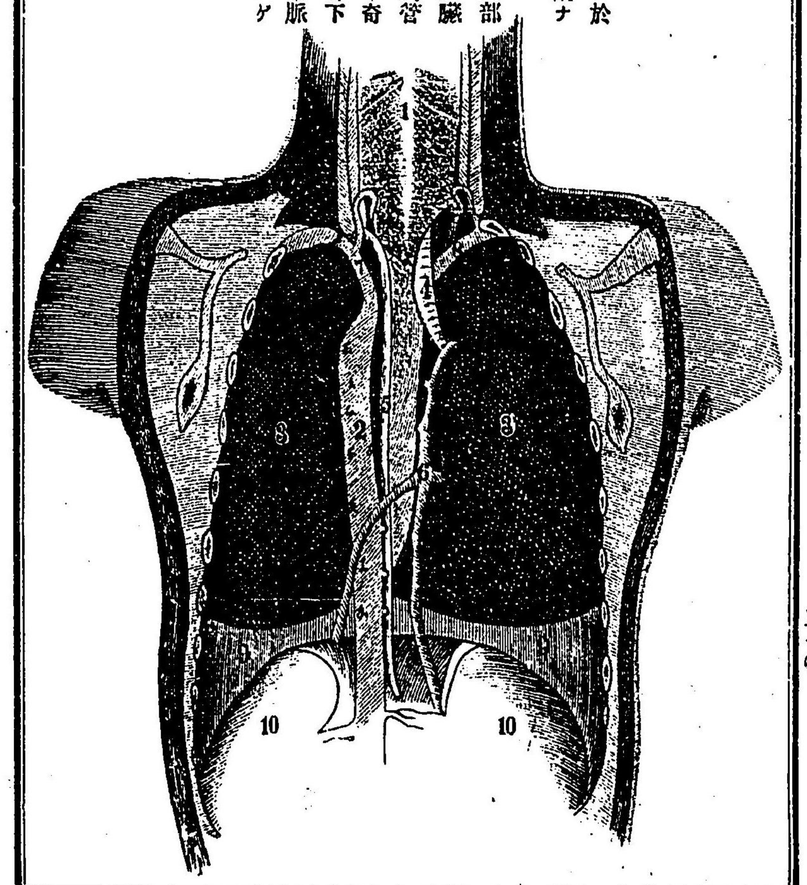
(1)食道
(2)氣管
(3)肺臟
(4)脊椎體ノ横斷面
(5)心臟

(「ブラウ子」氏ニ由ル)

第百七十五圖

食道ノ大動脈ニ於ル位置ニメ後觀ナリ

(1)食道(2)胸部大動脈(3)肺臟(4)氣管(5)胸管(6)奇靜脈及半奇靜脈(7)左鎖骨下動脈(8)無名動脈幹(「ルユーシンゲル」氏ニ由ル)



テル」長徑トス故ニ心包疾患ハ食道ニ波及スルヿ稀ナラサルナリ其他食道ノ大動脈ノ經路ニ於ル關係ハ頗ル奇異ニメ氣管分岐部ノ直下ニ於テハ食道(胸部大動脈ノ右側ニ位スルモ稍〻下方ニ到ルトキハ食道孔ニ達スルカ爲メ大動脈ノ前壁ヲ横過セサルヘカラサルニ依リ食道大動脈ノ周圍ニ不全ナル螺旋ヲ劃ク(第百七十五圖)夫ノ大動脈瘤及爾他ノ大動脈疾患ノ食道ノ官能ニ影響スルハ此關係アルニ由ルナリ

食道ノ疾患ハ其種類多カラス從テ之カ理學的診査法モ亦煩擾ナラスメ僅カニ狹窄、擴脹、憩室、腫瘍、潰瘍及穿孔ヲ證明スルニ止レリ而メ其檢査ハ視診、觸診、打診及聽診ニ據ルモノトス

(イ) 食道ノ視診 *Inspection der Speiserohre.*

食道ノ直達視診ハ唯リ頸部ノミニ止ルヤ固ヨリ言ヲ要セサルナリ此部ハ時トメ嚢狀ニ膨出(憩室 *Divertikel.*)スルヿアリ殊ニ左側ニ多ク右側若クハ両側ニ發スルヿアルハ稍々稀ナリ而メ食後ハ膨大シ時トメ甚シク緊張スルヿアルモ或ハ時ヲ經ルニ從ヒ或ハ嘔吐後又或ハ手ヲ以テ平等ニ之ヲ按摸スルトキハ其内容空虛トナリテ縮小ス且此憩室ハ「ベッツ」及「ケーニッヒ」氏ノ論載セル如ク盈虛ノ際時トメ一種ノ含嗽音ヲ放ツヿアルモノニメ全室内ニ於テ之ヲ聽取シ得ルカ如ク强盛ナルヿアリ其打診音ハ一樣ナラスメ若シ固形物之ヲ充タストキハ濁音ヲ放チ瓦斯之ヲ盈ストキハ皷音若クハ濁性皷音ヲ呈ス又此憩室ハ患者ヲメ水

ヲ以テ一小刀尖ノ酒石酸ヲ飲下セシメ次テ同量ノ重炭酸曹達ヲ攝取セシムルトキハ人工的ニ膨脹セシムルヲ得ヘシ然レトモ此試驗ハ大ニ注意ヲ要スルモノニメ疑似決シ難キトキノ他猥リニ行ハサルヲ可トス是レ憩室過度ニ緊張セラルヽトキハ接在セル氣道ヲ壓迫シ之カ爲メニ呼吸困難及窒息ノ危險ヲ招クノ恐レアレハナリ

或者屢〻喉頭鏡檢査法ノ原理ニ基キテ食道ノ内部視診(食道鏡檢査法 *Oesophagoskopie.*)ヲ行ハントシ近世「ヂョーン」「アイルソン」「ベファン」「ゼメレーデル」及「ストエルク」殊ニ「ワルデンブルク」氏ノ諸家亦頻リニ之カ考案ヲ迴ラシ遂ニ「ワルデンブルク」氏ハ管狀裝置ヲ食道内ニ送入シ喉頭鏡ヲ以テ直接ニ食道ノ粘液膜ヲ視察スルノ法ニ由テ之ヲ成功セリ然レトモ之ニ在テハ視野十二「センチメーテル」ヲ超ユル能ハサルノミナラス殊ニ器械ノ使用困難ナルニ由リ今日ニ至ル迄世ニ行ハレス輓近「ミクリ

ッツ」「ライテル」及「ニッエ」氏ハ電氣照輝裝置ヲ應用シ大ニ良功ヲ得タルカ如シ然レ𪜈其眞價ニ至テハ猶實地上ノ成績ヲ俟ツニアラサレハ未タ遽カニ決シ易ラサルナリ

食道氣管ト連通セル𪜈ハ喉頭鏡ハ診斷上頗ル有用トナルモノニメ「オベルニール」氏嘗テ一實驗ニ由テ之ヲ證セリ即チ氏ノ實驗セルハ食道左氣管枝ト自由ニ交通セルモノニメ試ニ炭粉ヲ水ニ混シテ飲下セシメ次テ喉頭鏡ヲ以テ氣道ヲ檢セシニ其深部ニ於テ炭粉ヲ發見セリト云フ此ノ如キ症ニ於テハ屢乳汁ノ如キ有色液ヲ飲下セシムルニ由リテ之ヲ知リ得ヘキ「アリ即チ此際飲液ノ一部氣道內ニ竄入シテ咳嗽ヲ促シ咯出セラルヽナリ

(ロ) 食道ノ觸診 *Palpation der Speiseröhre.*

(消息子檢査) *Sondenuntersuchung.*

食道ハ口腔ヨリ手指ヲ送入スルモ直接ニ之ニ觸ルヽヲ得ス是レ食道ノ始部ハ齒列ヨリ凡ソ十五「センチメーテル」後際ニ位スルヲ以テ示指若クハ中指ノ長サ玆ニ達スルニ足ラサレハナリ

頸部食道ノ或ル重大ナル變化ノ皮下ニ觸知セラルヽ「アルハ既ニ前文ニ記載セル所ニメ吾人ハ更ニ玆ニ皮下氣腫ノ發生ヲ附記セントス抑モ此症ハ食道壁斷離ノ貴要ナル徵候ニメ空氣食道內ヨリ縱隔膜腔蜂窩織內ニ竄入シ之ヨリ上方頸部ノ皮下ニ出テ次テ廣部ニ瀰蔓スルモノニメ經驗ニ徵スルニ其發生ハ食道壁ノ俄然破裂スルニ由ル「多ク漸次ニ穿孔セルモノナル「稀ナリ此氣腫ハ一種捻髮音樣ノ感覺アルト其他屢局部ノ皮膚腫脹セルトニ依リテ之ヲ鑑識スル「多クハ容

易ナリトス

時トシテ嚥下作用右橈骨動脈ノ脈搏ニ影響スルヿアリテ或ハ之ヲ微弱ナラシメ或ハ全ク消失セシム是レ右鎖骨下動脈ノ起始異常ニシテ左鎖骨下動脈ノ後際ニ於テ始テ大動脈弓ノ後側ヨリ發出シ脊柱及食道間或ハ稀ニハ食道及氣道間ヲ過キテ右方ニ走行スルモノニ於テ之ヲ見ルモノニシテ其發生ハ嚥下毎ニ一時血管ノ壓迫セラルニ依ルヤ明カナリ

食道ノ理學的診査法ニ數般アリ就中食道消息子ヲ以テ介達ニ食道ヲ觸診スルノ法ハ診斷上殊ニ緊要ナリトス

食道消息子ハ鯨骨ヨリ製作セル橈屈性桿條ノ前端ニ圓錐狀若クハ橄欖實形ノ小頭或ハ海綿ヲ附着セルモノニシテ(第百七十六圖)實地上ニ於テハ頭部ノ大小各異ナレル數箇ノ消息子ヲ備フルヲ便トス但消息子

ヲ使用スルニ當テハ先ツ小頭若クハ海綿ノ鯨骨桿ニ固着セルヤ否ヤヲ檢スルハ決シテ之ヲ忽ニスヘカラス何トナレハ若シ然ラサルトキハ食道ヨリ消息子ヲ拔去スルノ際小頭若クハ海綿食道内ニ殘留シ之ニ由テ頗ル危險ニ陷ルヿアレハナリ又海綿ハ消息子ヲ送入スルニ先チ必ラス微温湯中ニ於テ之ヲ柔軟トナサヽルヘカラス然レトモ元來海綿ハ之ヲ清潔トナスヿ頗ル困難ナルノミナラス好テ食道内容ヲ吸收シ其内容ハ海綿中ニ凝着スルノ弊アルヲ以テ近世外科學ニ於ケルカ如ク之ニ在テモ亦海綿ノ使用ヲ廢止スルニ至レルハ亦故ナキニアラサルナリ

食道消息子中最モ弘ク行ハルハ所謂英製消息子ニシテ橈屈シ易キ褐赤色ノ長キ空管ヨリ成リ前端ハ圓錐狀ニ狹小シ其上部ニ二箇ノ卵圓形ノ窓孔ヲ有ス就中一窓孔ハ對側ニ於ルモノヨリ稍〻高處ニ在リ又黑色

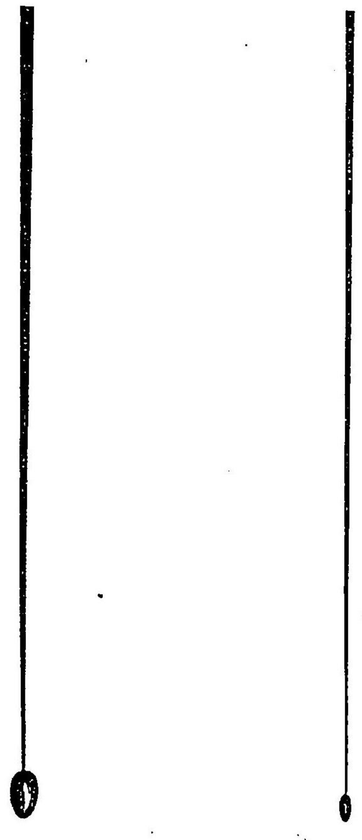
消息子所謂佛製食道消息子アリト雖モ破損シ易キヲ以テ稱用スヘキモノニアラス(第百七十七圖)

「マッケンヂー」氏ハ近世卵形ヲ爲セル食道消息子ヲ稱用セリ蓋食道ノ横斷面ハ元來卵形ヲ呈スルニ基クナリ其他屢〻食道ノ檢索ニ腸線「ブージー」ヲ用ヒ又時トシテ模型消息子ヲ使用セシコトアリ

消息子ヲ使用スルニ當テハ先ツ其前部四分一ヲ温湯中ニ浸シテ之ヲ柔軟ト爲サヽルヘカラス然レモ沸湯ハ消息子ノ滑澤ナル表面ヲ粗糙ナラシメ且皺裂セシムルヲ以テ用ユヘカラス又消息子ノ前端ハ鈍圓ナラサルヘカラサルハ固ヨリニシテ若シ尖鋭ナル片ハ容易ニ損傷ヲ喚起スヘシ又消息子裂痕ヲ有スルカ或ハ表面粗糙トナレル片ハ速ニ之ヲ廢棄セサルヘカラス然リ而シテ其前端ニ脂肪質ヲ塗布スルハ其送入ヲ頗ル容易ナラシムルモノニシテ余等ハ虞利設林ヲ使用セリ是レ其味

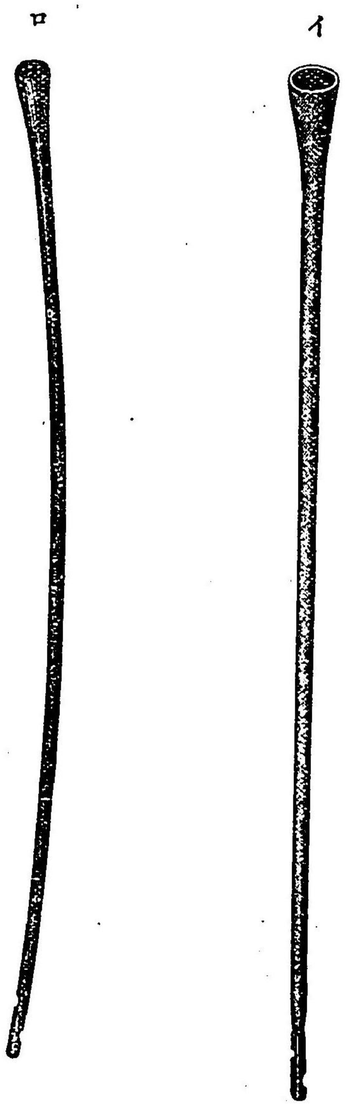
第百七十六圖

橄欖實形ノ象牙製小頭ヲ有スル鯨骨消息子四分一大



第百七十七圖

食道消息子
〔イ〕英製
〔ロ〕佛製
四分一大



ノ油類ヨリ佳良ナルニ由ルナリ單ニ水ヲ以テ之ヲ濕スハ屢〻十分ナラサル「アリ之ニ反シ「トルーソー」氏ノ考案ノ如ク卵白ハ亦使用ニ勝ユルモノトス

食道ヲ精密ニ診査スルニ當テハ屢〻厚徑各〻異ナレル數種ノ消息子ヲ要スル「アリ然レ𪜈其厚徑ハ上記食道ノ尺度ニ從ヒ決メ十八「ミルリメーテル」ヲ超ユヘカラス

初回ノ消息子檢査ハ殆ト諸患者ヲメ甚シク苦惱セシムト雖𪜈患者漸次ニ異物ノ刺戟ニ慣ルヽニ從ヒ容易ニ之ニ耐ユルニ至ルヲ常トス而メ初メハ患者頻リニ絞扼運動ヲ起シ烈シキ呼吸困難ニ陷リテ蒼身症症狀ヲ現ハシ又恐怖ヨリ强ク醫ノ手指若クハ消息子ヲ咬嚙シ屢〻醫ノ手腕ヲ把握シテ消息子ト共ニ之ヲ排除セントシ又突然椅子ヨリ跳立シテ頻ニ頭首ヲ彼此ニ震搖シ以テ檢査ヲ逃レントスル「アリ加之嘔

吐ニ由テ胃腑ノ内容ト共ニ消息子ヲ逆出スルヿ稀ナラス總テ此等ノ苦惱ハ檢者術ニ慣レサル片殊ニ甚シキハ言ヲ要セサルナリ之ニ反シ消息子ノ送入快手ニメ且正確ナル片ハ之ヲ減少セシムルヿ尠カラス之ヲ要スルニ消息子ノ送入ニ先チ豫メ患者ニ其方法ヲ說キ且檢査ノ不快ノモノタルヲ知ラシムルハ大ニ檢査ヲ便ナラシムルモノトス蓋患者醫ノ診査法ニ曉通セルヲ知悉スル片ハ其信ヲ醫ニ措クノ情愈〻強厚トナルモノナレハナリ其他患者外見上苦惱ノ狀ヲ呈スルモ大抵檢査ヲ中止スルヲ要セスト雖モ若シ嘔吐スル片ハ後章論スル理由ニ依リ注意スル所ナカルヘカラス

消息子ハ通常口腔ヨリ送入スルモノナレモ患者開口ヲ肯セサル片ハ止ムヲ得ス鼻孔ヨリ中鼻道ヲ通過シテ之ヲ送ラサルヘカラス而メ口腔ヨリ送入スル際ハ患者坐位ヲ爲スヲ要スルモ鼻孔ヨリスル片ハ背

位ヲ爲サシメ且頭首ヲ強ク後屈セシムルヲ便トス

口腔ヨリ行フ食道ノ消息子檢査ハ次ノ方法ニ依リテ遂クルヲ得ヘシ

即チ

患者ヲ對坐セシメ頭部ヲ少シク後屈シテ可及的濶ク開口セシメ且舌ヲ挺出セシム若シ檢査ノ際咬嚙セラルヽノ惶レアル片ハ上下齒列間ニ厚キ「コルク」片ヲ箝挿スルヲ要ス是レ許多ノ患者ニ於テ檢査ノ不快ヲ減スルカ故ニ直チニ患者自ラ之ヲ請求スルニ至ルモノトス此ニ於テ醫ハ左手ノ示指ヲ患者ノ舌背ニ載セテ成ルヘク後方ニ送入シ指尖ノ會厭ニ抵觸スルニ至リ次テ右手ノ摂、示、中ノ三指ヲ以テ筆ヲ執ルカ如ク豫メ柔軟トナシ脂肪ヲ塗布セル消息子ノ前端ヲ把リ左手ノ示指ヲ導子トシテ之ヲ咽頭後壁ニ向テ送入シ今ヤ消息子ノ外端ヲ強ク扛擧スル片ハ其尖端手指ヲ超ヘテ食道ノ入口ニ轉入ス此際少シク消息

子ノ前端ヲ壓スルトキハ其送入容易トナルヿ時トメ之アリ是ニ於テ注意シ且可成的快手ニ消息子ヲ下方ニ送ルヘシ然レモ粗暴ナル衝突ハ力メテ之ヲ避ケサルヘカラス而メ若シ障碍ニ逢着スルヿアルトキハ消息子ヲ稍退引シ更ニ注意シテ之ヲ推送スヘシ往々消息子突然絞縮セラレ其送入妨害セラルヽヲ感スルヿアリ是レ多クハ消息子ノ刺戟ニ由ル食道筋纖維ノ痙攣ニ他ナラス此際強ヒテ消息子ヲ送入セントスルトキハ徒ラニ筋纖維ノ痙攣ヲ强劇ナラシムルニ過キサルヲ以テ暫時間之ヲ靜置スヘシ然ルトキハ消息子頓ニ滑脫シ再ヒ容易ニ竄入スルヲ感スルナリ這般ノ筋痙攣ニ基因セル障碍ハ一回ノ檢査間數處ニ於テ遭遇スルヿ敢テ稀有ナラス

消息子送入ノ障碍依然去ラサルトキハ細小ナル者ヲ撰用セサル可ラス

ノ時トメハ非薄ナル腸線「ブージー」ノ使用ヲ要スルヿアリ此ノ如キ際ニ於テハ障碍部ヲ通過スル消息子ノ厚徑ニヨリ畧障碍ノ度ヲ測知スルヲ得ヘク又消息子ノ長サヨリ其部位ヲ決定スルヲ得ヘシ而メ消息子食道上部ノ障碍ヲ通過シ得ルモ深部ニ於テ更ニ其送入抑止セラルヽトキハ以テ狹窄ノ數處ニ存スルヲ察スルニ足ルナリ

食道ノ消息子檢査ハ時トメ危險ナキニアラス且顯著ナル障碍ヲ兼ヌルヿアリ今其最モ頻數ナルモノヲ次ニ揭載セサルヘカラス

食道ノ消息子檢査ヲ爲スニ當リ每回先ツ胸部大動脈動脈瘤ノ存在セサルヲ證スルニアラサルヨリハ決メ之ヲ行フヘカラス蓋大動脈ト食道トハ接近セルヲ以テ胸部大動脈動脈瘤ニ於テハ食道ノ經路變位セラルヽヿ稀ナラス此際若シ食道及動脈瘤ノ壁質甚シク非薄トナレルトキハ食道消息子ヲ以テ食道ヨリ動脈瘤ヲ鑽刺シ大出血ニ由テ卒死セシムルヿナキニアラス然レモ斯ノ如キ症ニ於テハ多クハ其搏動消息

子ニ傳達シ醫ヲシテ其大動脈瘤ナルヲ注意セシムルモノトス

食道消息子ヲ喉頭內ニ送入スルハ通常世人ノ恐怖シ又教科書中記載セルカ如ク危險ナルモノニアラス其理會厭ハ消息子送入ノ際直チニ喉頭入口ヲ蓋ヒテ之ヲ鎖セハナリ加之若シ誤テ消息子喉頭內ニ竄入スルヿアルモ患者劇シキ咳嗽ヲ發シ呼吸困難及窒息ノ危險ニ陷ルト吸氣每ニ空氣叱聲ヲ放テ消息子內ニ竄入スルトニ依リテ之ヲ徵知スルヿ敢テ難カラサルナリ其他消息子聲帶間ニ到達スルトキハ患者高聲ヲ發スルヲ得サルニ至ル

然レモ殊ニ實扶的里後ニ發スルカ如ク會厭麻痹シ且喉頭粘液膜ノ知覺脫失セルトキハ其危險大ナリトス何トナレハ之ニ在テハ喉頭ノ入口常ニ開放セルヲ以テ食道消息子容易ニ喉頭內ニ達シ而シテ喉頭粘液膜ノ知覺脫失ニ由リテ咳嗽缺如セルカ故ニ不注意ナル醫ニ於テハ屢〻其

道ヲ失セルヲ發見シ得サレハナリ斯ノ如キノ際喉頭鏡ヲ以テ之ヲ檢査セハ直チニ釋然タルヲ得ヘク或ハ消息子外口ノ前際ニ蠟火ヲ來ストキハ炎火ノ吸期及呼期ニ應シ震搖スルニ依リ消息子尖端ノ喉頭入口內ニ在ルヲ知ルヘシ然レモ「エンミングハウス」氏ノ證明セルカ如ク消息子、胸部食道內ニ在テ自由ニ運動シ得ル間ハ胸腔內ニ發現スル諸般ノ壓力ノ關係ニ從フモノニシテ許多ノ人ニ於テ深呼吸ノ際緩徐ニ消息子ヲ送入シ其前端胸部食道ニ達スルトキハ叱性吸期的吸啜音ヲ聽取シ加之上記ノ蠟炎現象モ亦之ヲ發生セシムルヲ得ヘシ故ニ管リ此症候ヲ以テ消息子ノ氣道內ニ竄入セルトナスハ頗ル粗滌タルヲ免レス」

其他消息子ノ尖端胃腑內ニ在ルノ際嘔吐及咳嗽運動ニ由リテ空氣劇シク衝出スルヿアリ宜シク消息子內ノ呼吸的氣流ト誤ルヘカラス

「ローゼンバッハ」及「シュライベル」氏ノ說ニ從ヘハ胃腑ニ於ル壓力ノ關

係ハ胸部食道ニ於ルモノニ異ナラスト云フ又「シュライベル」氏ハ噴門ノ位置ヲ診定セントシ消息子ノ前端ニ謹謨性氣球ヲ繫着シ消息子ト共ニ胃腑内ニ送入スル後之ヲ吹脹シ次テ消息子ヲ退引シ其際障碍ヲ感スル部ノ何處ナルヤニ注目スルノ法ヲ行ヘリ蓋噴門ハ膨脹セル氣球ノ出路ヲ閉塞スルカ故ニ拔出ノ際障碍ヲ感スルノ部ハ即チ噴門ナリトス

「マルチュース」氏ハ輓近食道消息子ヲ食道内ニ送リ其前端ニ「マレイ」氏匣及描寫器ヲ連繫シ以テ食道及氣管枝間ノ瘻孔ノ存在ヲ證明セリ蓋健康體ニ在テハ描寫槓桿吸氣毎ニ低下シ呼氣毎ニ上昇スト雖モ之ニ在テハ吸氣ノ際空氣氣管ヨリ瘻孔ヲ通過シテ食道内ニ竄入スルカ故ニ初メニ低下セル槓桿再ヒ上擧シ之ニ由テ吸氣及呼氣間ニ於ル高低ノ差減少スルニ至ル

咽頭先天性ニ甚シク狹隘トナレルトキハ消息子ヲ氣道内ニ竄入シ易ラシムルモノニシテ「チュプレイ」氏ハ嘗テ此ノ如キ症ニ於テ喉頭鏡ヲ以テ消息子ノ假道ニ竄入セシヲ發見セルノ實驗ヲ報セリ但此際偶〻臭素加里ヲ使用セシカ爲メ同時ニ喉頭粘液膜ノ知覺甚シク鈍麻シ這般ノ過失ヲ招キシト云フ

環狀軟骨ノ肥厚及化骨ハ往々食道ノ消息子檢査ヲ遂クルヲ得サラシムルヿアリテ嘗テ「トラーウエルス」及「ウェルンヘル」ノ両氏ハ之カ好例ヲ記載セリ此肥厚セル軟骨ハ食道ノ始部ヲ狹窄セシメ終ニ饑死ニ陷ラシムルカ如キ高度ニ達スルモノアリ此ノ如キ症ニ於テハ時トメ喉頭ヲ前方ニ低下セシメ之ニ由テ食道ニ到ルノ通路ヲ得ルヿアリ

消息子檢査間ニ發起スル嘔吐ハ全ク危險ナキニアラス嘗テ「ブランヘ」氏ハ精神病患者ニ於テ吐物ノ一分喉頭内ニ竄入シ之カ爲メニ窒息ヲ

起シテ倒レタルノ實驗ヲ報セリ又「エンミングハウス」氏モ是ヨリ嚥下肺炎ヲ發セルモノヲ見タリト云フ

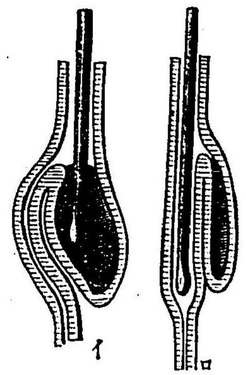
終リニ臨ミ猶少シク假道ノ甚タ危險ナルヲ記載セントス則チ若シ食道ニ障碍アルモノニ於テ偶〻消息子檢査俄然奏功ヲ得ルトキハ假道ヲ作爲セルヲ意ハサルヘカラス此際通常危險ナル症狀ヲ發スルカ故ニ速カニ其過失ヲ發見スヘシ這般ノ假道ハ縱隔腔ノ組織、肋膜腔若クハ肺臟ニ最モ多キモノニシテ或人ハ消息子ノ尖端ヲ直接ニ肺腔洞中ニ鑽入セルヿアリシト云フ

次ノ諸點ハ食道ノ消息子檢査ニ於テ常ニ注意セスンハアル可ラス即チ

(一)疼痛感覺　食道ノ消息子檢査ニ於テ消息子、食道ノ一定部分ニ到ルヤ毎回疼痛ヲ起ストキハ該部ノ粘液膜ニ局所變化アルヲ示スモノニシテ多クハ炎症ナリトス又注意シテ檢査ヲ行フモ血液若クハ血線、消息子ニ附着シ來ルトキハ粘液膜ノ潰瘍ニアラサルヤヲ察セサルヘカラス

(二)憩室　食道ノ膨出スルヤ消息子ノ尖端憩室內ニ到達シ進行スルヲ得サルニ由リ消息子檢査甚タ困難トナルモノニシテ其際消息子ノ前部ヲ側方ニ移動スルトキハ尖端ノ廣濶ナル空隙內ニ在ルヲ感知スヘシ然レモ憩室ニ殊異ナル徵候ハ消息子憩室口ノ側方ヲ通過スルト室內ニ進入スルトニ從ヒ食道ノ檢査或ハ奏功シ或ハ否ラサルニ在リ又時トシテ消息子ヲ一定ノ方向ニ壓迫スルトキハ容易ニ送入シ得ルヿアリ之ヲ要スルニ憩室口愈〻廣濶ニシテ且憩室愈〻充盈スルトキハ消息子ヲ憩室內ニ送入スルノ危險亦愈〻大ナリ是レ「ツェンケル」及「フォン、チームセン」ノ模型圖ニ依リテ說明セル所ナリ(第百七十八圖)今之ニ據レハ憩室充盈セルトキ

第百七十八圖



食道憩室
（イ）充盈時ノ消息子送入
（ロ）空虛時ニ於テス
（「チームセン」及「ツエンケル」氏ニ由ル）

ハ其開口食道ノ長軸內ニ來ルヲ見ルヘシ故ニ憩室ヲ壓迫シテ其內容ヲ排除スルトキハ消息子檢査容易トナルナリ

（三）狹窄　消息子檢査ニ於テハ殊ニ狹窄ノ部位及强弱ヲ知ルヲ得ヘシ然レモ時トメ兼テ狹窄ノ性質ヲ診定シ得ルヿアリ是レ癌腫ニ基因セル狹窄ニ在テハ往々腫瘍ノ小部分消息子ノ窓孔ニ殘留スルヿアルヲ以テ之ヲ顯微鏡下ニ檢スルトキハ所謂癌腫葱即チ同心性層ニ疊セル磚

狀上皮細胞ヲ發見シ得ルヿアレハナリ故ニ消息子檢査ノ際消息子ニ附着セル物質ヲ注意シテ顯微鏡下ニ檢スルハ決メ忽ニスヘカラス又稀ニハ鵝口瘡菌ノ堆積ニ由テ食道ノ閉塞ヲ起スヿアリ之ニ在テモ顯微鏡檢査ハ閉塞ノ由ヲ來ル所ヲ示スモノトス其他狹窄ノ原因食道內ノ異物ニ由ルカ、食道壁ノ疾患ニ在ルカ將タ近接セル器關ノ側方ヨリ壓迫スルニ由テ發スルカハ既往症及爾他ノ病床的症候ニ據テ之ヲ決セサルヘカラス

狹窄部ノ形狀及長短ヲ側定スルハ內科ヨリ寧ロ外科ニ關係アルモノナリト雖モ亦此ニ一言セント欲ス抑モ狹窄部ノ形狀ヲ診斷セントスルトキハ模型消息子ヲ要スルモノニメ或ハ蠟製「ブーヂー」ヲ用ヒ或ハ「グッタペルカ」、「ブーヂー」ヲ用ユ共ニ狹窄部ノ形狀ヲ示スヲ用ヒ或ハ「グッタペルカ」、「ブーヂー」ヲ用ユ共ニ狹窄部ノ形狀ヲ示スヿ頗ル精密ナリ但使用ニ先テ溫湯中ニ浸シ之ヲ柔軟トナスヲ要

ス又「セント、マリー」氏ハ狹窄部ノ長短ヲ計測セントシテ一種ノ消息子ヲ按出セリ此消息子ハ前端ニ橄欖實形ニメ閉鎖セル壓縮性ノ硬護謨球ヲ有シ後端ハ劃度アル硝子管ニ終リ其零點ニ到ル迄着色液ヲ盈タセリ今此消息子ヲ食道内ニ送入スルニ橄欖球、狹窄部ニ達スルヤ壓迫セラルヽニ由リ液質硝子管内ニ上昇シ狹窄部ヲ通過スルヤ零點ニ復ス故ニ推送セル消息子ノ長サヨリ直チニ狹窄部ノ長サヲ測定シ得ヘシ又「フェリー」氏モ同一ノ方法ニ依リ一種ノ消息子ヲ構製セリ是レ「センチメーテル」度ヲ劃シ尖端ニ金箔製ノ小囊ヲ裝セル消息子ニメ先ツ之ヲ狹窄部ニ到ル迄送リ送入セル消息子ノ長サヲ檢定シ次テ狹窄部ヲ通過セシムヘシ其際金箔囊ハ凋萎スルナリ既ニ狹窄部ヲ通過シ終ラハ更ニ小囊ヲ吹脹シテ狹窄部ノ下端ニ抵觸スルニ至ル迄消息子ヲ退引シ此ニ於テ

送入セル消息子ノ長サヨリ最初ニ測定セル長サヲ減スレハ得數ハ即チ狹窄部ノ長サヲ示スナリ

痙攣性ノ食道狹窄ハ之ヲ解剖的狹窄ヨリ區別セサルヘカラス此症ハ既ニ單一ナル消息子檢査ノ際發スルヿアルモノニメ神經性ノ人ニ在テハ一種ノ疾患トナリテ現ハル然レ𪜈多クハ消息子ヲ以テ之ヲ驅除シ得ヘシ殊ニ消息子ヲ若干時食道内ニ放置スル𪜈ニ然リ

(四)食道ハ狹窄部ノ上際ニ於テ擴脹スルヿアリ又食道筋ノ麻痹ニ於テハ其擴脹大部ニ瀰ル此症ハ消息子ノ側方運動甚タ容易ナルヲ以テ知ルヘシ

(八) 食道ノ打診 *Perkussion der Speiseröhre.*

打診ハ食道ノ診査ニ於テ唯稀ニ應用セラルヽニ過キス而シテ頸部食道ノ憇室ニ於ル打診ハ既ニ前文之ヲ記載セリ若シ憇室更ニ深部ニ位スルトキハ脊柱ニ沿フテ限劃セル濁音ヲ呈スルヿアリ然レモ是レ憇室固形體ヲ充盈セルヿ見ル所ナリトス

「フオン、チームセン」氏ハ食道ノ狹窄ニ於テ酒石酸及重炭酸曹達ヲ水ト共ニ内服セシメ之ニ由テ狹窄部上際ノ擴脹部ヲ膨脹セシムルノ法ニ依リ打診ヲ容易ナラシメタリ而シテ其膨脹ハ鼓音若クハ濁性ノ鼓音ニ由テ之ヲ知ルヘキハ素ヨリトス

(二) 食道ノ聽診 *Auskultation der Speiseröhre.*

諸多ノ食道疾患ハ强盛ナル音響ヲ現ハスヿアルモノニシテ時トシテ若干ノ距離ヲ隔ツルモ猶聽取シ得ルヿアリ例之憇室充實スルノ際高朗ナル「グルレン」音「クワツチエン」音等ヲ聽取スルヿアルハ既ニ之ヲ記載セリ此等ノ雜音ハ充實セル憇室ヲ壓スルトキモ人工的ニ喚起セシムルヲ得ヘシ

若シ食道筋麻痺ニ陷ルトキハ嚥下ノ際强盛ナル喧燥(ボルヂルン)音、含嗽音、及旋轉(コルレルン)音ヲ放ツヲ常トス古人ハ之ヲ嚥下困難又發音性嚥下 *Dysphagia s. deglutitio sonora.* ト稱セリ

始テ食道ノ直達聽診ニ基礎ヲ開キシハ「ハムベルゲル」氏ニシテ其目的ニ從ヒ頸部ニ於テハ左側ニシテ氣管ノ後際ニ、第六胸椎ニ至ルノ上胸部ニ於テハ脊柱ノ左側之ヨリ下部ニ於テハ其右側ニ聽胸器ヲ貼セリ此診査法ハ或ル狀態ニ於テハ頗ル喫緊ナリト雖モ「ハムベルケル」氏ハ過度ニ之ヲ妄認シ却テ其用ヲ誤リ爲メニ此診法ヲ害セシハ甚タ遺憾ナリ

ト云フヘシ

此診査法ヲ行ハントセハ先ツ患者ニ少量ノ水ヲ含マシメ豫メ敎示セル信號ト共ニ之ヲ嚥下セシムヘシ而メ其信號ハ或ハ短小ナル命令詞ヲ以テスルアリ又或ハ「ハムベルゲル」氏ノ例ニ倣ヒ舌骨ヲ壓スルモ可ナリ就中乙法ニ在テハ舌骨ノ上擧スルニ依リテ嚥下ノ初起ヲ知ルヲ得ヘシ之ニ由テ聽診ノ際嚥下ノ遲速ヲ判定シ得ルヲ以テ優レリトス」

健康ナル食道ヲ聽診スル片ハ到ル處短クメ明朗ナル「グルックス」音ヲ聽取スルモノニメ其性各人虛嚥ノ際自己ノ耳內ニ感スル雜音ニ酷似セリ此雜音ハ聽診ノ部位高キニ從ヒ愈清朗ナリトス

食道ノ狹窄ハ聽診音ニ著明ナル變化ヲ起スモノニメ狹窄部ノ下際ニ於テ雜音或ハ全然消失シ或ハ久時ヲ經ルノ後現出シ又或ハ著シク減弱シ其性質變化スルヲ見ル蓋食道聽診ノ本原トスル所實ニ玆ニ在ル

ナリ「ハムベルゲル」氏ノ說ニ消息子檢査ニ於テモ亦消息子ノ狹窄部ニ於テ摸スルカ如キ雜音ヲ放ツヲ聽取セリト云フ

健全ナル食道ニ於ル雜音ハ飲食物ノ粘液膜面ヲ擦過スルニ由テ發スルモノトナサヽルヘカラス然レモ「セント、マリー」氏ハ之ヲ以テ空虛ノ際接着セル食道ノ粘液膜面飲食物ヲ嚥下スルノ際互ニ離開スルニ由テ發スルモノトセリ

嚥下間及嚥下後胃窩ヲ聽診スル片ハ「クロチツケル」及「メルツエル」氏ノ說ノ如ク二種ノ雜音ヲ聽カン則チ一ハ竄透雜音 *Durchspritzgeräusch.* ニメ一ハ壓窄雜音 *Durchpressgeräusch.* ナリ或人ハ是等雜音ノ變化モ亦食道疾患ノ診斷上ニ應用セントセリ然レモ其發生幷ニ病理上ニ於ル關係ニ就テ諸家ノ說ク所互ニ矛盾セリ例之「エワルド」氏ハ第二雜音ヲ以テ嚥下作用ニ關スルモノニアラスメ却テ胃腑ヨリ

發生セルモノト爲セルモ「フレンケル」氏ハ之ヲ非議セリ而メ「フレンケル」氏ノ說ニ從ヘハ此第二雜音ハ食道ノ麻痹ニ於テ其發現遲延シ(通常ハ嚥下後六乃至七秒時ナリ)且非常ニ持長スルモ食道ノ狹窄ニ於テハ兩雜音毫モ變化ヲ被ルヿナシト云フ然レ𪜈胃腑充實セル片ハ第二雜音消失スルモノトス(「メルツェル」氏)

第四節　胃腑ノ診査　*Untersuchung des Magens.*

(イ)　胃部ノ視診　*Inspection der Magengegend.*

健康體ニ於テハ胃部ヲ視診スルノ際通常注意スヘキモノナシ然レ𪜈瓦斯稀ニハ過剩ノ食物ニ由リテ胃腑急性ニ變廣スルカ若クハ胃擴脹ニ於ルカ如ク慢性ニ變廣セル片ハ通常上腹部著ク前方ニ隆出シ多少膨脹セルノ看ヲ呈スルニ依リ既ニ之ヲ目視シ得ヘシ而メ胃擴脹ニ於テハ這般ノ著明ナル膨大多クハ臍下ニ達スルモノニメ此部ニ於テ恰モ胃大彎ノ經路ニ應シ下方ニ凸隆セル彎緣ヲ爲シテ終ル加之更ニ高度ノ症ニ在テハ大彎耻骨縫際ノ直上ニ存スルヿ時トメ之アリ然レ𪜈胃擴脹ハ常ニ斯ノ如ク顯著ナル症狀ヲ呈スルモノニアラス他ナシ腹部ノ膨出ハ胃腑ノ充盈殊ニ瓦斯ニ由ル胃腑膨脹ノ度ニ關スルモノナレハナリ然リ而メ胃腑ノ視診ハ常ニ背位ニ於テ行フヲ適當トス何トナレハ堅立位ニ於テハ腹筋ノ緊張ニ由リ變化ヲメ現出セシムルヿ十分ナラサレハナリ其他堅立位ニ於テハ不明ナルモ斜照法ヲ以テスル片ハ胃腑ノ周緣ヲ發見シ得ルヿ時トメ之アリ又往々「ブーロー」氏ノ報告セル如ク胃腑ノ膨脹頗ル著明ニメ左側ノ假肋骨外方ニ隆出

スルヿアリ

胃ノ小彎ハ肝臓左葉ヨリ被覆セラレ通常視診スルヲ得サルモノトス

然レ𪜈胃腑非常ニ低下スル片ハ肝臓下縁ノ下ニ膨出シ目視シ得ルニ至ル

胃腑ノ下界ハ健康體ニ於テモ「フオン、ブレーリヒ」氏ノ法ニ倣ヒ炭酸ヲ以テ胃ヲ膨脹セシムル片ハ通常人工的ニ之ヲ視察シ得ヘシ而メ此胃腑ノ膨脹ハ人造「セルテル」水ヲ用ユルモ能ク之ヲ達スルヲ得ヘシト雖𪜈更ニ便ナルハ被檢者ニ二茶匙ノ酒石酸ヲ適宜ノ水ニ溶解シテ之ヲ內服セシメ直チニ同量ノ重炭酸曹達ヲ亦水ニ和シテ飲用セシムルノ法トス此法ヲ以テスル片ハ一二秒時ニメ上腹部漸々外方ニ膨隆シ臍ノ上部ニ於テ下方ニ向ヒテ穹窿セル周緣之カ境界ヲ爲スヲ見ルナリ但其穹窿緣ノ中線ニ於ル位置ハ各人ニ從ヒ異ナルモノニメ時トメ臍

部ニ達スルヿアリト雖𪜈多クハ二乃至五「センチメーテル」許其上部ニ位スルモノトス

重炭酸曹達及酒石酸ハ多量ニ用ユヘカラス若シ其量多キニ過クル片ハ容易ニ泡沫液ヲ吐出シ或ハ呼吸困難、苦悶、輕度ノ蒼身症及疾脈ヲ起スヿアリ凡テ此等ノ發症ハ膨滿セル胃腑ノ爲メニ横隔膜ノ運動障碍セラレ同時ニ横隔膜幷ニ心臓壓上セラルヽニ由テ發生セル者ナルヤ明カニメ數回ノ嗳氣ニ依リ數分時內ニ消散スルモノトス殊ニ胃消息子ヲ送入スル片ハ速カニ瓦斯ヲ驅逐シ其苦惱ヲ除去スルヲ得ヘシ

近世「フオン、ブレーリヒ」氏ハ次ノ如ク胃腑ヲ膨脹セシムルノ法ヲ變更セリ即チ柔軟ナル胃消息子ヲ胃腑內ニ送致シ硬護謨球ヲ以テ其外端ヨリ空氣ヲ胃中ニ吹送シタリ然レ𪜈余等ハ此變法ヲ以

テ精密ナルモノトル又醫家幷ニ患者ニ便ナルモノトナスヲ得ス」

炭酸瓦斯ヲ以テ胃腑ヲ膨滿セシムル「フォン、フレーリヒ」氏ノ診査法ハ胃病ノ診斷ニ當リ頗ル樞要ナルモノトス蓋此法ニ依ルトハ啻ニ胃腑ノ大小及形狀ヲ診定シ得ルノミナラス兼テ幽門閉鎖力ノ如何ヲ徵知スルヲ得ヘク且胃ノ膨脹スルヤ其表面ノ大部腹壁ニ觸接スルカ故ニ屢胃腫瘍ノ診斷容易トナルナリ

胃擴脹ニ於テ豫メ炭酸ニ由テ之ヲ膨滿セシムルトハ其境界頗ル明瞭トナルモノニシテ大彎ハ固ヨリ臍下ニ位シ兼テ甚シク左右ニ膨大ス」

余嘗テ一二回生活間胃腑、大彎ノ殆ト中央ニ位スル深截痕ニ由テ沙漏時辰機形ヲ呈セルモノヲ實驗シ剖檢ニ依テ之カ診斷ヲ確證スルヲ得タルコアリ

時トシテ胃腑ノ膨脹スルヤ直チニ瓦斯小腸幷ニ大腸ヲ充盈シ之ニ由テ

全腹部緊滿スルヲ見加之外見上胃腑ノ膨滿殆ト缺如シ唯リ小腸ノ急性膨脹ノミヲ現ハスコアリ是レ「エブスタイン」氏ノ注目セル處ニシテ幽門ノ閉鎖不能ニ由リテ瓦斯胃腔ヨリ直チニ腸中ニ竄入セルノ徵ニ他ナラストス此幽門閉鎖不能症 *Incolantinentia pylori.* ハ多クハ潰瘍若クハ癌腫ノ爲メニ幽門筋毀損セラルヽニ由リ發生スルモノナリト雖モ稀ニハ劇甚ノ加答兒後ニ發スル幽門筋ノ神經障害即チ弛緩ノ之カ原因タルコアリ然レモ幽門ノ生理的閉鎖不能ハ「クスマウル」氏ノ說ニ據ル ニ啻リ空虛ナル胃腑ニ於テノミ發生スルニ過キスト云フ

屢胃腑ノ蠕動ヲ認ムルコアリ絞窄及隆起相交代シテ波狀ヲナシ左方ヨリ右方ニ進行シ觸知シ得ルコ稀ナラス「フォン、バムベルゲル」氏ノ實驗ニ據ルニ絞窄ハ最初胃腑ノ中央ニ起リ之ニ由テ胃ハ殆ト8形トナリ次テ之ヨリ幽門及噴門ニ向テ走行スト云フ然レモ此運動時トシテ右方

又時トメハ左方ニ進ミ一定ノ規ヲ具ヘサルヿアリ而メ其發スルヤ或ハ自發性ナルヿアリ或ハ腹壁ノ敲打、冷水ノ灌注若クハ感傳電氣ノ刺戟ニ由テ初メテ之ヲ喚起シ得ルヿアリ要スルニ此現象ハ幽門ノ狹窄ニ於テ殊ニ屢〻遭遇スルモノナリト雖モ近世「クスマウル」氏ノ唱フル所ニ依レハ幽門ノ狹窄ナキモ單ニ一種ノ胃腑運動神經疾患ニ於テ亦現出スルヿアリト云フ但シ胃擴脹ニ於テ時トメ腸管胃壁ト腹壁トノ間ニ箝入シ亦蠕動樣ノ運動ヲ呈ハスヿアリ宜シク胃ノ蠕動ト誤ルヿ勿レ

時トメ胃腑ニ於テ胃ノ蠕動ヲ抑止スル一種ノ運動ヲ見ルヿアリ

（蠕動抑制性胃腑運動）

往々胃部ニ於テ平滑或ハ磊塊タル結節ヲ目視スルヿアリ殊ニ臍ノ右方ニメ稍〻其上際ニ於テ發見スルヲ多シトス是レ即チ幽門部ニ應スルモノニメ健康體ニ在テハ肝臟左葉ノ之ヲ覆フカ故ニ發見スルヲ得サルモ幽門尋常ヨリ低下セル片ハ明カニ之ヲ認知シ得ルナリ又凡テ胃腑ノ目視シ得ヘキ腫瘍肝臟ト癒着セサル片ハ呼吸ノ際其位置ヲ變セサルヲ常トス是レ胃ノ腫瘍ト肝臟及脾臟ノ腫瘍トノ同シカラサル所ナリ又時トメ胃腑搏動性ノ昇沈ヲ呈ハスヿアリ是レ腹部大動脈搏動ノ傳播セルモノニ他ナラス然レモ元來胃腑ノ位置ハ空虛ナルト充實セルトニ從ヒ變化アルカ故ニ其搏動性ノ昇降常ニ同樣ニ著明ナルモノニアラス這般ノ胃腑ノ位置變化ハ試ニ炭酸ヲ以テ胃ヲ膨脹セシム片ハ容易ニ證明シ得ヘクメ胃ノ腫瘍ト近傍器關ノ腫瘍トヲ辨別スルニ當リ其用尠カラストス

或人ハ屢〻直接ニ胃腑ヲ視診セントセリ例之「ミルリオット」氏カ電氣光ヲ胃腔內ニ送リテ胃壁ヲ透照セルカ如キ是ナリ又「ライテル」「ニ

ッツェ」ノ兩氏モ亦輓今胃鏡 *Gasteroskope.* ナルモノヲ製作セリ是レ亦電氣光ヲ應用セルモノニメ氏等ハ連斯裝置ニ由リテ直チニ胃粘液膜ヲ視察スルヲ得シト云フ然レ𪜈此等ノ試驗ハ實地上果メ幾何ノ功果ヲ有スルモノナルヤハ尚後來ノ成績ヲ俟ツニアラサレハ未タ遽カニ決スヘカラサルナリ

上腹部ニ於ル目視シ得ヘキ搏動ハ胃病ト直接ニ關係アルモノニアラス從テ胃病ノ診斷上其用アルヿナシ但其性質幷ニ診斷上ニ於ル關係ニ就テハ宜シク前章ヲ對照スルヲ要ス

(ロ) 胃腑ノ觸診 *Palpation des Magens.*

腹腔諸臓器ノ觸診其正鵠ヲ得ントセハ常ニ豫メ二三ノ規則ヲ服膺セスンハアルヘカラス即チ檢者ノ雙手ハ常ニ温暖ナラサルヘカラス若シ然ラサル片ハ被檢者反射的ニ腹壁ヲ緊張セシムルカ故ニ內臓ヲ通觸スルヲ得サルニ至ルナリ又手指ノ衝突狀運動ハ宜シク之ヲ避ケ力メテ緩徐ニ且連綿深部ニ壓入スルヲ要ス而メ可成的腹壁ヲ弛緩セシメンカ爲メ下肢ヲ股及膝ニ於テ屈曲シ短且速ニ呼吸セシムルヲ良トス其他被檢者ノ注意ヲ他ニ轉シ以テ腹壁ノ弛緩ヲ得ンカ爲メ醫ハ檢査問患者ト談話ヲ試ムルヲ良トス

觸診ノ際ハ殊ニ胃部ノ疼痛ニ注目スルヲ要ス而メ其疼痛ノ蔓延性ナルト限劃性ナルトハ以テ胃壁ニ於ル病竈ノ廣狹ヲ察スルニ足ルナリ

胃壁ハ健全ナル胃腑炭酸ヲ以テ人工的ニ膨滿セラルヽカ若クハ病的ニ擴脹セル胃腑、瓦斯ニ由テ强ク緊滿スル片ハ其一部ヲ觸知シ得ルモ

ノコノ然ルトキハ宛モ緊滿セル氣枕ニ牴觸スルカ如キ一種ノ抗抵ヲ感知スルナリ

爾他ノ狀態ニ於テハ通常胃腑其壁質ニ解剖的變化ヲ發生セルノ際唯リ之ヲ觸知シ得ルノミニノ殊ニ胃ノ癌腫變性ハ之ヲ觸ルヽ「最モ多ク又胃壁ノ瘢痕、胃筋肉ノ肥大モ亦之ヲ認ムル「ナキニアラス然レ𪜈胃壁ノ膿瘍ヲ腫瘍トノ感知シ得ル「アルハ頗ル稀有ナリトス時トノ胃腑內ノ異物亦觸知シ得ヘキ腫瘤ノ形狀ヲ呈スル「アリ嘗テ「ペスト」氏ハ三十歲ノ一婦人ニ於テ生前其臍部ニ硬ク滑澤ニノ移動性アル腫瘤ヲ感觸シ死後剖檢セシニ那ソ圖ラン九百「グラム」ノ重量アル毛髮ノ捆塊ナラントハ由テ仔細ニ既往ヲ尋チ患者十五歲ノ頃ヨリ毛髮ヲ嚥下スルノ習慣アリシヲ探知シ得タリト云フ又「ラッセル」「インマン」及「シェーンボルン」ノ諸家モ亦之ニ類似セル實驗ヲ報告セリ其他「コオヰケル」氏ハ凝結セル植物質ノ捆塊ニ因スル胃腑ノ假性腫瘤ヲ實驗セリト云フ

以上記載セル胃壁ノ諸變化ハ屢〻單ニ該部ニ於テ抗抵ノ增加ヲ呈スルニ過キサル「アレ𪜈他ノ狀態ニ於テハ之ニ反シテ精密ニ病變部ノ周圍ヲ計測シ得ル「ナキニアラス而ノ癌腫ニ於テハ多クハ結節狀ノ硬塊ヲ觸知スルモ筋肉ノ肥大ニ在テハ病變部屢〻滑澤ナルノ感ヲ呈ス然レ𪜈肥大獨リ幽門ノ筋肉ニ限劃スルトキハ假令腫瘍ノ壁質滑澤ナリト雖𪜈惡性腫瘍ニアラサルヤノ疑團ヲ招カシム

胃腑ノ腫瘍ハ通常之ヲ移動セシムルヲ得ヘシト雖𪜈呼吸ノ際決ノ變位スル「ナシ其理胃腑ハ延長性盛ンナルヲ以テ橫隔膜ヨリ壓迫セラルヽモ側方ニ擴脹シテ之ヲ代償スルニ在リ是ヲ以テ胃壁全然變性シテ其擴脹困難トナルトキハ亦呼吸的變位ヲ現ハスニ至ル「猶「ロイベ」氏

ノ實驗ニ於ルカ如シ又既ニ記載セルカ如ク胃壁ノ腫瘍近接セル肝臟ト癒着シ之ト共ニ運動スル𪜈ハ亦呼吸的移動ヲ現ハスヤ論ヲ要セス

然レ𪜈腹壁ハ吸期毎ニ膨脹スルカ故ニ胃腫瘍ノ表面ニ於ル腹壁ノ移動ヲ以テ腫瘍自己ノ運動ト思惟スヘカラス又胃ノ腫瘍搏動ヲ呈スルアルモ腫瘍單ニ昇沈スルノミニメ動脈癌ニ於ルカ如ク諸方ニ向テ膨大スルナキニ依リ其搏動ノ腹部大動脈ヨリ傳播セルモノナルヲ知ルヘシ

胃中同時ニ空氣及液質ヲ含有スルニ當リ雙手ヲ以テ衝突狀ニ震盪スル𪜈ハ打水響ヲ聽ク此際試ニ胃部ニ手掌ヲ妥貼スル𪜈ハ大ナル波濤ヲ感スヘシ此現象ハ全ク健康ナル者ニ於テモ之ヲ發セシムルヲ得ヘシト雖𪜈胃擴脹ニ於テハ殊ニ著明ナリトス「フェルベル」氏ハ此雜音ノ感觸ヲ以テ胃大彎ノ境界ヲ測定スルニ應用セントセリ是レ此雜音ハ大彎ノ下部ニ於テハ觸知スルヲ得サレハナリ

消息子ヲ以テ胃腑ヲ檢査スルハ亦一種ノ介達觸診ニメ玆ニ使用スル器械ハ食道ノ消息子檢査ノ條ニ記載セルモノヲ應用シ得ヘク唯之ニ在テハ較〻長キモノヲ要スルノ差アルノミ何トナレハ胃腑ノ檢査ニ於テハ消息子頗ル深部ニ達セサルヘカラサレハナリ而メ英製消息子ハ之ニ在テモ亦汎ク使用セラルヽモノトス

消息子檢査ニ於テハ噴門ノ位置、噴門ニ於ル狹窄及大彎ノ位置ヲ知ルヲ得ヘシ就中噴門ノ狹窄ハ噴門ニ於ル癌腫ニ殊ニ緊要ニメ爾他ノ診査法ヲ以テハ屢〻之ヲ檢出スヘカラサル「アリ又大彎ノ變位ハ胃擴脹ノ診斷ニ於テ殊ニ注意スヘキモノトス

胃腑內ニ送入セル消息子ヲ腹壁上ヨリ觸知シ得ルヲ證明セシハ「ロイベ」氏之カ嚆矢ニメ加之氏ハ腹壁及直腸ヨリノ雙合診ニ由テ對向セル

兩手指間ニ消息子ノ尖端ヲ受クルヲ得タリト然リ而シテ消息子ノ尖端胃ノ下壁ニ抵觸スルトキハ輕易ノ抗抵ヲ呈スルカ故ニ胃腑ノ消息子檢査ハ醫ニ大彎ノ位置ヲ推定スルノ方ヲ與フルモノト云フヘシ又「ロイベ」氏ノ發見ニ據ルニ健康體ニ於テハ消息子ノ尖端甚シキモ臍ノ高サニ於テ觸知セラルヽニ過キサレモ屍體ニ於テハ噴門ニ對向セル胃部ハ恰モ兩腸骨前上棘ノ結合線ニ到ル迄低下スト之ニ據テ氏ハ若シ生體ニ於テ消息子ノ尖端上記結合線ノ下部ニ在ルトキハ胃擴脹ノ存在亦疑フヘカラサルヲ論セリ

「ペンツォールド」氏ハ許多ノ健康體ニ就テ計測ヲ行ヒ消息子ハ幾何「センチメーテル」許胃腑内ニ送入シ得ルヤヲ檢シ之ヲ胃擴脹ノ診斷ニ應用セントセリ今氏ノ檢査セル成績ニ從ヘハ胃中ニ送入シ得ヘキ消息子ノ長サハ平均六〇「センチメーテル」ニシテ決シテ脊柱ノ

長サニ達セサルモ胃擴脹ニ罹レル三患者ニ於テハ其長サ殆ト七〇「センチメートテル」ニ及ヒ脊柱ノ長徑ニ同一ナリシト云フ

「ブルゲッツ」氏ノ行ヘル方ハ稍其趣ヲ異ニセリ則チ氏ハ消息子ニ氣壓計ヲ繫着シ之ヲ胃中ニ送入セシニ消息子食道内ニ存スルノ間ハ氣壓計陰壓ヲ示スモ横隔膜ノ食道孔ヲ通過スルヤ直チニ陽壓ニ變スト而シテ氏ノ說ニ依レハ健全ナル胃腑ニ於テハ尙之ヨリ二七乃至三〇「センチメーテル」送入スルノ後始テ消息子ノ尖端噴門ニ對向セル胃壁ニ抵觸セシト云フ若シ此說ノ如クナラシメハ之ニ由テ胃擴脹ヲ診定スルヿ敢テ難シトセス

「シュライベル」氏ハ消息子窓孔ノ上際ニ小護謨球ヲ連結シ消息子ト共ニ胃中ニ送入スル後之ヲ吹脹シ之ニ由テ胃腑ノ境界ヲ視察セントセリ

「ローゼンバッハ」氏ハ胃擴脹ヲ檢スルニ上口ニ護謨球ヲ具ヘタル消息子ヲ胃中ニ送入セリ則チ此際胃中ニ液質存在シ消息子ノ窓孔液面下ニ在ルトキハ空球ヲ壓迫シ傍ラ上腹部ヲ聽診スルニ濕性ノ大水泡性、鑛性水泡音及鑛性打水響ヲ聽取ス而ノ試ニ消息子ヲ少シク退却スルニ水泡性正ニ消失スルノ部ハ恰モ液面ニ應スルモノトス今胃腑ニ凡ソ一〇〇立方「センチメーテル」ノ液質ヲ注入スルニ胃腑健全ナルトキハ胃中ニ於テ液質ノ表面上昇シ胃ノ內容ヲ抽出スルトキハ液面直チニ低下スルヲ見ルモ若シ胃腑擴脹セルトキハ之ニ反シテ多量ノ液ヲ灌入スルモ液面僅カニ上昇スルニ過キス且屢直チニ沈降スルアリ「ローゼンバッハ」氏ハ之ヲ以テ胃腑ノ收縮力減衰セルモノトシ此診法ヲ著明ナル胃擴脹ノ前驅期即チ氏ノ所謂胃腑收縮不全症 *Mageninsufficienz.* ノ鑑識ニ應用シ得ルモノトセリ之ヲ要スルニ胃中ニ注入スルモ液面ヲ上昇セシメスノ却テ之ヲ低下セシムル液量ハ胃腑筋肉作業力ノ限界ヲ示スモノニ外ナラス

「ヤウォルスキー」氏モ亦「ローゼンバッハ」氏ノ診査法ヲ應用シ之ニ依テ容易ニ定量シ得ヘキ物質ヲ胃中ニ送入シ若干時ノ後胃內容ヲ抽出シ更ニ之ヲ定量スルニ先キニ注入セル物質ノ稀釋度即チ增量ハ胃中ニ存在セシ液量ナルヲ推斷スルモ大過ナキヲ證明セリ

(八) 胃腑ノ打診 *Perkussion des Magens.*

健全ナル胃腑ノ打診音ハ頗ル多般ニシテ或ハ皷音或ハ鑛性音或ハ濁音

若クハ鈍音又或ハ各種音響ノ混合セルモノナルヿアリ是レ胃内容幷ニ胃壁緊張ノ胃腑ノ打診音ニ大ニ關係アルヲ察セハ散テ怪ムコ足ラサル所ナリ且胃腑ハ自ラ擴脹シ又變狹シ得ルカ故ニ其打診音ハ容易ニ短少時間内ニ其高低及音樂的性質ヲ變スルヿアリトス加之各人ニ於ル胃腑ノ膨脹ハ各一定ノ最高度ヲ有スルト雖ヒ胃腑ノ境界ハ常ニ同一ナラサルハ覩易キノ理ナリ之ヲ要スルニ胃腑打診ノ至難ナルハ職トメ胃腑ニ於ル關係ノ斯ノ如ク複雜セルニ由ラスンハアラス

抑モ胃腑ハ底部ト共ニ左横隔膜穹窿部ノ凹處ニ在リテ全容積ノ殆ト六分五ハ中線ノ左側ニ位シ右側ニ於テハ唯六分一ヲ存スルアルノミ是レ胃腑ノ位置往時ノ説ノ如ク地平ナラスメ却テ鉛直ヲナスニアラサルヨリハ決メ發生スルヲ得サルナリ

食道ノ胃噴門ニ移行スルノ部位ハ其高サ常ニ同一ナラスメ多ク

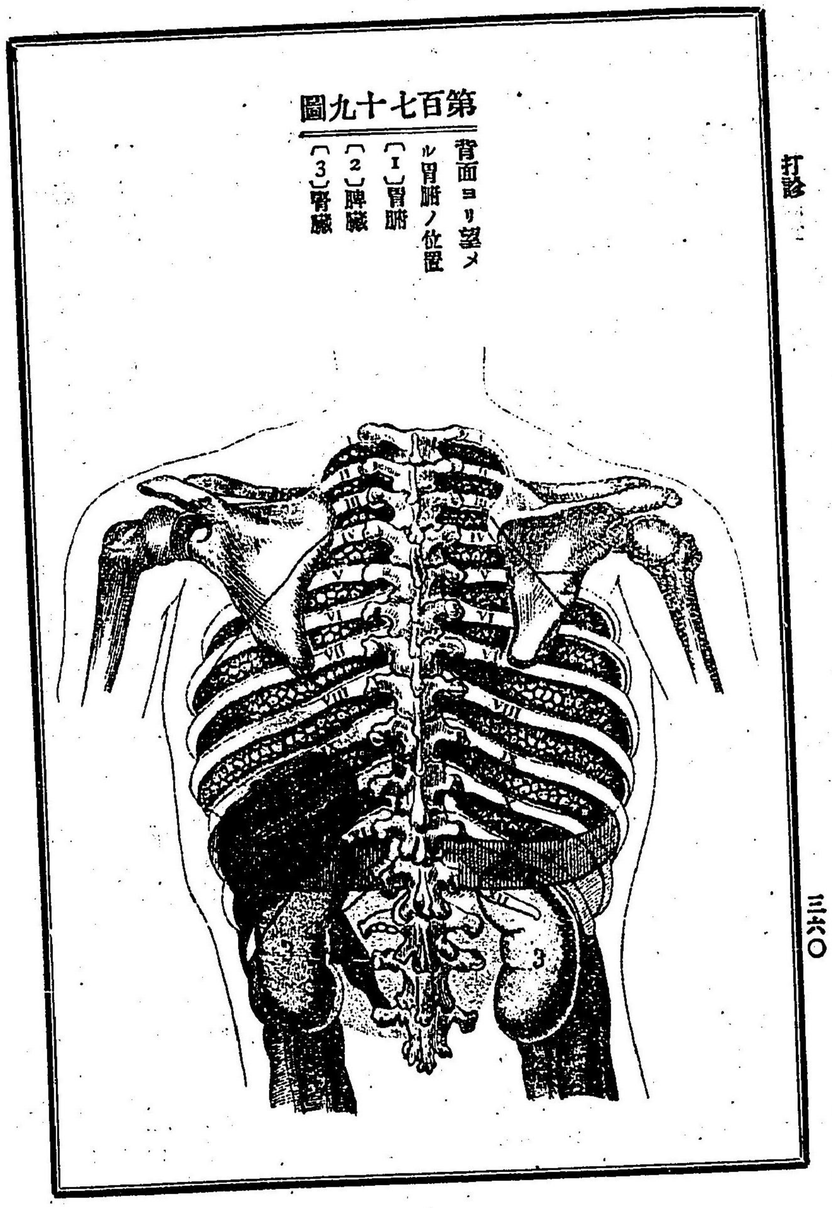
ハ第十一胸椎體ノ上緣ニ在リト雖ヒ時トメ第九胸椎ニ位スルヿアリ是レ殆ト左第七肋軟骨ノ胸骨附着部ニ應スルモノトス然レヒ決メ噴門ヲ以テ胃腑ノ最高點ト思惟スヘカラス蓋胃腑ノ最高點ハ胃底ノ穹窿部ニメ第九胸椎ノ高サニ位シ噴門始部ノ上際三乃至五「センチメーテル」許ニ在リ(第百七十九圖)

胃ノ小彎ハ始メ脊柱ノ左側ニ沿フテ鉛直ニ下行シ第一腰椎ノ高サニ於テ殆ト正角ヲナシテ右方ニ彎曲シ終ニ右側ニ至リ中線ノ近傍ニ於テ幽門ニ移行ス此小彎ハ全ク肝臓左葉ニ由リテ被覆セラルヽカ故ニ(第百八十圖)胃腑尋常ヨリ低位ニ位スルニアラサレハ直接ニ檢査スルヲ得ス

幽門ハ肝臓右葉ヨリ掩ハレ中線ノ右側ニメ之ヲ距ル殆ト四「センチメーテル」許ノ部位ニ在リ多クハ其側緣ヲ以テ第七、八肋軟骨ノ

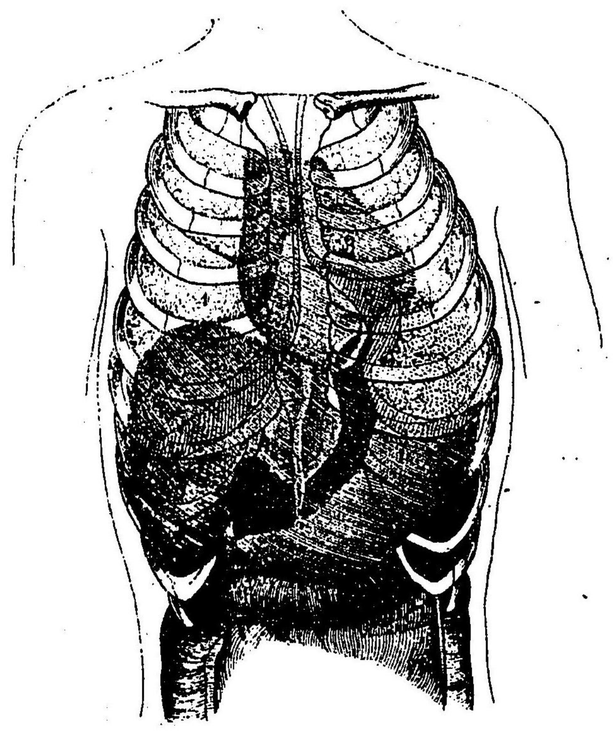
第百七十九圖

背面ヨリ望メル胃腑ノ位置
〔1〕胃腑
〔2〕脾臓
〔3〕腎臓



第百八十圖

前面ヨリ望メル胃腑ノ位置
〔1〕胃腑〔2〕肝臓〔3〕心臓
〔4〕肺臓〔5〕
孫備肋膜腔
〔6〕横行結腸



連合部ニ觸接シ(第百八十圖)噴門ヨリ低キヿ平均「七センチメーテル」トス故ニ幽門ノ疾患ハ幽門ノ異常ニ低下セル片ノミ直接ニ檢シ得ルニ過キス然リ而シテ幽門ハ決シテ胃腑ノ右端ニアラスシテ此點ハ却テ其下際ニ當レル胃幽門部ニ屬スルモノトス(第百八十圖)

胃ノ大彎ハ其左ヲ穹窿季肋部及前腹壁ニ向ケ上部ノ大部ハ肺臟之ヲ掩ヒ下部及前部ハ之ニ反シテ左季肋部及上腹部ニ位ス又中線ノ右側ニ於テハ漸次ニ上昇シ膽囊底ノ中線ニ沿フテ幽門部ニ移ル(第百八十圖)而シテ中線ニ於ル臍トノ距離ハ胃腑ノ盈虛ニ從ヒ一樣ナラスシテ充盈セル片ハ通常二乃至四「センチメーテル」ナリトス然レモ猶遠隔セルヿナキニアラス

胃腑ノ直接ニ打診シ得ル部ハ左季肋部及上腹部ノ直下ニ位セル胃部ニシテ胃前上壁ノ一部ニ應スルモノトス此部ハ胃腑瓦斯ノ爲メニ膨滿

セル片ハ上左方ハ肺音ノ鼓音ニ轉スルニ依リ側部ハ左前腋窩線ニ依リテ限境セラレ又上右界ハ肝臟濁音ノ鼓音ニ移行スルニ由リテ成ル其他下方ハ結腸之カ境界ヲナスト雖モ胃腑固形物ヲ含ミテ其鼓音鈍濁セルカ若クハ瓦斯ノ爲メニ微弱ニシテ高調トナレルニアラサレハ其境界ヲ打定スルヲ得ス故ニ胃腑ノ境界ハ三部ニ區別スルヲ得ヘシ即チ左上方ハ胃肺臟界、右上方ハ胃肝臟界、下方ハ胃結腸界ヨリ成レリ若シ肝臟左葉、心尖搏動部ニ到達セサル片ハ肺胃界ト肝胃界トノ間ニ猶心胃界アリテ存ス

茲ニ胃腑打診ノ困難ナルヲ論スルハ最モ適當ナリトス抑モ胃腑ハ全ク空虛ナルカ若クハ固形體ヲ以テ充盈セラルヽ片ハ其肝臟トノ境界ヲ區別スル能ハス加之若シ固體兼テ結腸ヲ充タス片ハ胃ノ下界亦決定スルヲ得ス又胃腑唯少量ノ瓦斯ヲ含有シ結腸瓦斯ヲ充盈セル片ハ

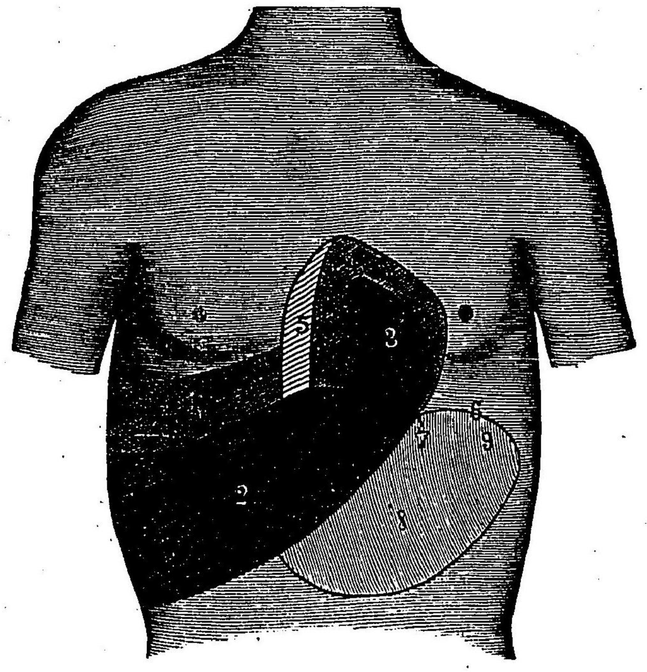
胃腸ノ鼓音全ク同一ニシテ胃ノ下界ハ亦之ヲ敲定スヘカラス然レ𪜈此ノ如キ際ニ於テ「フォン、ブレーリヒ」氏ノ法ニ倣ヒ炭酸ヲ以テ胃ヲ膨脹セシムル片ハ大ニ利アルモノコシテ即チ此法ヲ以テスル片ハ甲種ノ狀況ニ於テハ胃腑ノ鼓音ヲ放ツニ由リ乙種ノ狀況ニ於テハ胃腑ノ强キ膨脹ノ爲メ其鼓音ノ低濁スルニ由リテ之ヲ辨別スルヲ得ルナリ又胃ノ下界ト結腸トノ境界猶他ノ方法ヲ以テスルモ之ヲ區別スルヲ得ヘシ即チ「マーデル」氏ノ按出セルカ如ク其目的ニ從ヒ瓦斯或ハ液質ヲ直腸ヨリ結腸ニ送リ之ヲ充盈セシムル片ハ判然胃腸ノ境界ヲ定ムルヲ得ルナリ

打診ニ由テ胃腑ノ境界ヲ測定セントスル片ハ背位ヲ撰フヲ至當トス是レ立位ニ於テハ腹壁甚シク緊張シ檢査ヲ障碍スル寡カラサレハナリ又打擊ハ常ニ弱打法ニ於テスルヲ要ス

胃腑ノ打診的區域ハ左季肋部ニ在リテ上ハ左第六肋軟骨ヨリ下ハ第九左肋軟骨ニ到リ側方ハ心尖搏動部ヨリ前腋窩線ニ達ス其全部ハ殆ト半月形ニシテ平均十二「センチメーテル」ノ長徑ト八乃至十「センチメーテル」ノ高徑トヲ有シ左胸下緣之カ弦ヲ成ス之ヲ名ケテ「トラウベ」氏ノ半月部ト云フ主トシテ胃底ニ應スルモノトス(第百八十一圖)然リ而シテ此部ノ上緣ハ許多ノ人ニ就テ之ヲ檢スルニ稍〻上方ニ陷凹スルヲ見ルト雖モ「ワイル」氏カ說キシ如ク決シテ通規トナスニ足ラサルナリ蓋此上緣ノ經路ハ主トシテ左肺下緣ノ經過ニ關スルモノニシテ此部ニ於ル肺下緣ハ通常上方ニ向ヒテ少シク彎曲スレ𪜈稀ニハ却テ反對ノ經過ヲ呈スルアレハナリ而シテ上腹部ニ位スル胃部ハ豫メ之ヲ膨脹セシムル片ハ臍ニ達スルヿ稀ナラスシテ其上際四「センチメーテル」ノ部位ニ來ルヿアルハ屢〻見ル所ナリ其他胃腑ノ打診區域ハ嘗テ「ワグネル」氏カ精密ナル

第百八十一圖

胃腑ノ打診界
〔1〕大肝濁音部
〔2〕小肝濁音部
〔3〕小心濁音部
〔4〕大心濁音部
〔5〕心臓抗抵
〔6〕左肺下緣
〔7〕肝肺角
〔8〕胃腑境界
〔9〕「トラウベ」氏半月部



檢査ニ於テ發見セシ如ク通常中線ヲ超ヘテ五「センチメーテル」許右方ニ進ミ肝臓右葉ノ緣下ニ埋沒ス「ワグチル」氏ハ胃腑打診界ノ平均尺度トシ次ノ數價ヲ發見セリ

最大廣徑……二〇「センチメーテル」
左乳腺ノ部位ニ於テ……一二、五 〃
左副胸骨線ノ部位ニ於テ……一五、五 〃
中線ニ於テ……九 〃
右副胸骨線ニ於テ……四 〃

胃腑ノ打診ニ於テ注目スヘキハ打診界ノ縮小、增大、胃腑變位及胃腑腫瘍是ナリ

胃腑打診界ノ縮小ハ胃腑其廣狹ヲ變化スルヿナクメ發生スルヿアリ例之肝臓左葉增大スルトキハ肝胃界ハ勢ヒ下及左方ニ轉移セサルヘカ

ラサルカ如シ又肺胃界ノ變化ニ基因スル打診界ノ縮小ハ液質、肋膜ノ前左豫備腔ヲ充塡シ之ニ由テ「トラウベ」氏ノ半月腔其高徑ヲ減少スルノ際現出ス是ヲ以テ「トラウベ」及「フレンツェル」ノ兩氏ハ左側肋膜炎ナルカ將タ肺炎ナルカ決シ難キニ當リ半月部ノ縮小スルトキハ疾患ノ肋膜炎ナルヲ診決シテ可ナルヲ證セリ蓋肺炎ニ於テ半月部ノ縮小スルヿアルハ破格ニメ左肺ノ浸潤廣部ニ蔓延セルトキ見ルニ過キサルナリ其他氣胸ニ於テモ半月部縮小ノ現象ヲ發スルヿアリ又心包內液質溜溜及心臟肥大ニ於テ左肺前緣外方ニ壓排セラレ心臟下緣低下スルトキハ亦之ヲ招來ス加之脾臟肥大シテ左方ヨリ胃腑前壁ノ一部ヲ掩フトキモ亦胃腑ノ境界ヲ縮小セシム

然レモ胃腑ノ境界ハ生理的ニ於テモ亦深吸氣毎ニ左肺下緣下行シテ前上胃壁ヲ被蓋スルニ由リテ縮小スルハ宜シク之ヲ銘記セスンハア

ルヘカラス

眞性ノ胃腑縮小ハ時ニ發現スルヿナキニアラスト雖モ理學的診斷法ヲ以テ之ヲ發見スルハ到底能ハサル所ナリ

胃腑打診界ノ增大ハ胃腑內腔ノ廣狹常ノ如キモ肝臟左葉萎縮スルカ或ハ左肺下緣上昇スルトキ發生スルヿアルモノニメ殊ニ甲者ニ於テハ肝臟左葉中線ニ向ヒ退縮シ之ニ由テ肝胃界ト肺胃界トノ間部ニ更ニ心胃界ヲ形成ス又肺下緣ノ上昇ハ左肺萎縮ノ際發生スルモノニメ然ルトキハ半月部其高徑ヲ增加ス是ヲ以テ「トラウベ」氏ハ既ニ數年前半月部高徑ノ增加ハ左肺萎縮ノ貴要ノ徵候ナルヲ示セリ

胃腑打診界ノ增大ハ胃腑ノ低降ニ於テモ亦發生スルモノトス是レ胃腑ニ發生セル腫瘍其重量ニ依リテ器械的ニ胃腑ヲ下壓スルノ際見ル所ナリ但之ニ在テハ胃腑ノ增大胃腑下界ノ變位ニ關スルヤ言ヲ要セ

ス

又「クスマウル」氏ノ説ニ胃腑鉛直位ヲ爲ストキハ下界ノ低降ヲ喚起ストヽ此胃腑ノ直位ハ或ハ先天性ナルヿアリ或ハ壓迫ニ由テ發生セルモノナルヿアリ就中乙ハ緊帶ニ由テ肝臟幷ニ胃幽門部ヲ左下方ニ壓迫スルニ由リテ發スルモノニシテ幽門ノ一部ハ之カ爲メ臍ノ下部ニ位スルヿアリ這般ノ胃腑變位ハ胃擴脹ト錯誤セサルヲ要ス是レ胃腑變位ニ於テハ胃腑僅カニ中線ノ右方ニ出ツルノミニシテ尋常ノ右界ニ達スルヿナキニ注意スルトキハ之ヲ區別スルヿ敢テ難カラス

胃腑ノ擴脹ニ基因スル胃腑打診界ノ增大ハ診斷上殊ニ貴要ナルモノトス而シテ胃腑ノ擴脹ハ試ニ炭酸ヲ以テ胃腑ヲ膨滿セシムルニ其下界臍ヲ超過シ又中線ノ右側ニ位スル胃部遠ク右外方ニ擴脹スルトキハ之ヲ想定スルモ不可ナシ

若シ擴脹セル胃腑同時ニ瓦斯及液質ヲ含蓄スルトキハ打診界體位ニ從テ變化スルニ至ル則チ背位ニ於テハ液質胃腑ノ後壁ニ集積シ之ニ由テ胃ノ大彎露出スルモ竪立位ニ在テハ之ニ反シテ液質大彎ニ潴溜スルカ故ニ從來ノ皷音部ハ變シテ多少廣濶ナル濁音部トナリ其下界ハ下方ニ向テ穹窿シ上界ハ水平ヲナス其他左側臥ニ於テモ亦打診ヲ以テ容易ニ液質ノ胃底ニ灌クヲ證明シ得ヘシ

胃腑大彎ノ經過不明ナルニ臨ンテハ往時「ピオリー」氏ノ唱道セル如ク輓今「ペンツオールド」氏モ亦以上ノ關係ヲ之カ證明ニ應用スヘキヲ示セリ即チ胃腑ノ空虛ナルニ際シ一「リーテル」ノ液質ヲ飲下セシムルトキハ竪立位ニ於テ胃腑大彎ニ沿ヒ一帶ノ濁音部ヲ現出シ其形狀上記セルモノニ異ナラス此濁音部健康體ニ於テハ決メ臍ニ到達スルヿナシト雖モ胃腑擴脹セル患者ニ在テハ臍下ニ到ル迄濁音ヲ呈ス此ニ於テ胃

喞筒ヲ以テ液質ヲ抽出スルトキハ濁音變シテ皷音トナルカ故ニ明瞭ニ胃大彎ノ境界ヲ認ムルヲ得ヘシ

「デヒヨ」氏ノ行ヘル法ハ上記ノモノト稍其趣キヲ異ニセリ即チ氏ハ胃腑ノ空虛ニ乘シテ先ツ四分一「リーテル」ノ水ヲ飲下セシメ濁音ニ依テ大彎ノ位置ヲ測定スルノ後更ニ反復四分一「リーテル」ノ水ヲ送リテ每回打診シ全量一「リーテル」ニ至リシニ擴脹セル胃腑ニ於テハ大彎臍下ニ達セシモ健全ナル胃腑ニ在テハ然ラサリシト且氏ハ許多ノ胃病患者ニ於テ胃腑一二杯ノ水ヲ攝取スルノ後已ニ非常ニ低下スルヲ發見シ之ヲ胃腑ノ弛緩ニ由ルモノニメ殊ニ注意スヘキモノトセリ但胃腑各杯每ニ多少沈降スル「アルハ健體ニ於テモ亦見ル所ナルハ素ヨリトス是ニ由テ之ヲ觀レハ此法ヲ以テスルトキハ器械的胃腑收縮不全ノ狀態ヲト知スルニ足ルナリ

「ライヒテンステルン」氏ハ用桿打診板打診法ヲ以テ胃腑ノ下界ヲ測定セントセリ即チ胃腑ヲ聽診シ同時ニ固體ヲ以テ聽胸器ノ近傍ニ安貼セル打診板上ヲ打擊スルニ胃部ニ於テハ明朗ナル鑛響ヲ喚起スルヲ得ヘシ但結腸モ亦鑛響ヲ放ツト雖モ「ライヒテンステルン」氏ハ通常音性ニ依テ兩響ヲ區別スルヲ得ヘク從テ胃腑ト結腸トノ境界ヲ劃定スルヲ得ヘシト云ヘリ然レモ既ニ「ワイル」氏此兩響ハ著明ナル差異ナク又鑛響ハ胃腑ノ下界ニ接スルニ從ヒ漸次ニ消失シ且音ノ高低ハ胃腑ノ蠕動及之ニ關係アル胃腑內腔ノ變更ニ由リテ常ニ變化シテ止マサルニ注目セリ

胃腑ハ上方下方又側方ニ變位スルヿアリ就中其上轉ハ胃腑ノ甚シク膨脹セルトキ之ヲ見ルヿ稀ナラスメ同時ニ腸管瓦斯ノ爲メニ强ク膨滿セルトキハ殊ニ著明ナリ又下降ハ脱癌ニ於テ往々現出スルヿアリテ其

際變位ヲ起スハ主トシテ可動性ノ幽門部ナリトス又强劇ナル側壓モ幽門ヲ轉位セシムルヿアルハ已ニ前文記述セル所ニシテ幽門ハ之カ爲メニ中線ニ向テ下降スルナリ時トシテ幽門先天性ニ異常ノ低位ニ在リテ中線ノ近傍ニ位スルヿアリ其他內臟變位症ニ於テハ噴門及胃底、右側ニ位シ幽門ハ却テ左側ニ占位スルヲ見ル

胃腑ニ發生セル腫瘍ハ之ヲ打診スルニ該部決シテ濁音ヲ呈スルヿナクシテ通常濁性鼓音ヲ放ツカ故ニ屢之ニ據リテ胃腑ノ腫瘍ヲ肝臟若クハ脾臟ノ腫瘍ヨリ鑑別シ得ルヿアリ是レ胃腑腫瘍ノ診斷ニ打診法ノ缺クヘカラサル所以ナリ然レモ時トシテハ之カ破格ヲ見ルヿナキニアラサルハ素ヨリ論ヲ須ヒサルナリ例之「ロイベ」氏ノ實驗ニ同氏嘗テ一患者ノ上腹部ニ於テ腫瘍ヲ認メ鼓音ノ缺如セルニ依リテ其肝臟左葉ノ腫瘍ナランヲ診定シ死後之ヲ剖檢セシニ圖ラサリキ胃腑ノ癌腫ナリシト云フ

(二) 胃腑ノ聽診 *Auskultation des Magens.*

健康體ニ在テハ嚥下間及嚥下ノ直後ニ當リ二種ノ雜音ヲ聽取スルヿアリテ其一ハ竄透雜音ニシテ一ハ壓搾雜音ナルハ既ニ前文記載セル所ナリ此第二雜音ハ胃腑充實セルノ際缺如セルモノトス「メルツェル」氏ハ其他嚥下作用ノ後尙十五分乃至二十分間肝臟部ニ於テ連續性ノ雜音ヲ聽取セシト云ヒ氏ハ之ヲ幽門雜音 *Pylorusgeräusch.* ト名ケタリ蓋胃部ノ聽診ハ診斷上亦其價値ナキニアラサルナリ

嚥下作用ノ聽診ハ噴門狹窄ノ診定ヲ容易ナラシムルモノニシテ若シ該部狹窄セルトキハ嚥下液久時ノ後始テ食道ノ末端ヨリ胃腔內ニ注ク而

メ雜音ハ屢〻其性ヲ變シ大水泡性ニメ持續長キ含嗽音樣ノ雜音トナル此際第一雜音缺如シテ唯第二雜音ノミヲ認ムルヿアリ

胃腑中瓦斯及液質ヲ含有スルヰハ患者ノ身體若クハ單ニ其胃部ヲ震搖スルノ際一種ノ打水響ヲ放チ屢〻遠隔部ニ傳播スルヿアリ是レ患者自ラ衝突狀ニ呼吸スルヰ亦多クハ隨意ニ喚起シ得ルモノニメ時トメ體位ノ變更ニ由リ既ニ現出スルヿアリ這般ノ雜音ハ健體ニ於テモ亦發現スルヿアリト雖モ殊ニ顯著ナルモノハ通常胃腑ノ擴脹セル人ニ發スルモノトス而メ時トメ此雜音ヲ波動トメ感觸シ得ルヿアルハ業ニ已ニ觸診ノ條下ニ記載セル所ナリ

「グル」音及拍手音ハ宜シク之ヲ打水響ヨリ區別セサルヘカラス所謂「グル」音及拍手音ハ其發生ノ關係打水響ト異ナルナキモ「クスマウル」氏ハ此等ノ雜音若シ胃腑單ニ空氣ヲ含ムカ或ハ兼テ液質ヲ含有スルモ極メテ少量ニ過キサルノ際殊ニ清朗ニメ且純粹ニ現ハルヽト云ヘリ

擴脹セル胃腑ヲ聽診スルヰハ時トメ煮沸セルカ如ク蒸發セルカ如ク又歌フカ如キ一種ノ雜音ヲ聽取スルヿアリテ其狀恰モ僥多ノ微細ナル氣泡ニ由リテ發生セルカ如ク然リ是レ「バウリ」氏始テ記載シ次テ「オッポルツェル」「ポーポフ」及輓近殊ニ「ペンツォルド」氏ノ亦說ケル所ニメ胃腑內容ノ泡釀ニ基因スルヤ辯ヲ俟タス從テ診斷上亦緊要ノ症候ト云フヘシ但此雜音ハ炭酸ヲ以テ胃腑ヲ膨滿セシムルヰハ人工的亦之ヲ發生セシムルヲ得ルモノトス然レ𪜈胃大彎ヨリ低部ニ於テハ決メ之ヲ聽取スルヿナシ故ニ胃腑ノ聽診ハ打診成績ノ正否ヲ檢スルニ當リ大ニ有要ナルヲ知ルヘシ

往々胃壁明瞭ニ聽知シ得ヘキ爆鳴樣雜音ヲ放テ破裂スルヿアリ嘗テ「ウルリヤムス」氏ハ胃癌ノ一患者竪立ノ際俄然顯著ナル雜音ヲ發シ

胃壁ノ穿孔ヲ起シテ死セルモノヲ報告シ又「トルスペッケル」氏ハ胃腑軟化ニ罹レル三ケ月ノ嬰兒死ニ先チテ低弱ナル爆鳴ヲ放チ以テ胃腑ノ破裂ヲ示セルヲ實驗セリト云フ

胃腑ノ往々呼吸器及循環器ノ聽診音ニ影響スル「アルハ上章屢〻記載セル所ニノ是等ノ諸音ヲノ鑛性ヲ帶ヒ且共鳴ニ依リテ著シク增强セシメ遠隔部ニ於テモ猶之ヲ聽知シ得ヘキニ至ラシム「フェデリチ」氏ノ說ニ傳播セル心音ハ電リ胃部ニ於テ聽取シ得ルノミニノ接近セル腸管ニ於テハ既ニ之ヲ認ムルヲ得サルカ故ニ之ニ依レハ聽診上胃腑ノ下界ヲ檢定シ得ヘシト然レモ瓦斯腹膜腔內ニ竄入セルトキハ腹腔ノ廣部ニ於テモ亦心音ヲ聽知シ得ルモノトス是レ含氣性腹膜炎ノ診斷ニ應用シ得ヘキノ症候トス

胃腑ノ診法ハ決ノ胃腑ノ純粹ナル理學的檢査法ヲ以テ盡セルモノトナスヘカラス何トナレハ此他猶胃腑ノ官能殊ニ吸收力及胃液ノ化機的造構幷ニ其强弱ヲ檢査セサルヘカラサレハナリ然レモ這般ノ檢査法ハ素ト化學ノ範圍ニ屬スルモノナルカ故ニ茲ニ之ヲ論セス

第五節　腸管ノ診査　*Untersuchung des Darmes.*

腸管ノ理學的診査ハ兩處ヨリ之ヲ行フヲ得ヘシ就中腸壁ヨリスルノ法ハ簡便ナリト雖モ尙直腸及腟ヨリノ檢査ニ依テ之カ成績ヲ補成スルハ決ノ之ヲ忽ニスヘカラス

(イ)　視診　*Inspection.*

腹壁非薄ニシテ脂肪ニ乏シキ人ニ於テハ腸管ノ蠕動ヲ目視スルヿ稀ナラスシテ多クハ横徑ノ充腸トナリテ現ハレ波濤狀ヲナシテ浮沈シ腹壁ノ摩擦及打敲、冷水ノ灌注若クハ華良泥氏電流ノ刺戟ニ依リテ强盛トナル而シテ數回ノ分娩ニ由テ腹壁甚シク弛緩セル婦人ニ於テハ殊ニ屢〻遭遇スル所ニシテ又兩直腹筋ノ著ク側方ニ離開セルトキハ頗ル之ヲ認知シ易カラシム此蠕動ヲ呈スル腸部ハ通常小腸ナルヲ以テ從テ其發現ノ部位ハ上ハ臍ヨリ下ハ恥骨縫際ニ到リ側方ハ延長セル兩乳線ニヨリテ經劃セラレタル腹壁部分ニ局ス

目視シ得ヘキ蠕動ハ腸管或ル部位ニ於テ狹窄シ若クハ閉塞セルノ際殊ニ顯著ナルモノニシテ此際蠕動ノ診斷上ニ於ル關係ハ蠕動蔓延ノ廣狹ヨリ畧〻疾患ノ位置ヲ推定シ得ルニ在リ

限劃セル持長性ノ隆起ヲ視診スルノ際ハ特別ノ注意ヲ要スルモノニシテ其隆起ハ諸多ノ原因ヨリ發生スト雖モ宿便ニ基因スルモノヲ以テ殊ニ多シトス此際往々瘤狀及球形ヲナセル便塊、念珠樣ノ隆起トナリテ腹壁下(殊ニ結腸ノ經路ニ沿ヒ)ニ現ハルヽヿアリ然レモ腸癌モ亦類似ノ性狀ヲ呈スルヿナキニアラス

瓦斯甚シク腸管內ニ集積(皷腸)スルトキハ全下腹膨大スルモノニシテ腹部ハ之カ爲メニ皷狀ニ膨出シ緊滿セルノ狀ヲ呈ス此際腹腔ノ諸內臟ハ通常變位スルモノニシテ就中肝臟、胃腑幷ニ横隔膜、肺臟下緣及心臟ハ甚シク壓上セラル

食道、噴門若クハ幽門狹窄ノ際見ルカ如ク腸管極メテ少量ノ內容ヲ含有スルトキハ腹部往々舟狀若クハ木盤狀ニ陷凹シ腹壁ハ腹部大動脈ニ接近シ屢〻溺蔓性ノ搏動ヲ現ハスヲ見ル然レモ這般ノ發症ハ腸筋ノ强劇ナル收縮ニ於テモ亦發生スルヿアルモノニシテ例之腦膜炎及鉛毒疝

痛ニ於ル如キ是ナリ

直腸ヨリ行フ腸管ノ檢査ハ一部ハ肛門部一部ハ直腸最下部ノ直達視診ニメ乙ハ喝囉仿謨麻睡ニ乘シテ肛門ヨリ挿入セル直腸鏡ヲ以テ行フヲ得ヘシ近世「ライテル」及「ニッッエ」ノ兩氏ハ直腸ヲ照査センカ爲メ一種ノ電氣照輝裝置ヲ按出セリ

(ロ) 觸診 *Palpation.*

腸管ノ觸診ニ於テ注意スヘキハ疼痛ニメ或ハ蔓延性ナルアリ或ハ局所性ナルアリ就中乙ハ診斷上貴要ニメ右若クハ左腸骨窩ニ占地セル片ハ殊ニ等閑ニ附スヘカラス則チ廻盲部ノ限局性疼痛ハ結核性腸潰瘍ヲ診定スルニ當リ頗ル緊要ナル徵候ニメ又腸窒扶斯ニ於テモ該部

殊ニ過敏トナルヲ見ル其他盲腸及蟲樣突起幷ニ其周圍部ノ炎症(盲腸炎、盲腸背炎及盲腸周圍炎)亦之カ原因トナルヿアリ而メ左腸骨窩ニメ下行結腸ノ經路及「シグマ」狀彎曲ニ應スル部ノ顯著ナル疼痛ハ赤痢ニ於テ發見スル所ナリトス

腸管ニ於テ往々固性ノ隆起ヲ觸知スルヿアリ若シ固結セル便塊(所謂糞癇 *Kothtumoren.*)ヨリ成レルトキハ時トメ其硬度著シカラスメ手指ヲ壓入シ得ルヿアリト雖モ他ノ狀況ニ於テハ之ニ反シテ糞癇硬固ナル結節性腫瘍ノ看ヲ呈シ眞正ナル腹腔腫瘍ト錯誤スルノ恐ナキニアラス然レトモ糞癇ハ多クハ著明ナル移動性ヲ有スルト持長シテ下劑ヲ服用セシムルトキハ腫癇終ニ消散スルトニ依リ其性質ノ何タルヲ知了スヘシ殊ニ糞癇ト誤診ヲ來シ易キハ腸癌ナリトス蓋腸癌ハ亦通常結節狀ニメ硬固ナレハナリ又盲腸炎、盲腸背炎及盲腸周圍炎ニ於テ廻盲部ニ

一種ノ抗抵或ハ把握シ得ヘキ腫瘍ヲ呈スルヿアリ又腸重疊、內箝頓及腸管ノ轉捩ニ於テモ觸知的ノ腫瘍ハ頗ル樞要ナルモノトス其他時トシテ腸壁ノ限劃性肥厚若クハ瘢痕部亦硬固ナル隆起トナリテ觸知セラルヽヿアリ

腸管同時ニ瓦斯及液質ヲ含有スルトキハ之ヲ壓迫スルノ際水泡音若クハ「グル」音ヲ感觸スルヿ稀ナラス是レ瓦斯泡ヲ混在セル液性腸內容ノ移動スルニ由リ發生スルモノニシテ下痢ノ際屢、見ル所ナリ又腸窒扶斯ニ於テハ屢、迴盲部ニ於テ現出スルヿアリト雖モ特異徵候ニアラス又赤痢ニ在テモ左腸骨部ニ於テ遭遇スルヿ往々之アリ

腸管ノ漿液性被膜若シ炎症ニ依リテ粗糙トナルトキハ觸知的ノ摩擦音ヲ發生スルヿアルモノニシテ或ハ自發シ又或ハ腹壁上ヨリ之ヲ壓迫スルノ際始テ現出ス

直腸及腟ヨリ腸管ヲ觸診スルハ諸多ノ腸患ヲ鑑識スルニ當リ頗ル樞要ナルモノニシテ往々之ニ依リテ腹壁上ヨリ觸知スルヲ得サル腫瘍ヲ檢出シ得ルヿアリ而シテ直腸ヨリ行フ觸診ハ單ニ中指若クハ示指ヲ以テスルノミナラス亦始テ「マウンデル」氏稱用シ次テ「ジモン」氏カ一定ノ方式ニ從ヒテ行ヘルカ如ク喞囉仿謨麻唾ニ乘シテ塗油セル全手ヲ圓錐狀トナシ前膊ノ一部ト共ニ直腸內ニ挿入スルニ在リ此般ノ手指檢査ハ直腸自家ノ疾患ヲ診スルニ當リ特殊ノ利益アリトス

橈屈性消息子ヲ以テ直腸及結腸ヲ檢スルノ法ハ亦腸管觸診ノ範圍ニ屬シ殊ニ大腸ノ狹窄ニ於テ應用スル所ノ法トス又多量ノ水ヲ灌注スルモ腸內ニ於ル障碍ノ存否及其部位ヲ檢出スルヲ得ルモノニシテ通常此目的ニ使用スルハ「ヘガール」氏ノ創意ニ成レル器ナリトス是レ一條ノ護謨管ニシテ其下端ニハ消息子ヲ裝シ直腸內ニ挿入スルノ用ヲ爲サ

シメ上端ニハ硝子製漏斗ヲ箝挿シ水ヲ容ルヽニ便ニセリ

(ハ) 打診 *Perkussion.*

腸管ノ打診音ハ雲時間ニメ變更スルヿアリ而メ腸管瓦斯ヲ以テ充滿セルトキハ鼓音若クハ鑛性打診音ヲ呈シ其高低ハ常ニ腸管ノ口徑及其壁質緊張ノ度ニ關セスンハアラス之ニ反シ多量ノ固形物腸管ヲ盈ストキハ濁音ヲ放ツモノニメ多クハ猶鼓音ノ音色ヲ帶フルヲ見ルヘシ然レトモ打診ニ依テ腸管ノ境界ヲ敲定スルハ至難ナリトス何トナレハ小腸瓦斯ニ由リテ强ク緊滿セルトキハ其打診音猶大腸ニ於ルモノト異ナラサレハナリ

又横行結腸ヲ胃腑ヨリ區別スルノ困難ナルハ既ニ前文記載セル所ナリ然レトモ胃腸或ハ瓦斯或ハ固形物ヲ含有スルニ從ヒ直腸ヨリ水或ハ空氣ヲ送リテ結腸ヲ充盈セシムルトキハ兩者ノ境界ヲ定ムルニ大ニ利アリトス而メ「フォン、チームセン」氏ハ重炭酸曹達ト酒石酸ニ由リ又「ルチベルヒ」氏ハ「リカルドソン」氏ノ「スプレー」裝置ヲ以テ之ヲ行ヘリ

(二) 聽診 *Auskultation.*

腸中瓦斯及液質ヲ含有セルトキハ其運動ニ際シ强盛ナル「コルレン」音及「ポルテルン」音ヲ放ツヿ稀ナラスメ屢〻遠隔部ニ於テモ猶聽知スルヲ得是レ腸加答兒及腸管ノ狹窄ニ於テ殊ニ現出スル處ナリ又瓦斯及液質多量ナルトキハ衝突狀ニ腹部ヲ壓スルノ際胃腑ニ於テ見ルカ如ク亦强劇ナル打水響ヲ喚起シ得ルヿ屢〻之アリ

腸管ノ漿液性被膜粗糙ナルトキハ摩擦音ヲ發スルモノニメ觸知スルヨリ聽知シ得ルヲ多シトス

腸穿孔ノ際發生スル特異ノ音響ニ關シテハ後章腹膜腔內空氣集積ノ條ヲ對照スヘシ

第六節　肝臟ノ診査 *Untersuchung der Leber.*

肝臟病ノ鑑識ハ多クハ困難ニメ器臟ニ蔓延セル解剖的變化ヲ發生セルトキト雖モ猶官能的障碍幷ニ器質的變化ヲ徵知シ得サルヿ稀ナリトセス而メ之ニ在テモ診査法ハ視診、觸診、打診、及聽診ニ止ルト雖モ聽診ハ通常緊要ナラス

(イ) 肝部ノ視診 *Inspection der Lebergegend.*

健全ナル成人ニ於テ肝部ヲ視診スルニ左胸側ノ對應部ト差異アルヲ見ス唯第一歲ノ小兒ニ於テハ該部著シク隆起シ時トメ其隆起胸廓下緣ヲ超ヘテ臍部ニ到ルアリ是レ小兒ノ肝臟ハ生理的脂肪浸潤ニ由リテ頗ル增大セルニ關スルナリ

肝臟部ノ目視シ得ヘキ擴脹ハ肝臟著シク增大セル時現出スルモノニメ其增大多クハ尋常ノ肝部ヲ超過シ之カ爲メニ前腹壁ノ全部穹窿スルニ至ル而メ胸廓甚シク擴脹スルトキハ肋骨異常ニ迴轉シ本來ノ內面ハ下方ニ外面ハ上方ニ向フハ宜シク注意スヘキノ點トス又肋間溝ハ通常依然存在スルモノニメ右胸廓擴脹ノ原因肋膜腔內ノ滲液ニ在ルカ將タ肝臟ノ肥大ニ在ルカヲ決スルニ當リ殊ニ緊要ノ徵候ナリトス

蓋肋膜腔內ノ滯液ニ因スル胸廓ノ擴脹ニ於テハ肋間溝ノ消失スル固ヨリ言ヲ俟タサレハナリ

肝臟增大スルトキハ屢〻其下緣ヲ腹壁上ヨリ視察シ得ルモノニシテ即チ其下緣ニ接シ淺溝ノ現出スルニ由テ之ヲ知ルヘク殊ニ側方ヨリ之ヲ望ムトキハ明瞭ナリトス又肝臟下緣ノ呼吸的變位ハ通常著明トナルモノニシテ其際上記ノ淺溝ハ吸氣毎ニ下降シ呼氣毎ニ上昇ス蓋脾臟ノ腫瘍モ亦呼吸的變位ヲ現ハスト雖モ概シテ肝臟ノ變位ハ之ヲ脾臟ノ變位ニ比スレハ廣濶ナリトス其理橫隔膜ノ肝臟ヲ覆フヤ脾臟ニ比スレハ其部位廣キヲ以テ從テ其運動ヲ附與スル亦大ナルニ外ナラス之ニ反シ腎臟、胃腑、膵腺、網膜及胃管ノ腫瘍ニ於テハ呼吸的運動全ク缺如スルナリ故ニ此徵候ハ疑似決シ難キノ際診斷ヲ助クルヿ尠少ナラサルヲ知ルヘシ然レモ腎、胃、膵、網膜等ノ腫瘍ニ於テモ若シ此等ノ臟器近接セル肝臟ト癒着スルトキハ亦呼吸的變位ヲ現ハスヿナキコアラス

然レモ肝臟下緣ノ露出ハ管ニ肝臟ノ肥大ニ於テノミナラス其下降ニ於テモ亦發見スルモノナルハ宜シク銘記セスンハアルヘカラス是レ右肋膜腔ノ液質滯溜ニ於テ最モ屢〻見ハルヽ所ニシテ氣胸、縱隔腔腫瘍及心包炎時トシテ脊柱彎曲ニ基因スル胸廓ノ畸形ニ於テモ亦遭遇スルヿアリ又頻回分娩セル婦人ニ於テハ肝臟ノ繫帶往々弛緩シ之カ爲メ健全ナル臟器尋常ヨリ低下シ其下界ヲ視察シ得ルヿアリ凡テ是等ノ諸症ニ於テ腹壁菲薄ニシテ脂肪ニ乏シキトキハ之ヲ視認スルヿ容易ナリトス之ニ反シ多量ノ瓦斯腸內ニ集積(皷腸)シテ腹壁强ク緊張セルトキハ現象ヲ消失セシムルニ至ル是レ腹膜腔內ニ於ル液質ノ滯溜(腹水)ニ於テモ亦然リトス何トナレハ之ニ在テハ滯液腹壁ヲ擴張セシメ若シ多量ナルトキハ腹壁ト肝臟前面トノ間ニ嵌入スレハナリ是ヲ以テ穿刺シテ

液質ヲ排泄セシムルトキハ肝臓ニ於ル變化直チニ明瞭ニ露ハルヽヿ屢〻之アリ然レトモ液質ハ更ニ滞溜スルカ故ニ多クハ再ヒ消失スルモノニメ往々數時間ニメ之ヲ見サルニ至ルヿアリ

屢〻增大セル肝臓ノ表面ニ於テ肝臓ニ等シク亦呼吸的變化ヲ呈スル隆起ヲ目視シ得ルヿアリ其解剖的造構ハ甚タ種々ニメ或ハ固性組織ヨリ成レル腫瘤ナルアリ或ハ限劃性ノ膿瘍ナルアリ又或ハ嚢腫ナルアリ然レトモ單ニ肉眼ヲ以テ其眞ノ造構ヲ決定スル能ハス

往々腹壁自家肝臓疾患ノ侵ス所トナルヿアリ則チ肝臓部若クハ之ヨリ稍〻遠隔セル腹壁部分潮紅腫起シ時ヲ經ルニ從ヒ波動性ノ隆起トナリ終ニ破壞シテ膿液ヲ漏シ兼テ膽汁若クハ膽石ヲ外泄スルヿアリ而メ時トメ之ヨリ膽瘻ヲ發生シ久時多量ノ變化セサル膽汁ヲ排泄ス但這般ノ發症ハ唯リ肝臓表面腹壁内面ト癒着セルトキノミ發生スルモノナルハ言ヲ俟タス

膽嚢腔、膽汁、膿液若クハ漿液ヲ以テ過度ニ充盈セラルヽカ或ハ膽嚢壁癌腫變性スルトキハ一種特異ノ隆起ヲ認ムルヿアリテ甲ニ於ル腫瘍ハ表面滑澤ニメ多クハ長キ帶圓梨子狀ヲ爲スモ乙ニ於ル腫瘍ハ結節狀ニメ不平ノ表面ヲ有シ加之全然膽嚢ノ常形ヲ失スルニ至ル此腫瘤ハ時トメ頗ル增大スルヿアルモノニメ或人ハ漿液ノ膽嚢ニ滞溜セルモノニ於テ腫瘤ノ兒頭大ヲ超ヘシヲ見タリト云フ又「ベンソン」氏ハ嘗テ或者ノ擴脹セル膽嚢ヲ以テ腹水トナシ之ヲ穿刺セルノ一實驗ヲ記載セリ

肝臓部ヲ視診スルノ際搏動ヲ目視スルヿアリ其性狀ノ種々ナルハ既ニ上章詳述セルカ如シ而メ或ハ下位腹部大動脈ヨリ傳播セルモノナルヿアリ然ルトキハ搏動殆ト若クハ全ク肝臓左葉ニ現ハレ肝葉之カ爲

メニ單純ナル昇沈ヲ現ハス然レ𪜈亦往々搏動肝臓實質ニ基因シ搏動時ニ當リ臓器諸側ニ向ヒ增大スルヿアリ是レ三尖瓣不全閉鎖ノ貴要ナル徵候ナリトス其他「レーベルト」氏及輓近「ローゼンバッハ」氏カ動脈性肝臓搏動ノ發現ヲ記載セルハ上章既ニ之ヲ記述セリ

(ロ) 肝臓ノ觸診 *Palpation der Leber.*

肝臓ヲ觸診セントスル𪜈ハ患者ヲ仰臥セシメ下肢ヲ股及膝關節ニ於テ屈曲シ兼テ外轉セシメ以テ可及的腹壁ノ緊張ヲ減セシムルヲ適當トス又硬固ナル枕子ヲ背下ニ箝挿シテ上體ヲ亢擧セシムル𪜈ハ多クハ腹壁ノ弛緩ヲ助ク而メ診査間ハ患者ト談話ヲ試ミ之ニ由テ患者ノ注意ヲ他ニ轉セシメサルヘカラス其他開口ハ亦腹壁ノ弛緩ヲ催進スルモノトス

檢者ノ患者ニ接スルヤ其雙手温暖ナラサルヘカラス若シ之ニ反シ檢手寒冷ナル𪜈ハ腹壁反射的ニ緊張シ手指ヲ深部ニ壓入スルヲ得サラシム其際强ヒテ壓迫ヲ增加スル𪜈ハ徒ラニ腹壓ヲ旺盛ナラシメ且患者ヲシテ疼痛ヲ感セシムルノミニシテ目的ヲ達スルヿ能ハサルヘシ

觸試ハ多クハ較〻彎屈シ且密ニ併列セル右手ノ總指ヲ輕ク腹壁ニ貼スルヲ以テ足ルモ時トシテ深部ニ壓入セサルヘカラサルヿアリ「フォン、フレーリヒ」氏ハ此ニ手指ヲ廻轉スルノ法ヲ稱用セリ但此際手指ハ決シテ急速ニ竄入セシムヘカラサルハ素ヨリニシテ若シ腹壓盛ナル𪜈ハ腹壁弛緩シ手指ノ壓入ヲ得ルニ至ル迄壓迫ヲ猶豫セサルヘカラス

肝臓ノ觸診ヲ殊ニ困難ナラシムルハ厚キ脂肪層、腹壁ノ緊張著明ニシテ且疼痛アルモノ、皷腸及腹水是ナリ但腹水ニ在テハ衝突狀ニ觸診スル

キハ多少目的ヲ達シ得ルヿ稀ナラス是レ衝突毎ニ肝臓上際ノ液層壓排セラルヽニ由リ手指一時深部ニ位セル肝臓表面ニ到達スルヲ得レハナリ又此ノ如キ際ニ於テハ患者ヲシテ膝肘位ヲ爲サシムルヲ大ニ利アリトス蓋此際肝臓直チニ前腹壁ニ接シ潴液ハ肝臓ニ由リテ側方ニ壓迫セラルレハナリ而シテ若シ腹水排泄セラルヽキハ腹壁甚シク弛緩スルニ由リ觸診頗ル容易トナルモ通常液質更ニ潴留スルカ故ニ僅少時間内ニ檢査再ヒ困難トナリ或ハ全ク之ヲ遂クルヲ得サルニ至ル

診査ハ一定ノ順序ヲ具ヘサルヘカラス若シ然ラスシテ徒ニ彼此ノ部ヲ壓迫スルモ決シテ其功ヲ奏スルモノニアラス故ニ常ニ序ヲ追フテ一部ヨリ他部ニ移ルヲ要ス

視診及觸診ノ成績ハ常ニ同一ナルモノニアラスシテ屢〻視診上缺如セル症候觸診ニ由テ檢出シ得ルヿアリ

健全ナル成人ニ於テハ肝臓ノ上面及其下緣ヲ觸知スルヲ得サルヿ敢テ稀ナラスト雖モ小兒ニ於テハ之ニ反シ屢〻肝臓ノ下半ヲ觸知シ得ルコトアリ其際肝臓或ハ單ニ蔓延性ノ抗抵感覺ヲ呈シ或ハ其下界ノ鈍緣ヲ爲シテ終ルノ狀ヲ認ム是レ深呼吸ヲ營ムノ際殊ニ顯著ナルヲ常トス

又健全ナル成年婦人ニ於テモ肝臓ノ下緣ヲ觸知シ得ルヿ往々之レアリ是レ平素狹隘ナル胸帶ヲ着ケ之カ爲メニ肝臓器械的ニ壓下セラレタル婦人ニ見ルモノトス殊ニ高度ノモノニ至テハ肝臓就中右葉下部ノ大部分絞縊セラルヽヿアリ(絞縊肝)其絞縊溝ハ時トシテ肝臓上面ニ於ル淺キ陷凹トシテ觸知セラルル而シテ絞縊セラレタル肝臓部分ハ腸骨棘ニ到ル迄下降スルヿ稀ナラスシテ通常著明ナル可動性ヲ具有スルカ故ニ往々下方ヨリ上方ニ衝上シ得ルヿアリ又其形狀ハ時トシテ一種殊異ニ

メ球狀及鈕狀ヲ爲スヿアリ然ルトキハ之ヲ腫瘍ト誤ルノ危險ナキニアラス又屢〻絞窄セラレタル肝部ト固有ノ肝臟トノ連續不明ナルヿアリ是レ殊ニ横行結腸絞窄溝内ニ占居スルノ際發スルモノニメ之カ爲メニ絞縊肝部及固有肝部宛モ分離セルカ如キ感ヲ生セシムルモノト打診ニ於ス又テモ固有肝濁音部ト絞縊肝部トノ間ニ一帶ノ鼓音部ヲ隔ツルヿアリ然ルトキハ絞縊セラレタル肝臟部分ヲ以テ肝臟ニ關係ナキ孤發セル腫瘍ニアラサルヤノ疑團發スルヿナキニアラス然レモ此際強ク鼓音部ヲ壓迫スルトキハ腸管ヲ通徹シテ橋部ヲ感觸シ得ヘク又打診板ヲ該部ニ緊貼スルモ時トメ鼓性腸打診音ヲ濁音ニ變セシムルヲ得ヘシ然レモ更ニ注意スヘキハ腫瘍ノ呼吸ニ應シテ變位スルヤ否ヤ是レナリ蓋腹腔臟器中呼吸的變位ヲ現ハスハ唯リ肝臟ト脾臟ノ兩器アルニ過キサルカ故ニ若シ腫瘍呼吸ニ應シテ明カニ其位置ヲ變シ且

脾臟濁音依然常位ニ存スルトキハ腫瘍ノ由來釋然タルヘシ

婦人ニ於テハ肝臟强キ緊約ニ依ルノ他分娩ノ爲メニ肝臟繫帶弛緩シ之ニ由リテ臟器異常ニ低下シ亦觸知シ得ルニ至ルヿ屢〻之レアリ是レ「カンタニー」氏ノ所謂逍遙肝 *Wanderleber.* トス此際肝臟ハ全然其常位ヲ辭シ觸知的腫瘍トナリテ著シク腹腔内ニ沈降ス然レモ此ニ於テモ其穹窿面ハ上方ニ向ヒ又其大部分ハ右側ニ位シ左側ニ於テハ唯小部分ヲ存スルニ過キサルヿ尚健康時ニ異ナラス殊ニ診斷上貴要ナルハ腫瘍下緣ノ觸試ニメ若シ該腫瘍肝臟ナルトキハ二箇ノ截痕ヲ觸知スヘク就中側方ニ位スルモノハ膽囊ヲ容レ中央ニ在ルモノハ圓靭帶ヲ納ムルモノトス「ウィンクレル」及「スツーギン」氏ハ加之肝臟表面ト肋骨弓トノ間ニ靭帶ノ緊張セルヲ觸知スルヲ得ヘシト云フ而メ臟器ノ呼吸的變位ハ殆ト缺如スルヿナシ然レモ診斷ノ際決メ獨リ腫瘍ノ形狀ニ依

頼スヘカラサルハ論ヲ要セス是ヲ以テ既ニ「フォン、ブレーリヒ」氏ハ其肝臓病診法論中網膜ノ癌腫變性ハ宛モ肝臓ノ形狀ヲ呈スルヿアルヲ記載シ模型圖ヲ以テ之ヲ證示シ又近世「ペ、ミュルレル」氏ハ慢性ノ炎症ニ罹リ且肥厚セル網膜ヲ逍遙肝ト誤リシノ一實驗ヲ報セリ故ニ疾患ノ診斷ニ際メハ形狀ノ外尚發症ニ注意セスンハアルヘカラス蓋變位セル肝臓ハ常ニ頗ル移動シ易キモノニシテ例之側位ニ在テハ臓器該側ニ沈ムカ故ニ逍遙セル臓器ハ之ヲ故位ニ復サシムルヲ得サルヘカラス而メ若シ臓器全然復位スルトキハ固有肝部ニ於ル打診音亦變化スルニ至ルハ素ヨリトス何トナレハ是ヨリ先キ該部ハ腸管之ヲ占有セルカ爲メニ皷音ヲ呈セシモ今ヤ濁音現出スレハナリ

肝臓顯著ナル病態(肋膜炎、氣胸、縱隔膜腔腫瘍、心包炎、肝臓及横隔膜面間ノ腹膜炎性滲出物淤溜)ニ依リテ下方ニ轉位スルカ或ハ肝臓肥大スルトキハ試ニ觸診スルニ亦肝臓ノ下部ヲ感觸シ得ルニ由リ之ヲ知ルヲ得ヘクメ或ハ肝部ニ於ル瀰蔓性ノ抗抵感覺ナルヿアリ又或ハ明カニ邊緣ヲ經界シ得ルヿアリ而メ其邊緣ハ二箇ノ截痕ヲ具有スルニ依リテ之ヲ徵知シ得ヘク就中一ハ膽囊一ハ圓靭帶ノ位置ニ應スルモノニメ乙ハ尖鋭ナル隅角ヲ有スルニ依リ甲ト區別スルヲ得ヘシ其他肝臓ノ肥大ニ於テハ截痕殊ニ著明ニ現ハルヽヿ稀ナラス是レ截痕肥大ノ爲メニ深凹トナレハナリ

然レ𪜈單ニ肝臓下界ノ尋常ヨリ低位ニ在ルヲ證明スルヲ以テ滿足スヘカラサルハ固ヨリニメ兼テ表面ノ性狀、硬度、疼痛、及其移動性ニ注意セスンハアルヘカラス

觸知シ得ヘキ肝臓ノ表面ハ或ハ滑澤ナルアリ或ハ結節狀ナルアリ結節ハ其大小頗ル差等アリテ其數亦一樣ナラス若シ稀少ナルトキハ殊ニ

注意シテ其下緣ヲ按觸スルヲ適當トス是レ結節ハ時トメ恰モ此部ニ於テ鈕狀ノ隆起物トナリテ現ハルヽ「アレハナリ而メ「フォン、ブレーリヒ」氏カ示セル如ク肝臟萎縮ニ於テハ肝臟ノ表面殊ニ微細顆粒狀ヲ呈シ之レニ反シ肝臟ノ「エヒノコッケン」ニ於テハ巨大ナル隆起ヲ感觸スル「屢」之アリ又大ナル癌腫結節ニ於テハ結節上ニ中心窩ヲ認ムル「アリ是レ癌臍 *Krebsdelle.* ニメ疑似決シ難キニ臨ンテハ鑑別上用ナキニアラス

時トメハ肝臟ノ觸診當リ其前面ニ止マラスメ亦手指ヲ深ク肝臟下緣ノ下際ニ送入シ可及的肝臟下面ヲ觸試スルノ必要ナル「アリ是レ隣接器臟(胃腑、結腸、膵、腎臟、網膜)ニ於ル腫瘍ヲ肝臟ヨリ區別スルノ際緊要ナルモノトス

觸知シ得ヘキ肝臟ノ硬度ハ屢「肝臟病ノ性質ヲ指示スル「アリ例之脂化セル肝臟ハ其硬度健全ナル肝臟ト異ナルナキモ澱粉變性セル肝臟ハ木材樣ノ硬性ヲ現ハスカ如シ這般ノ硬度感覺ハ肝臟腫瘍ヲ診斷スルニ當リ殊ニ貴要ナリトス何トナレハ液性內容ヲ含有セル隆起(膿瘍、包虫胞)ハ波動感覺ニ依リテ固性腫瘍ヨリ區別スルヲ得レハナリ然レ𪜈時トメ之カ破格ヲ見ル「ナキニアラサルハ勿論トス例之「フォン、ブレーリヒ」氏既ニ多房性包虫胞ヲ有スル肝臟屢「軟骨樣ノ硬性ヲ現ハス「アルト之ニ反シ一種ノ波動ヲ呈スル軟性癌、肝臟ニ發見スル「アルトヲ唱ヘリ

肝臟包虫ニ於テハ時トメ著明ナル纖波狀ノ波動ヲ現ハス「アリ是レ「ブリアンコーン」及「ピ゛ォリー」兩氏ノ始テ水泡震顫 *Hydatidenschwirren.* ト名ケ記載セルモノコメ其診斷上ニ於ル聲價ハ稍「誇張ニ過キタリ而メ此現象ハ決メ常ニ存在スルモノニアラスメ「フォン、ブレーリヒ」氏ハ該

症患者ノ過半ニ於テ之ヲ認ムルヲ得サリシト又同氏ハ此現象ハ破格ナキニアラスト雖モ多クハ唯リ包虫嚢ノ緊張甚シカラス且嚢内ニ多數ノ嬢胞ヲ含有セルトキノミ之ヲ認ムルヲ得ルト云ヘリ此特異ナル震顫ハ左手ノ拇指ト中指トヲ以テ其胞ヲ把持シ傍ラ右手ヲ以テ短キ衝撃ヲ行フトキハ最モ明瞭ニ觸知スルヲ得ヘク又打撃ノ際毎打撃後暫時打指ヲ打診板上ニ靜置セシムルトキハ殊ニ著明ニ現ハル又「ダヴイヂ」氏ハ三指ヲ腫瘤ノ頂部ニ妥貼シ中指ヲ以テ之ヲ打撃スルノ法ヲ稱用セリ其他近世「デスプレ」氏ハ好テ次ノ法ヲ行ヘリ即チ甲者左手ノ一指ヲ緊ク腫瘍ニ當テ次テ腫瘤上ヲ短打シ同時ニ乙者手掌球ヲ腫瘤ノ近傍ニ貼スルトキハ明カニ震顫ヲ認ムヘシ

肝臓疼痛ノ檢査ニ於テハ嚴ニ彌蔓性ノ知覺過敏ト限局性ノ疼痛トヲ區別セサルヘカラス乙ハ肝臓膿瘍ヲ診斷スルニ當リ殊ニ注意スヘキ

モノニハ外科手術ノ際亦其用尠カラストス

肝臓ニ發生セル諸多ノ觸知シ得ヘキ變化ハ呼吸ニ應シ著明ナル變位ヲ呈スルニ依リ之ヲ徵知シ得ヘクハ吸氣毎ニ下降シ呼氣毎ニ上昇ス然レトモ這般ノ呼吸的變位ハ其强弱諸多ノ症ニ於テ同一ニアラサルハ素ヨリトス而ハ他ノ腹腔臓器ノ腫瘍并ニ皷腸及腹水ハ肝臓ノ呼吸的變位ヲハ著シク減少セシムルモノニハ又甚タ廣濶ナル肝臓肥大ハ通常僅微ノ呼吸的變位ヲ現ハスニ過キス加之若シ肝臓緊シク両季肋部ヲ充塞シテ移動スルヲ得サルトキハ其呼吸的變位全然消失スルニ至ル又肝臓ノ腫瘍ハ屢劇シク横隔膜ヲ壓迫シテ横隔膜筋ノ强劇ナル萎縮ヲ喚起シ之カ爲メ横隔膜ノ呼吸ニ應シテ肝臓ヲ移動セシムルノ力不全トナル又肝臓表面ノ大部腹壁ト癒着スルトキハ肝臓ノ呼吸的移動困難トナルヤ素ヨリ論ヲ要セス其他横隔腹膜ノ疼痛性炎症ニ於テモ亦

其移動缺如スルモノトス是レ疼痛ノ爲メ患者不識不知横隔膜ノ運動ヲ抑制スレハナリ

肝臟腫瘍ノ呼吸ニ應メ移動スルノ性アルハ肝臟腫瘍ト胃、網膜、膵、結腸及腎ノ腫瘍ト異ナル所タルハ既ニ視診ノ條下ニ掲載セリ蓋胃、網膜等諸臟器ノ腫瘍ニ於テハ唯リ臟器ノ肝臟ト癒着セル片呼吸的變位ヲ呈スルヿアルニ過キス然レ𪜈之ニ在テモ多クハ觸診ニ依リテ腫瘍ヲ肝臟面ヨリ區別スルヲ得ヘク其他下文記載セル觸診ノ成績及官能障碍ヨリスルモ亦之ヲ鑑別スルニ足ルナリ「ザックス」氏ハ腹壁ノ膿瘍ト肝臟膿瘍トヲ辨別セントシ膿瘍内ニ細小ノ長針ヲ刺入スルノ法ヲ稱用セリ即チ肝臟膿瘍ナル片ハ長針其頭端ト共ニ呼吸運動ヲ現ハスモ腹壁ノ膿瘍ナル片ハ毫モ移動スルヿナシト此檢査法ハ爾他ノ肝臟疾患ニ於テ疑似決シ難キニ際シテハ亦試用ニ堪ヘタリ

肝臟呼吸ニ應シテ移動スルノ際時トメ摩擦音ヲ觸知スルヿアリ是レ「ピーチー」「ブライト」両氏ノ始テ記載セル所ニメ多クハ亞急性若クハ慢性炎ニ於テ肝臟表面粗糙トナレルニ由リテ發生シ急性炎ニ於テ遭遇スルヿアルハ稀ナリ然レ𪜈「バーテルソン」氏ハ之レニ於テモ亦確然感觸スルヲ得タリト云フ其性或ハ輕ク摩スルカ如ク又或ハ硬クメ咿軋スルカ如キヿアリ而メ其發スルヤ啻リ呼吸運動ニ由ルノミナラス腹壁ノ肝臟表面ヲ移動スルノ際亦之ヲ喚起スルヿアリ余ハ屢腹水液排泄後此摩擦音ノ頗ル著明ニ發現スルヲ見タリ然レ𪜈液汁更ニ潴溜シテ肝臟表面ト腹壁間ニ嵌入スルヤ再ヒ消散シ復之ヲ認ムルヲ得サリキ又近世「エルグ」氏ハ右肺下緣、脊柱、中腋窩線及腸骨櫛間ノ部位ニ於テ亦此摩擦音ヲ認ムルヿ稀ナラサルニ注目セリ故ニ肝包炎、慢性及亞急性腹膜炎ニ於テハ殊ニ注意シテ此部ニ於ル摩擦音ノ有無ヲ觸試セス

ソハアルヘカラス

上記ノ他尚膽囊ノ觸診ハ殊ニ注意スヘキモノトス「ゲルハルト」氏ノ說ニ從ヘハ膽囊ハ許多ノ健康體ニ於テ胃腑及腸管空虛ナルトキハ扁平ナル隆起トナリテ露ハレ試ニ壓迫スルトキハ小囉音ヲ放チテ消失スト蓋膽汁總輸膽管ヨリ排泄セラレサルトキハ屢〻手指ヲ以テ膽囊ヲ觸知スルヲ得ヘク又其經界ヲ定ムルヲ得ルヿアリ其際膽囊ハ滑澤ニシテ緊張シ且波動アル梨子狀ノ腫瘤トナリテ現ハル又肝臟下方ニ轉位セルトキハ膽囊ノ充實尋常ナルモ尚之ヲ感觸シ得ルヿ屢〻之アリ

輸膽管ノ閉塞ニ由リテ頗ル多量ノ漿液稀ニハ膿液、膽囊內ニ潴溜(膽囊水腫)セルトキハ巨大ノ腫瘤ヲ發生スルヿアルモノニシテ時トシテ兒頭大トナルヿアリ然レモ猶依然膽囊ノ形狀ヲ保持シ滑澤ニシテ波動アリ且甚シク緊滿セルヲ見ルヘシ然リ而シテ此腫瘤ハ往々頗ル側方ニ移動シ易

ク亦呼吸的變位ヲ現ハスヿアリ若シ此腫瘤ト肝臟下緣トノ間ニ橫行結腸嵌入シ爲メニ觸診上幷ニ打診上兩者別離セルノ看ヲ呈スルトキハ診斷頗ル困難トナルモノニシテ腫瘤其下面ニ於テ環狀纖維ノ爲メニ絞約セラレ腎狀形ヲ爲ストキハ殊ニ然リトス此ノ如キ症ニ於テハ該腫瘤ノ呼吸的移動ニ注意シ又被蓋セル腸管ヲ强ク壓迫シ以テ直接ニ腫瘤ノ肝臟ニ連續セルヤ否ヤヲ檢索セスンハアルヘカラス

膽囊壁ノ癌腫變性ハ膽囊截痕ノ下部ニ硬固ナル結節狀ノ腫瘤ヲ呈スルヿアリテ爾他ノ症ト誤診スルノ危險少カラス例之膽囊ノ慢性炎症ハ畧〻同樣ノ變化ヲ起シ唯腹壁トノ癒着ノ爲メニ呼吸的變位缺如セルノ差アルニ過キサルカ如シ又橫行結腸內ノ宿便モ類似ノ觀ヲ爲スヿアリト雖モ之ニ在テハ膽囊ノ直接ニ結腸ヲ掩フニ依リ之ヲ區別シ得ヘク殊ニ下劑ヲ服用セシムルトキハ疑團氷解スヘシ

觸知スルヲ得ヘキ膽囊內ノ膽石ハ之ヲ膽囊ノ癌腫ト錯誤スヘカラス若シ膽囊內ニ數個ノ石片ヲ含有スルトキハ時トシテ石片ノ移動ニ由リテ抓ク如ク又響クカ如キ一種ノ感覺ヲ觸知スルモノニシテ聽診スルトキハ鑛性ノ騷響トナリテ現ハル「ヨット、エル、ベチット」氏ハ之ヲ比スルニ胡桃ヲ盈セル囊ヲ打擊スルノ際認ムル感覺ヲ以テセリ

膽囊ノ呼吸的變位亦觸知的摩擦音ヲ伴フ「アリ「モスレル」氏ハ癌腫變性セル膽囊ニ於テ此現象ヲ現ハセシノ實驗ヲ記載セリ

時トシテ膽囊ニ限劃セル壓痛ヲ發スル「アリ若シ膽石ノ膽囊或ハ輸膽管ヲ刺戟スルニ由リテ發生セルモノナルトキハ診斷上樞要ナリトス

肝臟ノ搏動ハ觸診ノ條下ニ記載スヘキモノナリト雖モ既ニ上章ニ於テ詳論シ復記載スヘキモノナシ

上記ノ他尙觸診症候ニ屬スルハ肝咳 *Leberhusten.* ニシテ近世「ノイマン」氏再ヒ肝臟肥大アル患者ニ於テ肝臟ノ一定部分ヲ壓迫スルトキハ時トシテ咳嗽ヲ喚起シ得ルニ注意セリ然レモ反復壓迫スルトキハ遂ニ其効驗ナキニ至リ暫時休憩スルノ後再ヒ現出ス蓋此現象ハ延髓ノ媒介ニ依リテ咳嗽筋ニ傳搬セル迷走神經末梢ノ器械的刺戟ニ關スルモノナルヤ明カナリ

(八) 肝臟ノ打診 *Perkussion der Leber.*

肝臟ノ打診音ハ豫メ其解剖的位置ヲ通知スルニアラサルヨリハ正シク之ヲ理會スルヲ得サルカ故ニ余ハ先ツ此ニ其位置ヲ揭載セントス

肝臟ハ人身ノ腺體中最大ナルモノニシテ其大部分ハ右季肋部ニ位スルモ左葉ハ中線ヲ超テ遠ク左季肋部ニ達ス而シテ中線ノ右側ニ

位スル肝部ハ肝臓右葉「スピーゲル」氏葉及方形葉ニメ殆ト全器ノ四分三ヲ占メ左側ニ位スル部ハ單ニ肝臓左葉ヨリ成リテ全器ノ四分一ヲ有ス此肝臓左葉ハ平均五乃至七「センチメーテル」許中線ヲ超過スルモノトス

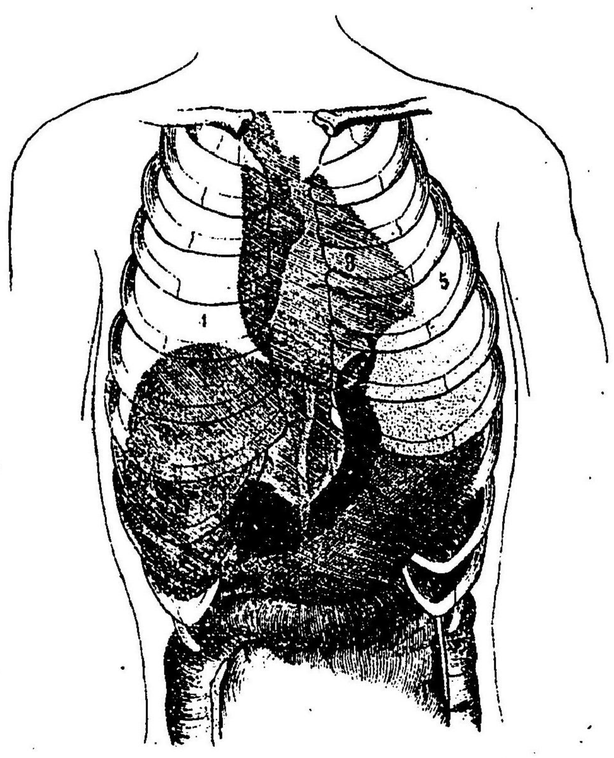
肝臓ハ其穹窿セル上面ヲ以テ陷凹セル横隔膜頂部内ニ箝入シ其右側ニ於ル上縁ハ左縁ヨリ稍〻高シ是レ生活體ニ於テ肝臓右上縁ノ最高點(乳線及副胸骨線間ニ位ス)ハ第五肋軟骨ノ上縁ニ應スルモ左縁ノ最高部ハ右側ニ比スレハ一肋骨廣徑許低位即チ第五肋軟骨ノ下縁ニ位スルニ依リ知ルヘシ(第百八十二圖)

肝臓ノ上部ハ右側ニ於テ其周圍肺ヨリ被蓋セラルヽカ故ニ肝臓濁音ハ自ラ二種ノ區別ヲ生スルモノニメ其關係ハ猶心臓ニ於ルカ如シ而メ其一ハ小肝濁音 *Kleine Leberdämpfung.* ニメ其音鈍ク胸壁

第百八十二圖

前面ヨリ認メル肝臓ノ位置

(1)肝臓
(2)膵臓
(3)心臓
(4)右肺
(5)左肺
(6)豫備肋膜腔



ニ直接セル肝部ニ應シ一ハ大肝濁音 *Grosse Leberdämpfung.* ニメ濁性ヲ帶ヒ肺ノ一部ヨリ蓋ハレタル肝部ニ屬ス故ニ甲ヲ經界セントスル片ハ弱打法ヲ用ヰ乙ノ境界ヲ敲定セントスル片ハ强打法ヲ用ヰスンハアルヘカラス

然レモ肝臓ノ大濁音ハ肝臓ノ眞正ナル大サヲ示スモノト誤解スヘカラス何トナレハ肝臓ヲ被蓋セル肺部ハ肝臓ノ最高點ニ於テ五「センチメーテル」ノ厚徑ヲ有スルカ故ニ打診上之ヲ測定スル能ハサレハナリ此部ハ恰モ肺臓下緣ヨリ三乃至五「センチメーテル」許上際ニ位スルモノトス

後胸面ニ於テハ肝臓大濁音前胸面ニ於ルカ如ク著明ナラサルヲ常トス是レ肺臓後緣ハ其厚徑前緣ノ如ク漸次ニ減殺セスメ却テ頓ニ厚層ヲナシテ肝臓上ニ終止スレハナリ

左上肝緣ハ心臓ノ直下ニ位スルヲ以テ打診ニ由テ之カ境界ヲ定ムルヲ得ス故ニ唯一直線ヲ以テ胸骨體及劍狀突起ノ接合部ト心尖搏動部トヲ連結シ學說上之ヲ假定スルノミ

肝臓下緣ハ第十二肋骨ノ脊柱端ニ於テ脊柱ノ側部ニ起始シ直チニ第十一肋骨ノ下緣ニ進ミ右肩胛線及腋窩線間ニ於テハ之ト併行シ右乳線ニ於テ肋骨弓下ニ現ハレ之ヨリ漸次ニ上行シ劍狀突起ノ始部ト臍トノ中間ニ於テ中緣ヲ横過セリ

肝臓左葉ノ下緣ハ中線ニ始リ上內方ニ走リ通常左第七八肋軟骨ノ結合部ニ於テ胸廓左緣ヲ過キ左乳線ト左副胸骨線トノ間部ニ於テ左上肝緣ニ移行ス而ノ其最外點ハ或ハ心尖搏部ノ下部ニ位スルアリ又或ハ却テ其內方ニ存スルアリ然レモ時トメ左腋窩線及脾臓ニ達スルヿ亦之ナキニアラス但通常ハ肝臓左葉及脾臓間

ニ胃腑箱在スルモノトス

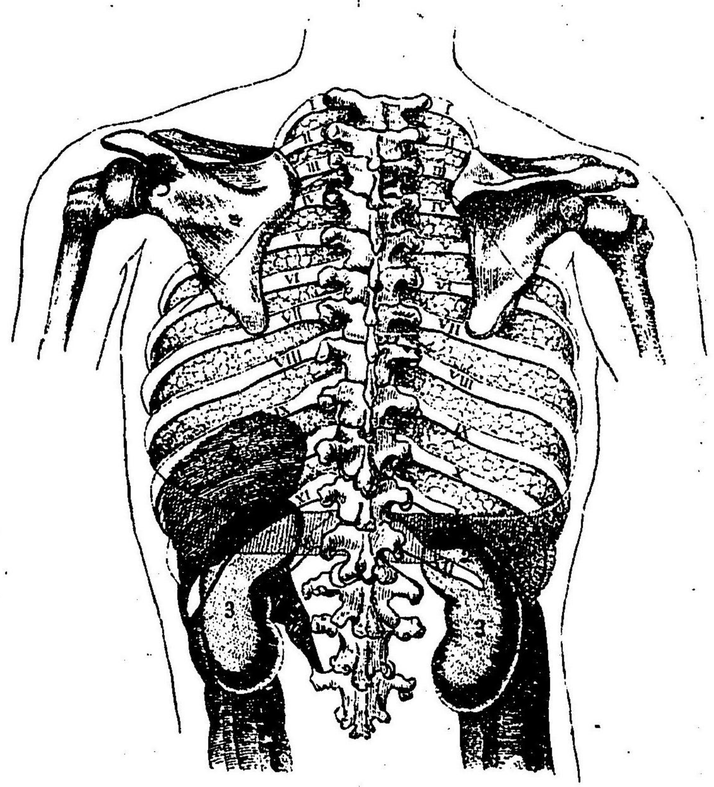
肝臓ノ下緣ハ諸部ニ於テ每常打定シ得ヘキニアラス蓋脊柱ノ近傍ニ於テハ肝臓下緣右腎ニ觸接シ加之其一部ヲ掩フカ爲メ此部ニ於テハ肝臓濁音直接ニ所謂腎濁音ニ連續スルナリ(第百八十三圖)又爾他ノ部位ニ於テハ肝臓ノ下緣胃或ハ腸ヨリ圍繞セラルヽモ肝臓濁音ノ皷音ニ轉スルニ依リ之ヲ限界シ得ヘシト雖モ若シ固形體アリテ胃腑及結腸ヲ充實セルトキハ肝臓下緣ヲ打定スルヲ得ス故ニ此際ニ於テハ適當ナル時間ヲ俟ツカ或ハ豫メ下劑ニ由テ腸內容ヲ蠲滌セサルヘカラス

肝臓下緣ハ銳利ニ〆僅カニ一「センチメーテル」ノ厚徑ヲ以テ終ルカ故ニ之ヲ測定セントスルトキハ力メテ弱打セサルヘカラス而〆觸覺打診ハ屢〻此ニ殊益アル「アリ若シ之ニ反シ强劇ナル打擊ヲ

第百八十三圖

後面ヨリ望メル肝臓ノ位置

〔1〕肝臓
〔2〕漢備肋膜腔
〔3〕腎臓
〔4〕脾臓



行フトキハ肝濁音ノ下界遙カニ高處ニ終止ス此際肝臓ノ下界ハ常ニ濁性鼓音ノ純鼓音ニ移行スルノ部ニ在リトス

其他肝臓下縁ニ於ル二個ノ截痕ノ位置ハ診斷上緊要ナルモノニメ膽囊截痕ハ右乳線ト直腹筋外縁トノ間ニメ胸廓縁ノ直下ニ在リ中線ヲ距ル平均三乃至五「センチメーテル」トス又圓靭帶截痕ハ通常中線内ニ位ス

肝臓前面及側面ノ打診ハ背位ニ於テ行フ「最モ適當ナルモ後面ハ坐位若クハ竪立位ニ於テスルヲ便ナリトス又濁音部ノ上界ハ上記ノ理ニ依リ強打法ヲ要スト雖モ小濁音部ノ上下界ハ弱打法ヲ行ハスンハアルヘカラス而メ觸覺打診ハ常ニ肝臓ノ境界ヲ測定シ易ラシムルモノトス又打診ハ順次ニ各胸線ノ方向ヲ追フテ上方ヨリ下方ニ到ルヲ要スルモノニメ大濁音部ノ上界ハ肺清音ニ移行スルニ依リ小肝濁音

部ノ上縁ハ濁性音ノ發生ニ依リ其下縁ハ清朗ナル鼓音ノ現出ニ依テ之ヲ知ルヘシ

小肝濁音部ノ境界ヲ測定スルハ容易ニメ且確實ナルヲ得ヘシト雖モ大濁音部ニ至テハ然ラス是レ之ニ在テハ打診音鈍性ナラスメ單ニ比例的濁音ナルニ由ルナリ蓋此種ノ打診音ハ熟達ノ士ニ在テモ其見ル所各同シカラス是ヲ以テ一二ノ記者ハ肝臓ノ諸變化ハ既ニ小濁音ニ現ハルヽモノトシ大肝濁音部ノ測定ヲ全然廢棄セントセリ然レモ此說タル到底妄誕ヲ免レサルナリ何トナレハ元來小肝濁音部ノ廣狹ハ獨リ肝臓下縁ノ位置ニ關スルモノニメ若シ肝臓下縁ノ位置異常ニ低下スルカ若クハ上昇スルトキハ肝臓自家ノ大小毫モ變化ナキモ小肝濁音甚シク縮小シ或ハ增大スル「アレハナリ

小肝濁音部ハ其上界下肺縁ノ經過ニ關シ下界ハ肝臓下縁ノ解剖的經

過ニ一致スルモノニメ上界ノ位置ハ左ノ如シ

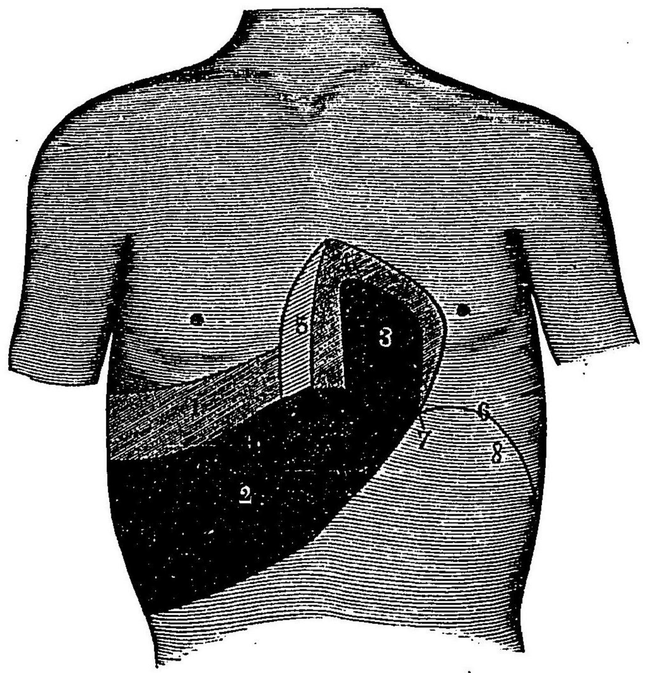
右胸骨線……第五肋軟骨下緣
右副胸骨線……第六肋軟骨上緣
右乳線……第六肋骨下緣
右腋窩線……第七肋骨下緣
右肩胛線……第九肋骨
脊柱ノ近傍……第十一肋骨下緣

以上ノ肝臟上界線ハ胸圍ニ一條ノ地平線或ハ稍〻下方ニ向ヒテ穹窿セル線條ヲ成セリ(第百八十四圖)

小肝濁音部ノ下界ハ脊柱ノ近傍ニ於テハ腎部濁音ヨリ區別スルヲ得ス(第百八十五圖)而メ肩胛線及腋窩線ニ於テハ第十一肋骨ニ併行シ乳線ニ於テハ胸廓緣ト交叉シ之ヨリ左上方ニ走行シ劍狀突起始部ト臍

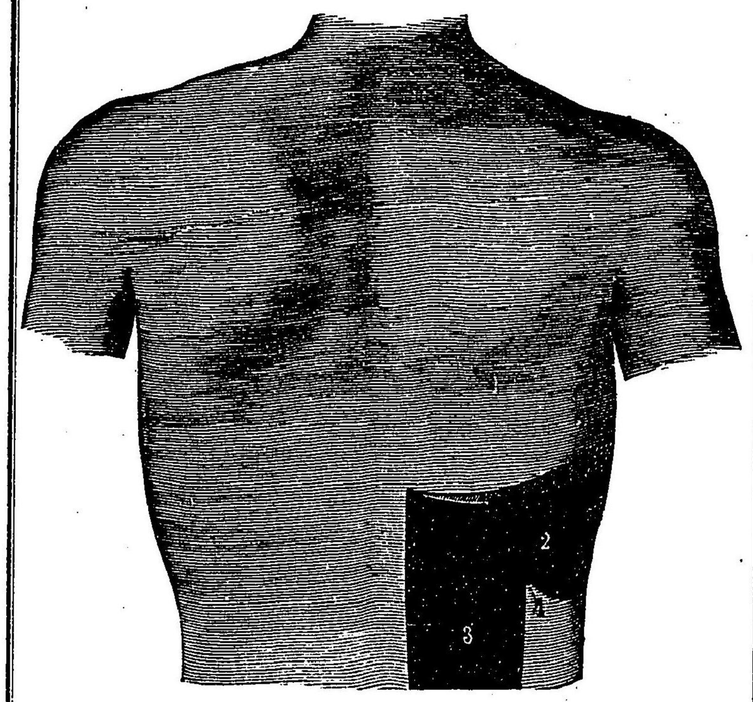
第百八十四圖

肝臟濁音部ノ形狀ヲ示ス
(1)大肝濁音部
(2)小肝濁音部
(3)小心濁音部
(4)大心濁音部
(5)心臟抗抵
(6)左肺下緣
(7)肝肺角
(8)「トラツベ」氏半月狀部



第百八十五圖

後面ニ於ル肝臓濁音部
〔1〕大肝濁音部
〔2〕小肝濁音部
〔3〕腎濁音部
〔4〕肝腎角



トノ中間部ニ於テ中線ヲ横過シ遂ニ左副胸骨縁ト乳線トノ間ニ於テ心尖搏動ノ下部ニ終リ其左肺下縁ト相抵觸スル部ニ於テ所謂肝肺角ヲ形成ス(第百八十四圖)然レモ若シ肝臓左葉心尖搏動ノ下際ニ到達セス却テ既ニ心尖搏動ノ内方ニ終ルキハ脾臓下縁ト心臓濁音部下縁トノ間ニ肝心角ヲ生スヘシ

肝臓濁音ハ胃腑ニ屬スル一帶ノ鼓音ニ由リテ脾臓濁音ヨリ區別セラルヽモ若シ肝左葉脾臓ニ達スルキハ兩器ノ濁音著キ經界ナクシテ相移行ス是レ肝左葉ノ肥大ニ於テ見ル所ニメ常態ノ肝臓ニ現ハルヽアルハ稀ナリ此際肝臓下縁ト脾臓前縁トノ間ニ異常ナル肝脾角ヲ發生ス

或人ハ屢尺度ヲ以テ小肝濁音部ノ大サヲ定メントセリ然レモ諸家ノ測定セル數價ハ甚シク相逕庭セルヲ見ル是レ小肝濁音部ノ

眞正ナル大サハ各人ニ從ヒ差異アルニ由ルナリ故ニ寧ロ解剖的境界ヲ撰フニ若カサルナリ

大肝濁音部ハ殆ト皆小肝濁音部ノ上緣ト併行シ是ヨリ三乃至四「センチメーテル」上際ニ位ス然レモ大肝濁音部ハ決メ肝臟眞正ノ大サニアラス是レ既ニ上文記載セル所ナリ

肝臟濁音部ハ既ニ生理上ノ關係ニ由リテ縮小及增大スルモノトス

吸氣ノ際肺下緣ノ下方ニ移動スルヤ肝臟ノ下降ヨリ著明ニメ肺下緣ハ三乃至四「センチメーテル」低下スルモ肝下緣ハ僅カニ一乃至一、五「センチメーテル」許移動スルニ過キサルカ故ニ小肝濁音部ハ吸氣毎ニ著シク縮小ス加之左側臥ニ於テ深吸氣ヲナス片ハ小肝濁音部ノ縮小頗ル顯著ニメ唯狹隘ナル濁音ノ線條ヲ殘スノミニ至ル是レ右肺ノ殆ント全豫備腔ヲ充塡スルカ爲メナリ又肝臟濁音部ノ大サハ體位ニ關係アルモノニメ「ゲルハルト」氏ノ唱ヘシ如ク左側臥ニ於テハ肝臟左葉、右葉ヨリ高位ニ在リ右側臥ニ於テハ之ニ反ス而メ其際兼テ體ヲ低下セシムルトキハ常ニ該側ノ濁音部ヲ縮小セシム其他竪立位ニ於テハ肝臟臥位ニ於ルヨリ殆ト一「センチメーテル」低下ス

肝臟濁音部ハ或ル病態ニ於テ或ハ缺如シ或ハ增大シ或ハ縮小シ又或ハ轉位スルヿアリ

肝臟濁音部ノ消失ハ肝臟常位ヲ辭シテ深ク腹腔內ニ沈降スル片(逍遙肝)現ハルヽモノニメ之カ爲メ肝部ニ於テハ肺ノ清音直チニ腸ノ鼓音ニ移行ス然レモ轉位セル肝臟ヲ壓迫メ常位ニ復セシムルヲ得ル片ハ再ヒ肝臟濁音ヲ呈スルニ至ル

又瓦斯腹膜腔內ニ竄入シテ肝臟ヲ胸壁ヨリ離隔セシムル片ハ亦肝臟濁音部消失スルモノニメ肝臟濁音部ニ於テ鼓音ヲ認ム但若シ肝臟表

面及横隔膜互ニ癒着スルトキハ此現象缺如スヘキハ論ヲ要セス

時トシテ肝臓及脾臓其位置ヲ更替(内臓變位症)シ之カ爲メニ尋常ノ肝臓部ハ其大部鼓音ヲ放チ却テ左季肋部ニ於テ肝濁音ヲ證明シ得ルヿアリ宜シク肝濁音部ノ消失ト錯誤スヘカラス此症ニ於テハ通常心臓亦右胸側ニ轉位スト雖モ「ザロモン、マリノ」及「モスレル」氏ハ内臓變位ノ單ニ肝臓及脾臓ニ止リシモノヽ實驗ヲ記載セリ

肝臓濁音部ノ縮小ト肝臓容積ノ縮小トハ其義同シカラス何トナレハ或ル病症ニ於テハ肝臓濁音縮小スルモ肝臓ノ大小ニ變化ナキヿアレハナリ例之横行結腸肝臓表面ト胸壁トノ間ニ箝入スルノ際小肝濁音縮小スルカ如シ此ノ如キモノニ於テハ強ク打診板ヲ以テ腸管ヲ壓迫シ之ニ由テ鼓音ヲ肝臓濁音ニ變セシムルヲ試ミサルヘカラス「フォン、フレーリヒ」氏ノ說ニ這般ノ現象ハ肝臓濁音ノ各徑線著ク差異アルノ際殊ニ推知スルニ足ルト云ヘリ

又或ル疾患ニ於テハ肺臓ノ下緣上方ヨリ深ク肝臓表面ヲ掩ヒ之ニ由テ小肝濁音部ヲ縮小セシムルヿアリ是レ氣胞性肺氣腫ニ於テ見ル所トス

肝臓濁音部ノ縮小ハ亦鼓腸ニ於テ現ハルヽモノニメ其理肝臓下緣ヲ打診スルノ際胃腑及腸管亦共ニ震顫スルニ在リ故ニ之ニ在テハ常ニ弱打法及觸覺打診ニ依リテ肝臓下緣ヲ測定スルニ注意セサルヘカラス

肝臓濁音部ノ縮小ハ凡テ横隔膜及肝臓ヲ強ク壓上スル諸般ノ狀態ニ於テ亦發スルヿアリ鼓腸及腹水其他就中網膜及卵巢ノ腫瘍等皆之カ原因ト成ル其際肝臓ノ位置モ亦變換シ「フォン、フレーリヒ」氏ノ所謂肝臓緣位 *Kantenstellung der Leber.* ヲナス則チ肝臓ハ上方ニ向ヒテ其後緣ノ

周圍ヲ廻轉シ之ニ由テ唯肝臓前面ノ一小部或ハ單ニ其前縁ノミ胸壁ト觸接シ從テ小肝濁音部減少シテ狹隘ナル線條ヲナスニ至ル

肝臓ノ縮小ニ基因スル肝臓濁音部ノ縮小ハ急性黄色肝萎縮ニ於テ數日内ニ發生スルモノコメ其原因ハ肝臓縮小シテ軟泥様トナリ脊柱ニ向ヒテ退去シ腸管其前面ヲ掩フニ在リ

又肝臓ニ於ル諸多ノ慢性萎縮性疾患ハ漸々肝臓ノ縮小ヲ起スモノニメ通常肝臓左葉ヨリ始ル爲メニ該葉ハ其高徑減少シ外端中線ニ向テ退縮シ之ニ由テ從前ノ肝肺角ハ變シテ肝心角トナル

肝臓濁音部ノ増大ヲ以テ肝臓自家ノ増大ト同一ト看做スヘカラス若シ肝臓濁音部ノ増大、肝臓ノ増大ニ基因セルトキハ肝臓ノ上界常位ニ在リテ唯リ下界ノミ低下シ同時ニ肝臓左葉ハ遠ク左方ニ進ミテ脾臓面ニ達シ其前縁ト肝脾角ヲナスヿ稀ナラス又腫瘍ハ肝臓上縁ノ近傍ニ

發生セルトキノミ上方ニ蔓延スルモノニメ兼テ肝臓上縁ニ多少限劃セル波狀若クハ半環狀ノ隆起ヲ呈ハス是レ殊ニ包虫ニ於テ屢〻遭遇スルモノニメ其際壓排ノ力第二肋骨ニ達スルヿアリ此ノ如キ症ニ於ル濁音ハ限劃性ノ肋膜炎性滲出物及肺浸潤ト誤診シ易キノ惶レアレモ乙ニ於テハ濁音ノ他氣管枝呼吸音、鑛性囉音及増强セル聲音震顫ヲ認メ又甲ニ於テハ肋間腔消滅ノ呼吸的移動欠如セルニ注意スルトキハ之ヲ避クルヿ難カラス然レモ稀ニハ是等ノ現象「フォン、ブレーリヒ」氏カ其豐富ナル經驗ニヨリ撰擇セル實例ニ徵シテ示セル如ク肝臓ノ包虫ニ於テモ亦現ハルヽヿアリ然ルトキハ診斷ノ際疾患發達ノ經過ニ注意セサルヘカラス又肝臓表面ト横隔膜トノ間ニ包裹セラレタル腹膜炎性滲出物ハ肝臓上縁ニ發生セル腫瘍ノ如ク亦濁音ヲ放チ其症狀包裹セラレタル肋膜炎性滲出物ト異ナル所ナキカ故ニ屢〻誤診ヲ招クヿアリ

肝臓濁音部ノ假性增大ハ胃腑或ハ結腸ノ固形體ヲ以テ充實セラレタルノ際往々發生スルヿアルモノニメ是等臓器ノ腫瘍モ亦同一ノ結果ヲ來タスヿアリ故ニ甲ニ於テハ自然若クハ下劑ニ依リテ便通ヲ得ルニ至ル迄檢査ヲ延引シ乙ニ於テハ觸診ニ由テ臓器ノ境界ヲ定メ且腫瘍上ノ打診音皷性ヲ帶ヒサルヤニ注意スルヲ要ス是レ肝臓ノ眞正增大ナル片ハ打診音一層鈍濁シ皷性ヲ帶ヒサレハナリ

肋膜炎性滲出物及肺ノ帶狀浸潤ハ亦肝臓濁音ヲ假リニ上方ニ增大セシム然レモ肺浸潤ニ於テハ氣管枝呼吸音、鑛性囉音アリテ聲音震顫增强シ肋膜炎ニ於テハ肋間腔消滅シ呼吸的移動微弱ニメ且濁音部ノ形狀異ナレリ即チ肝臓肥大ニ於テハ濁音界屢〻前後ニ於テ高ク、腋窩腺ニ於テ低キモ肋膜炎ニ在テハ脊柱ノ近傍ニ於テ最モ高ク之レヨリ斜ニ前方ニ向テ下行ス「ストーク」氏ノ說ニ饒多ノ滲出物ハ横隔膜穹窿部ヲ壓下メ横隔膜ト肝臓上面トノ間ニ一條ノ溝ヲ形成シ啻ニ觸知シ得ルノミナラス屢〻亦目視シ得ルヿアリト云ヘリ然レモ「フオン、フレーリヒ」氏ハ既ニ此症候ノ信據シ難キヲ示セリ蓋此症候ハ常ニ顯著ナル滲出物ニ於テノミ現ハルヽモノナリト雖モ其際腹壁ハ强ク緊張セルカ故ニ之ヲ證明スルヲ得サレハナリ加之肝臓ノ腫瘍胸廓緣ノ近傍ニ占居スル片ハ亦同樣ノ溝湟ヲ現ハスヿアリ

腹壁甚シク緊張スル片ハ肝臓濁音部亦假性ノ增大ヲ呈ハス是レ緊張セル腹壁ノ濁音ヲ放ツニ職由スルナリ

肝臓濁音部ノ變位ハ諸多ノ狀況ニ於テ發生スルモノニメ其上行ハ皷腸、腹腔內臓ノ腫瘍ニ於テ之ヲ見ル但既ニ詳論セルカ如ク其際屢〻肝臓ノ緣位及小肝濁音部ノ縮小ヲ合併スルモノトス其他右肺ノ萎縮モ亦肝臓ヲ上方ニ變位セシム

肝臟ノ下行ハ高度ノ氣胞性肺氣腫ニ於テ發生シ其他滲出性肋膜炎、氣胸、心包炎、縱隔膜腔腫瘍、横隔膜及肝臟間ノ腹膜滲出物及肝臟繫帶ノ弛緩モ亦之カ原因トナルヿアリ而メ肋膜炎及氣胸ニ於ル變位ハ同一ノ作用ニ依リ發生スルモノニメ右側ノ疾患ニ於テハ肝臟右葉ノ下緣頗ル低下シ左葉ハ尋常ヨリ高位ニ在ルヲ常トス蓋肝臟ハ圓靭帶ノ周圍ヲ右下及左上方ニ迴轉スレハナリ其際心臟ハ肝臟左葉ノ爲メニ壓上セラルヽヿアリ是レ心尖搏動ノ位置ニヨリ容易ニ之ヲ知ルヘシ又左側ノ疾患ニ於テハ肝臟左葉下行スト雖モ通常ハ全肝臟右方ニ壓迫セラル「フオン、ブレーリヒ」氏ハ此際時トメ肝臟ノ全部中線ノ右側ニ位スルヿアルヲ示セリ稀ニハ肋膜炎ニ於テ兩肝葉ノ境界部稍屈折シ健側ノ肝葉ハ常位ニ在ルモ患側ノ肝葉ハ下方ニ變位スルヿアリ其他滲出性心包炎ニ於テハ肝臟ノ全下緣下方ニ壓迫セラルト雖モ殊ニ左緣ニ

於テ著明ナリトス

「ゲルハルト」氏ノ說ニ膽囊ハ胃腑及腸管空虛ナルトキハ健康體ニ於テモ亦打診スルヲ得ヘシト蓋膽囊ノ境界ハ異常ノ充盈ニ由ルト壁質ノ癌腫變性ニ由ルトヲ問ハス膽囊增大セル時ハ常ニ之ヲ打定スルヲ得ヘシ

(二) 肝臟ノ聽診 *Auskultation der Leber.*

肝臟ハ之ヲ聽診スルモ其成績甚タ僅少ニシテ且殆ト固有ノ診斷的症候ヲ缺クモノトス

肝臟ヲ聽診スルノ際傳播性呼吸音及心音ヲ聽取スルヿ稀ナラス是レ肺若クハ心臟ヨリ肝臟面ノ一部ヲ超ヘテ傳達セル呼吸音若クハ心音

ニ外ナラス

稀ニハ肝臟ニ於テ亦自發性血管雜音ノ發生スルヿアルカ如シ「レヵポルド」氏ハ肝臟癌ノ一患者ニ於テ其性嘯クカ如クコノ心臟ノ縮期毎ニ增盛スル一種ノ血管雜音ヲ聽取セルノ實驗ヲ公ニシ且氏ハ之ヲ以テ肝臟ノ動脈及毛細管內ニ發生セルモノトセリ

肝臟ノ聽診症狀中ニ猶摩擦音ヲ算入セントス是レ屢〻觸知シ得ルモノニメ或ハ呼吸ト共ニ現ハレ或ハ壓迫ニ由テ現ハル而メ常ニ肝臟若クハ膽囊表面ノ粗糙トナレルヲ示スモノトス

其他膽囊內ニ結石アリテ互ニ移動スルヿハ時トメ鑛性音或ハ刮音ヲ聽クヿアリ

第七節　膵腺ノ診査　*Untersuchung der Bauchspeicheldrüse.*

膵ノ疾患ハ唯稀ニ確診シ得ルモノニメ其官能障碍幷ニ理學的徵候若シ存在スルヿアルヿハ)ハ頗ル疑團ヲ免レストス

理學的診法中殊ニ注意スヘキハ觸診ナリトス然レモ膵ノ深ク胃腑ノ後際ニ在リテ且ツ肝臟ヨリ掩ハルヽヲ察セハ良好ナル狀況ト腺質ノ著明ナル增大ト相ヒ合併スルニアラサルヨリハ之ヲ觸知スルヲ得サルノ理容易ニ覩ルヘシ故ニ健全ナル膵ハ到底之ヲ觸診スルヲ得ス況ヤ其厚徑ハ殆ト二、八「センチメーテル」ニメ廣徑ハ殆ト四、五「センチメーテル」ニ過キサルヲヤ

膵ヲ觸診セントスルヿハ亦通常ノ規則ニ遵ハサルヘカラス則チ下肢ハ股及膝關節ニ於テ屈曲シ兼テ股關節ニ於テ少シク外轉セシメ且檢査間患者ノ注意ヲ他ニ轉セシムヘシ又檢手ハ溫暖ナラ

シメ手指ハ力メテ漸次ニ深ク壓入セサルヘカラス其他時トメハ開口ヲ要スルヿアリ而メ嘔囉彷謨麻睡ハ腹壁ヲ著ク弛緩セシムルカ故ニ大ニ觸診ヲ容易ナラシムルノ効アリ膝肘位及浣腸ニ由テ横行結腸ノ內容ヲ蕩滌スルモ亦然リトス

膵ノ增大固性ノ腫瘍ニ基因セルトキハ常ニ長徑ノ腫瘤トメ觸知セラルヽモノニメ臍及劍狀突起間ノ中央ヨリ稍上際ニ於テ横徑ニ脊柱上ニ位ス而メ其後側ニハ腹部大動脈存スルカ故ニ時トメ腫瘍搏動ヲ呈スルヿアリ然ルトキハ大動脈瘤トノ錯誤ニ注意スルヲ要ス又腫瘍ヲ觸診スルノ際ハ常ニ其大小、表面ノ性狀、硬度及疼痛ノ有無ヲ檢セスンハアルヘカラス但腫瘍ノ呼吸的變位ハ或ハ缺如セルカ或ハ腫瘍、肝臟若クハ脾臟ト癒着シ其運動傳播スルニ由リ之ヲ現ハスヿアリ

膵ノ腫瘍ヲ隣接セル臟器ノ腫瘍ト誤ルヿアルハ往々見ル所ニメ殊ニ

脊柱ニ併行シ膵ニ接着セル淋巴腺ノ肥大ハ之ト誤診シ易シ

廣大ナル膵腺腫瘍上ヲ打診スルトキハ濁音ヲ呈スルモノニメ多クハ同時ニ上位ノ胃腑及腸管ニ基因セル鼓性餘響ヲ帶フ然レモ打診板ヲ强ク壓迫スルトキハ之ヲ消散セシムルヲ得ルヿ稀ナラス

其他增大セル膵腺、近傍ノ動脈ヲ壓迫スルトキハ聽診ノ際心臟縮期的血管雜音ヲ聽取スルヿアリ

膵腺ノ囊腫ハ時トメ著ク增大シ腹腔內ニ於テ波動性ノ腫瘍トナリテ觸知セラルヽヿアリ頗ル卵巢囊腫若クハ肝臟包虫ト誤診シ易シ然レモ「キュスチル」氏ノ說ニ膵囊腫ニ於テハ卵巢囊腫ニ反シ其下緣ト耻骨縫際トノ間ニ常ニ一帶ノ鼓音部ヲ認メ且炭酸ヲ以テ胃腑ヲ吹脹スルトキハ腫瘍ハ通常胃腑ノ後際ニ在ルヲ證明シ得ヘシト蓋此ノ狀態ハ亦以テ膵臟囊腫ト肝臟包蟲トヲ區別スルニ

足ルナリ

第八節　網膜ノ診査 *Untersuchung des Netzes.*

網膜ノ疾患ハ網膜ヲ著ク肥厚セシムルノ際唯リ理學的ニ檢査スルヲ得ルモノニメ殊ニ癌腫、包蟲腫及慢性炎症ノ如キ是ナリ

以上ノ病變ハ既ニ視診上或ハ限劃性或ハ蔓延性ノ隆起トナリテ現ハルヽアルモノニメ通常臍部ニ發見セラレ其呼吸的移動ハ唯腫瘍肝臓ト癒着セルノ際發見スルアルノミ然レ𪜈腫瘍上ニ於ル腹壁ノ呼吸的移動ヲ以テ腫瘍自家ノ移動ト錯誤セサルニ注意セスンハアルヘカラス

觸診ニ於テハ腫瘍ノ精密ナル境界殊ニ近接器關トノ關係、表面ノ性狀

硬度、疼痛ノ有無及移動性ヲ檢スルヲ要ス就中移動性ハ多クハ甚タ著明ナルモノニメ單ニ體位ヲ變更スルモ既ニ腫瘍其位置ヲ變スルヲ見ル而メ網膜ノ腫瘍ハ近接セル器關殊ニ肝臓及胃腑ノ腫瘍ト誤診シ易ク殊ニ變性セル網膜肝臓ノ如キ形狀ヲ呈スルヰハ之ヲ誤診スルノ危險更ニ大ナリ是レ「フオン、フレーリヒ」氏カ有名ナル實驗及圖畫ニ依テ證明セシ所ニメ近世「ペ、ミユルレル」氏モ亦生前逍遙肝ト檢定セル一患者ヲ剖檢セシニ網膜ノ變性セルモノニ外ナラサリシノ實驗ヲ報セリ而メ其辨別ハ理學的檢査ノ成績ニ依ルノ他疾患ノ發生及爾他ノ徵候ニ注意スルヲ要ス

打診ニ於テハ腫瘍部ノ濁音ヲ放ツヲ見ルヘシ但聽診ハ其功アルナシ

第九節　腸間膜及腹膜後淋巴腺ノ診査

Untersuchung der mesenterialen und retroperi-
-tonealen Lymphdrüsen.

腸間膜腺ノ疾患ハ決シテ原發性トナリテ現ハルヽヿナク而シテ肥大セル淋巴腺腹壁上ヨリ通觸シ得ルノ際唯リ之ヲ認識スルヲ得ルノミ此ノ如キ淋巴腺ノ肥大ハ多クハ乾酪變性ニ陷レル淋巴腺ニ於テ見ルモノニシテ癌腫變性ニ於テモ亦之ヲ觸知シ得ルヿアリト雖モ稀ナリトス其性狀ハ結節狀ニシテ移動シ易ク打診スル片ハ濁音若クハ濁性鼓音ヲ放チ近接セル臟器ノ腫瘍ト誤診シ易シ殊ニ硬固ナル宿便ハ誤診ノ源トナルノ恐レアリテ唯久時下劑ヲ服用セシムルニ依リ之ヲ避クルヲ得ルニ止ルヿアリ

腹膜後淋巴腺ノ疾患ハ腸間膜腺ニ反シ孤發スルヿアルモノヽヿシテ殊ニ原發癌ハ往々茲ニ發起ス然レモ淋巴腺、結節狀ノ大腫瘍トナレルノ際始テ觸知シ得ルニ過キス之ニ在テハ腫瘤多クハ脊柱上ニ坐シ上臍部ヨリ下、小骨盤內ニ達スルヲ見ル而シテ之ヲ打診スルニ打診板ヲ以テ上位ノ腸管ヲ强ク壓迫スル片ハ濁音ヲ呈スルモ然ラサル片ハ濁性鼓音ヲ放チ亦近傍ノ臟器ニ於ル腫瘍ト頗ル誤診シ易シ「ルーテルフォル」「ハルダム」氏ハ腹膜後淋巴腺腫瘍ヲ生時大動脈瘤ト誤診セシノ實驗ヲ記載シタリ

第十節　腹膜ノ診査　*Untersuchung des Bauchfelles.*

腹膜ノ檢査ニ於テハ別ニ理學的新檢査法アルヿナシ故ニ以下腹膜ノ理學的變化中最モ貴要ナルモノヲ列叙スルヲ以テ足レリトセン

(イ) 腹膜表面ノ粗糙 *Rauhigkeiten auf der Oberfläche des Peritoneums.*

腹膜表面ノ粗糙ハ急性、亞急性若クハ慢性ノ炎症ニ於テ發スルヿアルモノニシテ之カ理學的診斷ハ摩擦音ヲ聽觸スルニアラサレハ決スルヲ得ス然レモ是レ只稀ニ見ル處ノ症候ニ屬スルハ論ヲ要セス而シテ經驗ニ徵スルニ這般ノ摩擦音ハ亞急性及慢性腹膜炎ニ於テハ急性炎ニ比スレハ早時ニ現ハルヽモノトス蓋此音ハ「ピーチー」氏始テ記載シ次テ「ブライト」「デスプレ」及「コルクガン」諸氏ノ檢索セルモノニシテ一ニ「ブライト」氏雜音 *Brightsche Geräusche.* ノ名アリ

腹膜面ノ粗糙トナルハ炎症ノ部位ニ關スルモノニシテ肥大セル肝臟及

脾臟ノ被膜ニ於テハ比較的ニ多ク子宮若クハ卵巢ノ腫瘍上ニ於テモ亦稀ナラス然レモ腸管ノ一部ニ於テモ發現スルヿナキニアラス例之「ゲルハルト」氏ハ盲腸周圍炎ニ於テ之ヲ見タリト云フ

腹膜表面粗糙トナルヿハ觸診ノ際僅ニ觸ルヽカ如ク或ハ響クカ如ク又軋ルカ如キ摩擦ヲ感觸スルモノニシテ多クハ肋膜炎性摩擦音ニ等シク斷落ヲ爲ス是レ其聽診音ニ於テモ亦同キ處トス而シテ其發現ハ或ハ呼吸運動ニ關シ或ハ腹壁ノ壓迫及摩擦ニ由テ發シ又或ハ腸管ノ蠕動ニ基因スルヿアリ若シ横隔腹膜粗糙トナレルトキハ摩擦音心臟ノ運動ト一致スルニ至リ未熟ノ徒ニ在テハ恰モ心包摩擦音ナルカ如キノ感ヲ爲ス其他摩擦ノ持續時間ハ多クハ甚タ短キモ時トシテハ數月或ハ數年(余カ一患者ニ於テ實驗セルカ如ク)ニ亘ルヿアリ

（ロ）腹膜腔内ノ可動性遊離液 *Freie bewegliche Flüssigkeitim Peritoneahraum.*

腹膜腔ニ於ル可動性遊離液ノ滯留ハ滲漏機亢進ニ由リテ發生スルヿ最モ多キモノニメ此狀態ヲ名テ腹水 *Ascites.* ト云フ而メ腹膜炎ニ於テハ通常直チニ腸管間ニ癒着ヲ發シ液性滲出物ハ之ニ由リテ自由ニ運動スルヲ得サルニ至ルモ唯リ慢性漿液性腹膜炎ハ之カ破格ヲ爲ス此漿液性腹膜炎ハ近世始テ世ノ注目スル所トナリシモノニメ往時ハ之ヲ以テ單ニ腹水ト做セリ

腹水ノ理學的徵候ハ滯液ノ量ニ從ヒ同シカラサルカ故ニ之カ症候ヲ述フルニ當リテハ中等度ノ腹水ヲ以テ標準ト爲スヲ適當トス

腹水患者ヲ視診スルトキハ腹部ノ强ク膨滿セルヲ見ルヘシ就中背位ニ

於テハ兩腹側殊ニ膨大シ竪立位ニ於テハ腹壁ノ下半部著ク前方ニ膨出ス是レ液質ハ低キニ就クノ性アルニ由ルヤ明カナリ而メ背位ニ於テハ腹壁ノ前面扁平トナリ臍窩ハ消失シ若シ液質ノ滯留著明ナルトキハ前方ニ隆起ス然ルトキハ透過光線ヲ以テ檢スルニ隆起ノ透明ナルヲ見ル又延展セル腹壁ハ漸次ニ襞積ヲ失ヒテ滑澤トナリ時トメ一種鏡樣ノ光澤ヲ放ツヿアリ皮下靜脈ハ頗ル擴脹シ蜿蜒スルヿ稀ナラス是レ下大靜脈腹腔內ノ液質ニ由リテ壓窄セラルヽトキハ下肢ヨリ來レル靜脈血ハ途ヲ副枝血行ニ取リテ心臟ニ還流セントスルニ由ルナリ故ニ此際下腹靜脈「ブーバルト」氏靭帶中央部ノ兩側ヲ上行シ上腹靜脈ノ末梢ト相吻合メ臍ノ周圍ニ一種ノ血管環ヲ形成スルヿ往々之アリ又時トメ側腹ノ下部ニ當リ薔薇色或ハ帶褐薔薇色ニメ往々層狀ニ併行セル線條ヲ認ルヿアリ其外觀完ク姙娠瘢痕ニ等シク其發生モ亦之ニ

同一ニメ眞皮ノ諸部ニ於テ菲薄ト成ルニ基因スルモノトス

觸診ニ於テハ波動ヲ感スルモノニメ試ニ腹部ノ一側ニ手掌ヲ貼シ對側ノ腹部ヲ短ク撞突スル片ハ波濤ノ手掌ニ激衝スルヲ感スヘシ此波動ハ屢腹壁面ニ於テモ亦認ムルヲ得ルモノトス其際波動或ハ甚タ大ナルアリ或ハ纖細ニメ速ニ相踵クアリ加之著明ナル水泡震顫ヲ見ルヿ稀ナラス然レモ過多ノ滲漏液及强劇ナル腹壁ノ緊張ハ波動感覺ヲメ不明ナラシム

腹水ノ經過ヲ診定セントスル片ハ計測法大ニ要用ナリトス而メ此ニ使用スルハ「センチメーテル」帶尺ニメ常ニ同一部分ニ妥貼スル片ハ容易ニ腹水ノ增減ヲ檢出スルヲ得ヘシ

打診ニ於テハ體位ニ從ヒ打音ノ變替スルヲ見ル是レ流動自在ナル液質ハ常ニ低處ニ就キ瓦斯ヲ充盈セル腸管ハ其表面ニ浮泳セントスル

ノ性アルヲ察セハ容易ニ解シ得ル所ナリ故ニ背位ニ於テハ上部ハ腸ノ皷音ヲ呈シ側方并ニ後下方ハ之ニ反メ液體ノ濁音ヲ放チ唯腋窩線ト肩胛線トノ間ニ於テ屢〻上方ヨリ下方ニ向ヘル皷音ノ線條ヲ現ハスヿアルノミ是レ則チ上下行結腸ニ應スルモノニメ其腸間膜短キヲ以テ液層ノ表面ニ到ル迄浮上スルヲ得サルニ由ルナリ然レモ結腸固形體ヲ以テ充盈セラルヽカ若クハ外部ヨリ强ク壓縮セラルヽ片ハ皷音部ヲ認ムルヲ得サルハ素ヨリトス

又側臥ニ於テハ遊離側ノ濁音皷音ニ變スルモノニメ其理此體位ニ於テハ液層ノ表面ニ浮泳セル小腸遊離側ニ輻輳スルニ在リ但液體及腸管ノ交互位置ヲ變更スルハ屢〻一定ノ時間ヲ要スルモノナルカ故ニ打診ハ體位ヲ變スルノ後暫時間ヲ經テ之ヲ行フヲ適當トス其他竪立位ニ於テハ腹部ノ上半ハ皷音、下半ハ濁音ヲ呈シ膝肘位ニ於テハ前腹壁

ハ濁音、後壁ハ皷音ヲ放ツ

背位ニ於テ鼓音部及濁音部ノ境界ヲ精密ニ檢スルトキハ其境界線直線ヲ爲サスメ却テ波狀ヲ爲セルヲ見ン是レ「プレスロー」氏ノ始テ注目セル所ニメ畢竟液層ノ表面ニ於テ液質諸多ノ腸管蹄係間ニ竄入スルニ由ルナリ

然レ𪜈滯液饒多ナルトキハ其關係自ラ上記ト異ナルニ至ルモノニメ則チ腹壁ノ緊張劇シキカ爲メ波動感覺ハ頗ル不明トナリ且ツ滲出物ノ高徑大ナルヲ以テ腸間膜短小トナリテ腸管ノ液層表面ニ浮上スルヲ許サス故ニ此ノ如キ患者ヲ背位ニ於テ檢スルトキハ腹壁上面ハ濁音ヲ放チ皷音ハ却テ側腹部ニ存在シ又側位ニ於ル音響ノ變替ハ缺如シ加之堅立位ニ於テモ打診音ノ關係變化ナキヲ見ル

若シ腹膜腔內ノ液質極メテ少量ナルトキハ之ヲ證明スル「更ニ困難ナリトス蓋液質ハ其重量ニ由リテ先ツ小骨盤內ニ滯溜スレハナリ故ニ「プオン、ハムペルゲル」氏ハ此ノ如キ患者ハ側位ニアリテ骨盤ヲ扛舉セシムルノ法ヲ稱用セリ是レ然ルトキハ液質側腹部ニ注キ從來ノ皷音ヲ鈍濁ナラシムレハナリ此法ハ膝肘位ニ於テモ亦行フヲ得ヘキモノトス

腹水ハ之ヲ誤診スルノ危險尠カラス而メ皷腸ニ於テハ波動缺如シ其打診音ハ部位ト體位トヲ問ハス皷性ナルニ據リ容易ニ之ヲ區別スルヲ得ヘシ又甚シク脂肪肥滿セル人ニ於テハ腹腔强ク擴脹シ一種ノ假性波動ヲ呈スル「アリト雖𪜈强打スルトキハ其眞僞ヲ了知スルヲ得ヘシ其他腹水ト腹壁浮腫トノ鑑別モ容易ナルモノトス然レ𪜈卵巢囊腫トノ辨別ニ至テハ甚タ困難ナル「アリテ經驗ニ富ミ且用意周到ナル婦人家專攻ノ醫ト雖𪜈時ニ錯誤ヲ招ク「ナキニアラス

腹水ト卵巣嚢腫トヲ鑑別スルニ當テハ次ノ諸點ニ注目スルヲ要ス則チ

(一)腹部ノ形狀　腹水ニ於テハ前腹壁扁平トナリ腹部ノ擴脹ハ殊ニ側腹部ニ於テ著明ナルモ卵巣腫瘍ニ於テハ前腹壁殊ニ强ク前方ニ穹窿シ且腹部ノ一側ハ他側ニ比スレハ其擴脹顯著ナル丨屢之アリ

(二)腹水ニ於テハ臍窩消失シ若クハ隆起スルモ卵巣嚢腫ニ於テハ單ニ上方ニ壓上セラルヽノミ

(三)腹水ニ於テハ液層表面ノ上際即チ皷音部ニ於テモ尙波動感覺アルモ卵巣嚢腫ニ於テハ之ニ反シ這般ノ感覺嚴ニ濁音部ニ局スモ卵巣嚢腫ニ於テハ之ニ反ス

(四)腹水ハ之ヲ打診スルニ前面ハ皷音,側部及下部ハ濁音ヲ呈スル

(五)腹水ニ於テハ體位ノ變更ニ從ヒ打音變替スルモ卵巣嚢腫ニ於テハ否ラス是レ之ニ在テハ液質嚢裡ニ包裹セラルレハナリ

(六)腹水ハ子宮ニ影響スル丨ナク或ハ僅ニ子宮下垂ヲ喚起スルニ過キサルモ卵巣嚢腫ニ於テハ子宮ノ運動限制,後轉,上昇ヲ來ス丨アリ

(八) 腹膜腔內ノ可動性遊離瓦斯 *Frei bewegliches Gas in dem Peritonealraum.*

瓦斯腹膜腔內ニ遊離存在スルトキハ之ヲ視診スルニ腹部ノ顯著ナル膨脹所謂腹膜性皷腸 *Meteorismus peritonealis.* ヲ認ムルモノニヤ横隔膜及胸腔ノ臟器ハ之カ爲メニ壓上セラルヽニ由リ多クハ同時ニ著明ナル呼吸

困難ノ狀ヲ呈ス之ヲ觸診スルニ往々緊滿セル氣枕ニ抵觸スルノ感アリ又打診ニ於テハ到ル處鼓音若クハ鑛性音ヲ聽キ其高低ハ腸性鼓腸ニ反シ腹壁ノ全部ニ於テ同調ナリトス然レモ腹壁ノ緊張劇甚ナルトキハ全ク鈍濁スルニ至ル殊ニ此症ニ特異ナルハ肝及脾濁音缺如スルコトニシテ之ニ由リ肺ノ清音ハ直チニ鼓音ニ移行ス是レ瓦斯泡昇騰シ肝臓及脾臓ヲ胸壁ヨリ壓排スルニ由リ發スルナリ故ニ若シ是等ノ臓器癒着ノ爲メニ固定セラルヽトキハ此現象ヲ認ムルコトナシ其他瓦斯ハ常ニ高處ヲ占有スルノ性アルニ由リ瓦斯ノ量過大ナラサルトキハ打診音體位ニ從ヒテ變替シ腹位ニ於テハ背部左側臥ニ於テハ肝臓側部右側臥ニ於テハ脾臓部ニ鼓音ヲ放ツ

聽診ニ於テハ屢〻廣部ニ波及スル鑛性呼吸音ヲ聽クコトアリ是レ肺ヨリ傳播シ共鳴ニ由リテ增强シ且鑛性トナレル呼吸音ニ他ナラストス而シテ腹膜腔內ノ瓦斯集積症ハ多クハ腸管ノ穿孔ニ基因スルモノナルカ故ニ「シュウドチウスキー」氏ハ此腹內ニ於ル鑛性呼吸音ヲ腸穿孔症ノ固有症候トナシ空氣ノ腸管穿口ヲ出入スルヲ以テ之カ原因トセシモ「グローススステルン」氏ハ此說ヲ以テ誤謬ヲ免レサルモノト爲セリ然レモ「ゾンメルブロード」氏ハ時トシテ腸管ヲ壓迫シ壺性副響ヲ帶ヒタル吹性雜音ヲ發セシムルヲ得タリト云フ是レ空氣壓迫セラレタルカ爲メ穿孔部ヲ通過セシニ由ルトナスノ他說明スル能ハサルナリ

（二）腹膜腔內ノ液體及瓦斯 *Flüssigkeit und Gas in Peritonealraum.*

瓦斯及液質腹膜腔內ニ集積スルトキハ其理學的徵候複雜ニシテ之ヲ打診

スルニ瓦斯ノ存在スル部ハ鼓音若クハ鑛性音ヲ放チ液層ニ應スルノ部ハ濁音ヲ呈ス又體位ノ變更ハ打診音ノ關係ヲ變セシムルモ瓦斯ハ常ニ上方ニ液體ハ下方ニ位セスンハアラス而メ聽診音中殊ニ緊要ナルハ患者ヲ震搖スルノ際發生スル打水響ニメ其性膿氣胸ニ於ル肋膜腔內ノ震盪音ト毫モ異ナル所ナシ但這般ノ雜音ハ包蟲及卵巢囊腫ニ於テモ其內腔ニ瓦斯及液質ヲ含有スルトキハ現出スルヿアリ加之胃腑及腸中同時ニ瓦斯及液質ヲ存スルトキハ亦同一ノ現象ヲ見ルト雖モ腹膜腔內ニ發生セルモノハ通常强盛ナルト其發生部廣大ナルカ爲メ低調ナルトニ依リ他ト區別スルヲ得ヘシ

時トメ肝臟表面及橫隔膜間ニ瓦斯及液質(濃液)潴溜スルヿアリ然ルトキハ是ヨリ先キ橫隔膜ハ炎症ニ由リテ痲痹ニ陷レルヲ以テ今ヤ高ク胸腔內ニ壓上セラレ之ヲ肋膜腔內ニ於ル膿液及瓦斯潴溜則チ所謂膿氣胸ト誤ルヿアリ故ニ或者ハ一ニ之ヲ假性膿氣胸又ハ橫隔膜下膿氣胸(「ライデン」氏)ト名ケタリ蓋此症ハ通常胃腑或ハ腸管殊ニ蟲樣突起ノ穿通ニ續發スルモノナルカ故ニ之ヲ鑑別スルニ當テハ先キニ潰瘍性胃病ノ症候ヲ經過セサリシヤ否ヤニ注意セサルヘカラス又腔洞內ニ套管鍼ヲ刺入シ之ニ氣壓計ヲ繫着スルトキハ屢〻氣壓計內ノ壓力吸氣ノ際上昇シ呼氣ノ際低降スルヲ見ルヘシ故ニ其關係ハ套管鍼ヲ肋膜腔ノ病竈內ニ刺入セルトキト完ク反對スルナリ其他穿刺シテ得タル膿液糞臭ヲ放ツトキハ其橫隔膜下膿氣胸タル復疑ヲ容レス

(ホ) 腹膜腔內ノ包裹液 *Abgekapselte Flüssigkeit in Peritonealraum.*

腹膜囊內ノ包裹液ハ之ヲ觸試スルニ一種ノ抗抵ヲ呈シ時トメハ過敏ニメ且往々波動アル限劃性ノ腫瘍ヲ爲ス然レ𪜈視診ハ完ク其効ナキカ或ハ隆起セルノ狀ヲ認ムルニ過キス又打診ニ於テハ濁音若クハ濁性鼓音ヲ聽クモ體位ニ從テ打音ニ變化アルヿナシ又聽診ニ於テハ腫瘍ノ上部ニ摩擦音ヲ聽クヿアリ若シ强盛ナル𪜈ハ觸知スルヲ得ヘシ

此ニ猶橫隔膜下膿瘍(橫隔膜下膿胸)ニ就テ少シク記載セントス抑モ此症ハ肝臟若クハ脾臟ト橫隔膜トノ間ニ潴溜セル膿液ノ包裹セラレタルモノニメ動モスレハ肋膜腔內ノ潴膿ト誤ルヿアリ膿液痲痹セル橫隔膜ヲ壓迫シテ高ク胸腔內ニ壓上セシムルノ際殊ニ然リトス其辨別ハ屢〻至難ニメ唯先キニ腹腔臟器ノ疾患ヲ經過

セサリシヤ否ヤニ據リテ之ヲ決シ得ルニ止マルヿアリ肺ノ呼吸音濁音部ノ境界ニ於テ鋭利ニ歇止スルハ之ニ著明ナル症候トス而メ試驗的穿刺ヲ行フニ當テハ套管ヲ深ク送入スルニアラサレハ膿液ニ達スルヿナシ

第十一節　吐物ノ檢査 *Untersuchung der Erbrechen.*

食物ハ消化ニ由リテ著明ナル化學的變化ヲ受クルハ世人ノ知悉セル所トス故ニ消化ノ化學的作用ニ於ル變化ハ唯リ胃腑內容及時トメハ亦腸內容ノ化學的檢査ニ由ルニアラサレハ之ヲ知リ得サルノ理容易ニ解スルヲ得ヘシ然レ𪜈這般試驗法ノ說明ニ至テハ之ヲ生理化學ニ讓リ玆ニ論セス

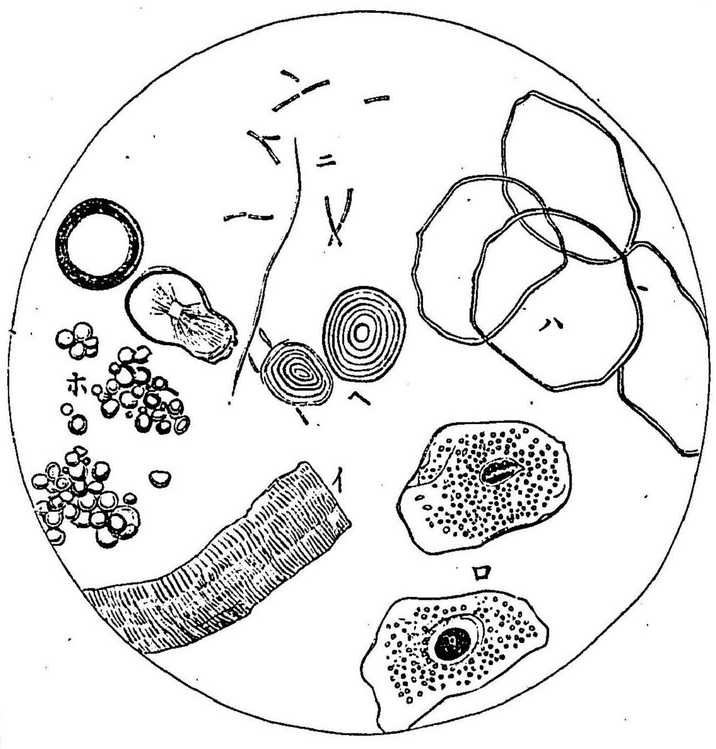
吐物ノ理學的檢査ハ其著明ナル理學的變化ニ由リテ兼テ胃腑化機的作用ニ於ル異常ヲ示スヿ往々之レアリト雖モ通常ハ單ニ理學的變化ヲ知ルニ止レリ而シテ此理學的檢査ハ吐物ノ顯微鏡的及肉眼的性質ニ注目スルニ在リトス

吐物ノ顯微鏡的成分ハ其一部ハ偶然ニ混和セルモノナリト雖モ主トシテ食物ノ成分ヨリ成レルモノトス然レモ茲ニ吐物中ニ現出スヘキ一切ノ成分ヲ考察スルハ到底爲シ難キ所ニシテ且益スル所ナキハ多辯ヲ費サスシテ明カナリ然レモ植物性及動物性組織ノ顯微鏡的檢査ノ一般ヲ熟知セル者ニ在テハ檢査ノ目的單ニ食物ノ本源ヲ決定スルニ在ルヿハ甚シキ困難ニ逢着スルヿナカルヘシ(第百八十六圖)但組織ノ變化ハ狀況ノ異ナルニ從ヒ甚タ多般ナルハ素ヨリニシテ胃液ノ消化力、食物ノ性質及食物ノ胃腑內ニ滯在スル時間ノ長短ハ此ニ大ニ關係アルモ

第百八十六圖

吐物中屢〻現出スル成分ヲ示ス

(イ)筋纖維(ロ)口腔上皮(ハ)植物細胞(ニ)「バクテリエン」及「レプトトリキス」菌糸(ホ)乳汁中ノ脂肪滴(ヘ)澱粉顆粒、二百七十五倍(余カ實驗)



ノトス故ニ吐物中ノ各成分ハ或ハ單純ナル膨脹及軟化ノ狀ヲ呈シ或ハ初期若クハ稍〻時期ヲ經タル融解ヲ現ハスモノニメ殊ニ横紋筋纖維ハ著明ニ胃液ノ作用ニ基因セル分子的分解ヲ現ハスヲ常トス是レ「フオン、ブレーリヒ」氏ノ消化力ニ關スル有名ナル試驗ニ於テ詳細ニ檢究シ且ツ説明セシ所ナリ而メ其際先ツ鬆粗ナル結締纖融解シテ各筋纖維束分離シ次テ筋纖維鞘敗壞スルニ至リ然ル後横紋間ノ物質溶融シ之カ爲メニ筋纖維束ハ分裂メ數多ノ圓板トナリ終ニ此圓板亦破壞メ碎片ト成ル凡テ這般ノ分解ハ緩除ニ行ハル丶モノニメ表面ヨリ深部ニ波及ス

若シ吐物通常見ルカ如ク胃腑ヨリ來ラスメ却テ腸管ニ基因スル片ハ食物片ノ變化殊ニ高度ナルハ論ヲ待タス

吐物腸ヨリ來ル片ハ其中ニ膽汁ノ成分ヲ混和スルモノトス然レモ單純ナル胃性嘔吐ニ於テモ時トメ之ヲ見ルヿアリ而メ這般ノ膽汁成分ハ之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ綠便色若クハ黃便色ノ凝塊ニメ或ハ碎片狀、顆粒狀及屑片狀ヲナシ又或ハ食物片之ニ混和メ異常色ヲ呈スルヿアリ

吐物中微菌ノ現出スルヿアルハ稀ナラス就中注意スヘキハ醱酵菌及分裂菌是ナリ

吐物中ノ醱酵菌僅ニ散在スルニ過キサル片ハ病理上毫モ關係アルモノニアラス蓋「フオン、ブレーリヒ」氏カ示セル如ク僅少ノ醱酵菌ハ通常胃腑內容中ニ於テモ亦發見セラルヽモノナレハナリ然レモ若シ胃腑內ニ醱酵及澱粉質ノ異常ヲ發生スル片ハ其數頗ル增加シ重要ナル關係ヲ有スルニ至ル是レ特發セルト胃粘液膜ノ潰瘍性、癌腫性變性若クハ胃擴脹ニ續發セルトヲ問ハス慢性胃加答兒ニ於テ屢〻遭遇スル所ト

ス而メ此醱酵菌ハ卵圓形ヲ爲スニ由テ之ヲ認定スルヿ容易ナリ(第百八十七圖)

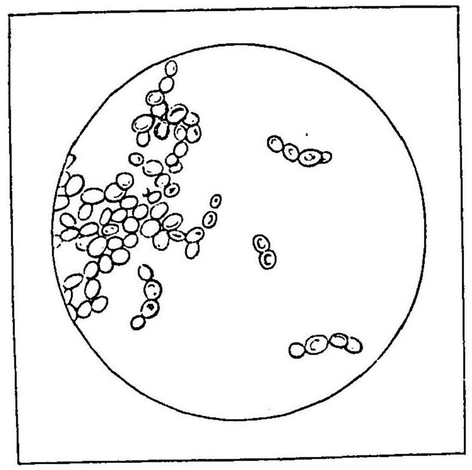
時トメ吐物中鵞口瘡菌ヲ認ムルヿアリ是レ多クハ口腔ニ基因スルモノナリト雖モ稀ニハ胃粘液膜自家ヨリ來ルヿアリ

吐物中醱酵菌ノ他絲狀菌ヲ發見スルヿ屢之アリ

分裂菌モ亦新鮮ナル吐物中ニ現出スルヿアリテ殊ニ醱酵菌ト共ニ存在スルヿ多シトス故ニ醱酵菌ヲ發見スル諸般ノ狀態ニ於テハ亦兼テ分裂菌ヲ認ムルナリ「ミルレル」及「ド、バリー」氏ハ近世胃腑內ニ各異ノ官能及醱酵ヲ催ス所ノ數種ノ分裂菌アルヲ示セリ蓋食物ト共ニ胃腔ニ到達セルモノニメ口腔諸種ノ分裂菌ニ富有ナルトキハ殊ニ多シトス然レモ氣中ニ浮遊セル微菌ノ芽胞吐出後初メテ吐物內ニ竄入シ玆ニ發育蕃殖スルヿアリ宜シク吐物中固有ノ微菌ト誤ル勿レ加之食道及

第百八十七圖

幽門癌及胃腑擴脹ニ惱メル四十二歲男子ノ胃內容物中ヨリ得タル醱酵細胞、二百七十五倍(余カ實驗)

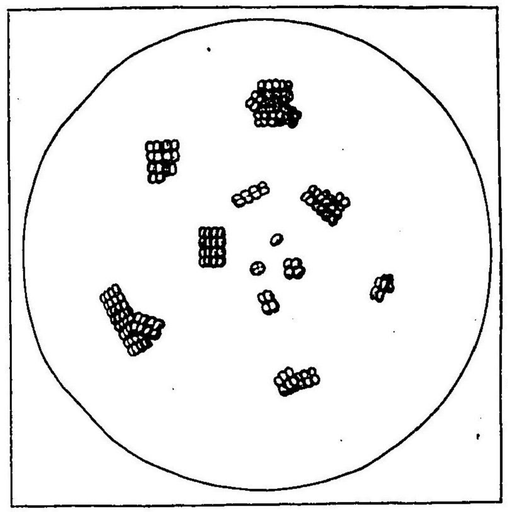


口腔內ノ徽菌モ偶〻吐物ニ混和スルヿアルハ亦宜シク注意セスンハアルヘカラス例之吐物中屢〻鵞口瘡ノ卵形芽胞及廣濶ニメ關節アル菌絲ヲ混在シ又時トメハ「レプトトリキス、ブッカリス」ノ菲薄ニメ美麗ナル菌絲ヲ發見スルヿアルカ如シ

「ザルシナ、ウエントリクリー」ハ上記ノ菌種ニ親密ナル關係アルモノニメ其本性ニ關メハ學者ノ屢〻論爭セル所ナリ而メ往時ハ之ヲ海草屬中ニ算入セシト雖モ近世分裂菌中ニ屬セシムルニ至レリ抑モ此徽菌ハ千八百四十二年「グードソル」氏始テ吐物中ニ發見シ且記述セルモノナリト雖モ其發育ノ狀態ハ「フォン、ブレーリヒ」氏ノ檢索ニ依リテ始テ闡明ニ趣ケルモノニメ其原形ハ方形細胞狀ヲ爲シ深キ截痕ニ由リ非然四區ニ別ル(第百八十八圖)而メ各細胞ハ或ハ散在シ或ハ二個四個八個十六個等板狀ヲナシテ連結シ或者ノ形容セル如ク外貌宛モ緊縛セ

第百八十八圖

吐物中ノ「ザルシナ、ウエントリクリー」二百七十五倍(余カ實驗)



ル荷俵ノ狀ヲナス然レモ其大小ハ一樣ナラスメ大ナルモノアリ又或ハ小ナルモノアリテ甲ハ鮮明ニ乙ハ稍〻褐色ヲ帶フ又時トメハ其直徑〇、〇一「ミリメーテル」ニ達スルヿアリ通常其內部ニ二乃至四個ノ蒼色若クハ淡紅色ノ核ヲ包有ス又數多ノ「ザルシナ」板ハ相重疊シ之ニ由テ帶褐色不透明ノ塊トナリ其固有ノ組織ハ只邊緣ニ於テノミ檢出シ得ルヿアリ試ニ此ノ如キ標本ニ一滴ノ稀釋セル加里鹵液ヲ加ヘ吸引紙ニ由テ反應藥ヲ迅速ニ流入流出セシムルトキハ重疊セル「ザルシナ」板互ニ離解シ且各板箇々ノ細胞ヨリ成レルノ狀判然目視スルヲ得ヘシ蓋「ザルシナ」菌ノ發生スルハ絕ヘス數多ノ分體及絞縊ニ由リ各小區ヨリ細小ノ圓形細胞ヲ生スルニ由ルモノニメ其細胞ハ常ニ中央ニ於テ暗色ノ線條ト成リテ現ハルヽ絞溝ヲ生シ後ニハ之ト直角ヲ爲メ同ク中央ヲ過キレル第二線ヲ形成ス此交叉狀線ハ中央ヨリ周圍ニ向ヒ漸ク延長シ且絞溝モ亦深凹ト成リ以テ生熟セル「ザルシナ」細胞ニ變スルモノトス「ドユクウォルト」氏ノ實驗ニ依レハ「ザルシナ、ウェントリクリー」ノ生活力ハ頗ル盛ナルモノニメ氏ハ吐物ヲ三年間密閉セル壜中ニ貯蓄セシニ尙微菌ノ健全ナリシヲ見タリト云フ

「ザルシナ、ウェントリクリー」ハ胃及腸內幷ニ吐物中屢〻現出スルヿアリ然レモ是ヲ以テ常ニ胃腑消化機ノ異常ヲ示スモノトナスハ正シカラス又所謂消化不良ニ罹レル者ノ吐物中ニハ此微菌殊ニ饒多ニ存スルハ素ヨリトス

結晶體モ亦吐物中現出スルヿアリテ余ハ萎黃病ニ罹レル一少女ノ亞爾加里性胃吐物中ニ於テ始テ燐酸安母尼亞麻倔涅矢亞ニ遭遇セリ而メ此結晶ハ良ク發育セルト棺蓋狀ヲ爲セルト醋酸中ニ溶解シ易キトニ由リ容易ニ之ヲ鑑識スルヲ得タリ余ハ其後同一ノ症ニ於テ尙數回

之ヲ發見セリ

吐物內ニ現出スル消化器ノ細胞成分ハ通常口腔ノ上皮ニメ多角形ヲ爲スト多クハ積襞ヲ作レルト頗ル大ナルト及屢〻連續セル板狀ヲナシテ剝脫スルヿアルトニ據リ之ヲ認ムルヿ容易ナリ然レ𪜈吐物中ノ偶性混合物ニ過キサルハ言ヲ俟タス

胃腑粘液膜ノ圓柱上皮ハ吐物中之ヲ發見スルヿ甚タ稀ナリ加之多クハ多少粘液變性セルカ故ニ其形狀著ク變化セリ

諸家ハ胃液腺細胞モ亦吐物中ニ現出スルモノトナセシト雖𪜈顯微鏡下ニ之ヲ確定スルハ多クハ頗ル困難ナリトス

個々ノ粘液球及膿球モ亦吐物中ニ遭遇スルヿ稀ナラスト雖𪜈通常胃液ニ由テ甚シク變化セラレ屢〻單ニ核ヲ遺スニ止ルヿアリ殊ニ膿液ヨリ成レル吐物中饒多ニ現ハル是レ通常胃腑ノ近傍ニ發生セル膿瘍ノ胃腔ニ破壞セルニ由ルモノトス何トナレハ胃壁自家ノ化膿ニ於テハ膿液ノ嘔吐ハ唯稀ニ見ル所ナレハナリ

吐物中血液ノ現出ハ診斷上頗ル緊要ナルモノニメ其赤血球ノ顯微鏡的變化ハ出血ノ狀態幷ニ血液ノ胃腔內ニ停滯セル時間ノ長短ニ從ヒ一樣ナラス則チ若シ胃出血廣部ニ發生スルトキハ赤血球ノ形狀及其攢簇ノ狀新鮮血液中認ムルモノニ異ナラス是レ這般ノ出血ニ於テハ血液暫時ニメ胃腑ヨリ吐出セラルレハナリ然レ𪜈之ニ反シ血液久時胃腑內ニ滯在セルトキハ血球膨脹シ或ハ尖棘ヲ生シ或ハ色素ヲ脫出メ銳利ノ複疆線ヲ具ヘタル圓板トナリ又或ハ崩融スルニ至ル

胃壁ノ腫瘍ニ於テ吐物中ニ腫瘍ノ成分ヲ混スルヿアルハ極メテ稀有ノ現象トナサヽルヘカラス蓋這般ノ現象ハ學理上發生セサルヘカラサルノ理ナルモ實際ニ於テハ腫瘍細胞ハ通常著シキ特性ナキカ或ハ

消化液ノ作用ニ依リテ其特徴ヲ失ヘルヲ以テ之カ檢査ハ實地上著シキ價値アルヿナシ

往々赤血球殆ト敗壞シ其色素黄色帶褐色若クハ殆ト褐赤色ニシテ顆粒狀或ハ同質ナル不整形ノ塊トナルヿアリ

「ウ非スコンチー」氏ハ吐物中ニ肝細胞ヲ發見シ之ニ依テ胃潰瘍深蝕シテ肝臓ヲ破壞セルヲ推定シ得タルノ一實驗ヲ記載セリ

蛔蟲、蟯蟲ノ如キ内臓蟲腸内ニ寄生スルトキハ時トシテ其吐物中該蟲ノ卵ヲ證明シ得ルヿアリ

吐物ノ肉眼的檢査ニ於テハ其量、硬度、臭氣、味感、粗大ナル成分就中其外觀ニ注目スルヲ要ス

吐物ノ量ハ胃腑充實ノ度并ニ嘔吐作用ノ强弱及其持續時間ノ長短ニ關スルモノニシテ胃腑變廣セルモノニ於テハ其量殊ニ大ナリ是レ擴脹

セル胃腑ハ時トシテ前腹壁ノ大部ヲ占メ二十磅以上ノ液質ヲ容ルヽヲ得ルヲ察セハ容易ニ解シ得ルナリ且大量ノ吐物頓ニ逆出セラルヽハ此症ニ特異ナル所ニシテ「ブルーメンタール」氏ノ實驗ニ嘗テ一患者一回ニ十六磅ニ至ルノ量ヲ吐出セリト云フ

吐物ノ硬度ハ多クハ食物ノ性質及其消化ノ度ニ關スルモノトス從テ吐物中ノ固形成分ハ或ハ碎片狀ヲナシ或ハ粥狀若クハ液狀ヲナス然レ𪜈或ル種類ノ嘔吐ニ在テハ專ラ液狀物ヲ吐スルヿアリ其硬度ハ稀薄ニシテ水樣ナルヿアリ又粘靭ニシテ粘液狀ヲナスヿアリ胃ノ大出血ニ於テハ血液通常凝固シテ塊狀ヲ爲スモノトス

吐物ノ反應ハ之ヲ檢スルヿ容易ニシテ反應紙ヲ以テ直接ニ決定スルヲ得ヘク而シテ通常ハ酸性ヲ呈スルモノトス然レ𪜈胃腑ノ澱粉消化機ニ異常ノ分解及醱酵作用ヲ發スルトキハ過度ノ醸酸ヲ現ハスニ至ル是レ

慢性胃加答兒及胃擴脹ニ於テ屢〻遭遇スルモノニメ此ノ如キ患者ハ嘔吐作用ノ直後ニ於テ舌ノ一種特異ナル鈍麻ヲ訴フルヲ常トス又吐物ノ亞爾加里性反應ハ所謂水樣嘔吐 *Wasserbrechen.* ニ於テ殊ニ見ル所ニメ後章ニ詳論スヘシ此亞爾加里性反應ハ饒多ノ血液胃內容ニ混和スルノ際亦現ハルヽ｢アリ

吐物ハ多クハ酸臭ヲ放ツモノニメ若シ異常ノ釀酸胃中ニ發生スル片ハ屢〻刺スカ如キ酸性ヲ現ハス又時トメ先キニ攝取セル食物ニ固有ノ臭氣或ハ醱酵分解セル物質ニ於テ見ルカ如キ臭氣本來ノ酸臭ニ加ハリ加之完ク酸臭ヲ掩フニ至ル｢アリ若シ吐物糞臭ヲ有スル片ハ豫後甚タ危險ニメ通常腸管ノ閉塞ニ由リテ發スルモノトス此病態ヲ名テ吐糞病 *Ileus.* ト云フ然レ𪜈往時唱ヘシ如ク吐糞ハ唯リ大腸ノ閉塞ニ於テノミ現ハルヽモノトシ且吐物ノ臭氣ヲ便臭 *Faecalentem.* ト便樣臭 *Fae-*

kaloidem. トニ區別メ乙ハ小腸ノ閉塞ヲ示スモノトナセシハ宜シカラス｣尿毒症ノ吐物ハ屢〻一種刺スカ如キ安母尼亞性ノ臭氣ヲ放ツモノニメ殆ト尿臭ト稱スルモ不可ナシ是レ尿素、胃粘液膜面ニ排泄セラレ直ニ炭酸安母尼亞ニ分解スルニ由リテ發生セルナリ然レ𪜈同時ニ胃出血アル片ハ吐物ノ厭フヘキ屍臭ヲ爲ス｣稀ナラス又胃癌殊ニ胃擴脹ヲ合併セルモノニ於テモ時トメ腐敗臭、屍臭、或ハ硫化水素ニ等シキ臭氣ヲ認ムル｣アリ

吐物ノ臭氣ハ或ル中毒ノ診斷ニ當リ殊ニ樞要ナル｣アリ例之燐中毒ニ於テハ吐物大蒜樣ノ臭氣ヲ放チ硝酸便蘇兒中毒ニ於テハ苦扁桃樣ノ臭氣ヲ呈スルカ如シ

吐物ノ旨味ハ患者自ラ之ヲ醫ニ告クルモノニメ多クハ酸味ヲ感スルヲ訴フト雖𪜈若シ膽汁ノ成分ヲ含有スル片ハ苦味ヲ現ハス

吐物ノ粗大ナル固形成分中食物ハ屢〻著明ニ現ハルヽアルモノニメ又吐糞症ニ於テ若シ障碍深ク大腸内ニ存スル片ハ固形ノ糞塊吐物中ニ混在スルアリ又時トメ吐物中ニ蛔蟲、條蟲ノ節片、蟯蟲、鞭蟲及旋毛蟲ヲ發見シ又近傍殊ニ肝臓ヨリ胃腔ニ破壞セル「エヒノコッケン」ヲ現出スルアリ又「メシェーデ」氏ハ吐物中饒多ノ生活セル乾酪塊ヲ發見セリト云フ其他「ゲルハルト」氏ハ吐物中兩翼蟲ノ仔蟲ヲ認メ「クユッヘンマイステル」「ルブリュスキー」「ゲルハルト」及「キョルリッケル」ノ諸家ハ蠅ノ仔蟲ヲ見タルノ實驗ヲ報セリ然レ𪜈歇私的里家ハ往々醫ヲ欺クアルト或ハ一身ノ利益上ヨリ昆蟲ノ仔蟲、生活セル動物及之ニ類似セルモノヲ吐物トメ醫ニ示スアルニ注意セサルヘカラス

然レ𪜈實際吐出セル食物ノ成分ト雖𪜈檢査粗漏ナル片ハ疑惑ニ陥ルアリ例之「フリッチュ」氏ノ報告セル有益ナル實驗ニ一患者アリ詐リテ生活動物ヲ吐逆シタルヲ告ク依テ之ヲ精索セシニ「クアッペ」魚ノ消化セラレサル胃腑及腸管ナリシト云フ(第百八十九圖)

屢〻吐物中ニ膽石ヲ發見スルアリ是レ膽道及胃壁若クハ小腸壁ノ先キニ潰瘍ニ陥レルニアラサルヨリハ胃腔内ニ達スル能ハサルナリ亦纖素性(格魯布性)胃炎ニ罹レル成人ニ於テハ時トメ纖素性ノ擬膜ヲ認ム

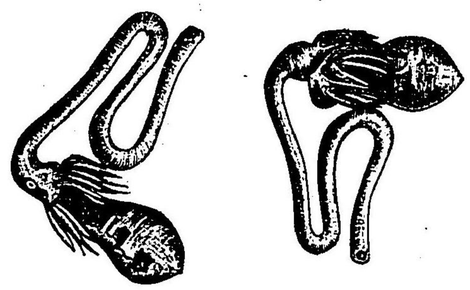
吐物中ニ氣泡ヲ混スルヿ稀ナラス又異常ナル胃腑醱酵アル者ニ於テハ吐物ヲ靜置スルニ多少ノ瓦斯泡發生スルヲ見ル

吐物中其外觀ノ殊異ナルモノ種々アリ今次ニ其二三ヲ記載セントス」

(イ) 水液嘔吐　*Wasserriger Erbrechen.*

第百八十九圖

四十七歳男子ノ吐出セシ「クアッペ」魚ノ腸胃（「フリッチユ」氏ニ由ル）



慢性胃加答兒（殊ニ酒客ニ發生セルモノ）胃潰瘍及胃癌ニ於テハ空腹時ニ際シ稀薄水樣ニメ殆ト透明ナル液體ヲ吐出スル「稀ナラス「フオン、フレーリヒ」氏ハ其液ノ主トメ嚥下セル唾液ヨリ成レルヲ確證セリ蓋是等ノ患者ハ夜間不識不知唾液ヲ嚥下スルモノニメ早朝吐出スルハ實ニ此唾液ニ他ナラス（早晨嘔吐 *Vomitus matutinus.*）這般ノ嘔吐ヲ名テ一ニ水樣嘔吐、*Wasserkolles.* 又心臓蟲 *Herzwurm.* ト云フ此液質ハ上皮細胞、脂

肪滴等ヨリ成リテ吐物ヲ靜置スルトキハ底部ニ沈澱スル箇々ノ絮狀物ヲ含有スルヲ常トシ反應ハ亞爾加里性ナル「多シト雖モ胃液及胃內容物之ニ混和スルトキハ中性或ハ酸性反應ヲ呈スルニ至ル而メ異重ハ一〇〇四乃至一〇〇七ノ間ヲ昇降スルヲ以テ其固形成分ニ乏シキヲ徵知シ得ヘク（四、五二乃至六、八八「プロミルレ」）又試ニ之ニ格魯兒鐵ヲ加フレハ暗紅色ヲナスカ故ニ唾液ニ固有ナル硫化青素抱合物ヲ含有セルヲ知ルヘシ其他此液ハ原來蛋白ニ乏シキモ亞爾箇保兒ヲ加フルニ雲片狀ノ物質ヲ析出スルヲ見ル是レ澱粉ノ葡萄糖ニ變セシモノニ外ナラサルナリ

亞細亞虎列拉ノ經過中實驗スル吐物ハ亦水液性吐物ニ屬スルモノニメ嘔吐ニ由リテ胃腑ノ食物成分先ツ吐逆セラレ次テ直ニ稀薄ナル水狀物ヲ吐出ス其外觀頗ル虎列拉ノ米泔汁樣便ニ類似シテ許多ノ絮狀

片ヲ現ハスモ此絮狀片ハ直チニ沈澱ノ其上際ニ帶黃色或ハ綠色稀ニハ淡黃色ノ液ヲ留ムルモノトス之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ絮狀片中粘液質ニ由テ粘合セラレタル胃及腸粘液膜圓柱狀上皮ノ集簇ヲ認ム其臭氣ハ弱ク或ハ少シク酸臭ヲ放チ時トメハ亞爾加里性又時トメハ酸性ノ反應ヲ呈ス異重ハ一〇〇二乃至一〇〇七ノ間ヲ往來シ其固形成分ハ四、〇乃至六、〇「プロミルレ」ノ間ニ在ルヲ常トス又此液ハ蛋白ニ乏シク殊ニ酸性反應ヲ呈スルモノハ亞爾加里性反應ヲ現ハスモノニ比スレハ僅少ナリ尿素及炭酸安母尼亞ハ多クハ之ヲ證明スルヲ得ヘシ又無機鹽類中ニハ殊ニ食鹽ヲ多シトス其他極メテ稀ニハ「コッホ」氏ノ「コンマ」狀「バチルヽス」ヲ混スルヿアリ

(ロ) 粘液嘔吐 *Schleimiger Erbrechen.*

胃粘液膜ノ炎症ニ於テハ時トメ粘液性嘔吐ヲ見ルヿアリ是レ粘靭ニメ膠質狀ナル混濁セル物質ニメ或ハ無色ナルヿアリ或ハ膽汁ニ由テ綠色ヲ帶フルヿアリ屢、食物ノ殘片ヲ混有ス

含水炭素物胃中ニ在テ粘液醱酵ヲ起ストキハ粘靭ニメ縷ヲ引ク粘液質ヲ吐スルヿアリ宜シク粘液嘔吐ト誤ル勿レ是レ「フォン、ブレーリヒ」氏ノ始テ注目セル所ニメ氏ハ實驗ニ據リテ此物質ハ屢、大ナル努力ニ依リテ多量ニ吐出セラルヽヿアルヲ示セリ且氏ハ既ニ當時ニ於テ眞ノ粘液ハ通常斯ノ如ク多量ニ吐物中ニ現出スルモノニアラサルヲ唱ヘリ而メ一二ノ症ニ於テハ眞性ノ粘液嘔吐ナルカ若クハ含水炭素物ノ粘液醱酵ナルカハ化學的檢査ニ徵スル片ハ容易ニ之ヲ決スルヲ得ヘシ

(ハ) 血液嘔吐 *Blutiger Erbrechen.*(吐血 *Haematemesis.*)

血液性吐物ノ外觀ハ主トメ血量及出血ノ種類ニ從ヒ同シカラス而メ僅微ノ出血ハ劇シキ嘔吐運動後時トメ之ヲ見ルヿアリ是レ小粘液膜血管、胃壁ノ急劇ナル收縮ニ由リテ破裂スルカ爲メナルヤ明カナリ其際混和セル血量ハ通常僅少ニメ吐物多クハ鮮紅色ノ線條及點狀ノ斑點ヲ現ハスニ過キス

小量ノ胃出血頻回反復シ而メ血液久時胃腔內ニ停滯スルトキハ汚穢褐赤色若クハ暗色ニメ且煤色ヲナセル物質ヲ吐逆ス是レ血色素胃液ノ爲メニ變化スルニ由ルモノニメ通常其外觀ニ從ヒ之ヲ咖琲殘渣樣或ハ「ショコラーデ」色ノ物質ト稱ス往時ハ這般ノ嘔吐ヲ以テ唯リ胃癌ニ

於テノミ現ハルヽモノトナセシモ畢竟謬見ニ過キストス何トナレハ胃潰瘍、中毒性胃炎(殊ニ酸類中毒)及所謂血液溶崩症例之膽血病ノ經過中ニ於テモ上記ノ關係ヲ具フルトキハ亦之ヲ見ルヿアレハナリ

急性ニメ廣汎ナル胃出血ニ於テハ血液異物ノ如キ作用ヲナスカ故ニ胃腑迅速ニ之ヲ驅除スルヲ常トス從テ血液凝塊及鬆鬆ナル暗黑色ノ凝結物トナリテ吐出セラル又稀ニハ鮮紅色ニメ泡沫ヲ含ムヿアリ

血量ハ不定ナレモ數磅ニ達スルヿアリ斯ノ如キ大出血ハ殊ニ圓形胃潰瘍ニ由テ發スルヿ多シ而メ廣汎ナル胃出血ハ之ヲ咳血ト誤ルヿアルハ上章既ニ記載セル所ナリ

吐血ハ盡ク胃腑ニ基因スルモノニアラサルハ猶玆ニ記載セスンハアルヘカラス蓋食道、咽頭若クハ鼻腔ノ出血ニ於テ大量ノ血液胃腑ニ流注スルトキハ眞ニ胃出血ナキモ吐血スルヿアリ又極メテ

稀有ナリト雖モ小腸ヨリ胃腔ニ逆流セル血液吐出セラレ之ヲ胃出血ト誤ルヿアリ

吐血及之ニ類似ノ觀アル嘔吐ノ錯誤ハ少シク注意スル片ハ之ヲ避クルヿ敢テ難シトセス「プリントン」氏ハ頻リニ鐵製劑ヲ使用スル間ハ吐物暗色ヲナシテ吐血ナルカ如ク思惟セシムルヿアルニ注意セサルヘカラサルヲ唱ヘリ然レモ既往症、顯微鏡檢査及鐵ノ化學的反應ニ注意セハ之ヲ誤ルノ恐レナカルヘシ是レ硝酸蒼鉛ヲ服用スル者ニ於ル暗色ノ吐物ニ於テモ亦適當スルモノニメ顯微鏡上容易ニ藥物ノ暗色結晶ヲ證明スルヲ得ヘシ又紅色ノ飲食物ヲ攝取セルモノ赤色物ヲ吐出スル片ハ之ヲ胃出血トナシ恐怖スルヿアリ然レモ其眞正ノ胃出血ニアラサルハ容易ニ之ヲ判定シ得ルヲ常トス余ハ這般ノ異常ヲ赤色ノ蕪菁ヲ飽食セルモノニ於テ殊ニ屢〻遭遇セリ

（二）膿汁嘔吐　*Eitriger Erbrechen.*

膿汁ヲ吐出スルハ甚タ稀ニ見ルヿアルノミ而メ此症ノ粘液膜下胃炎ノ如キ胃壁ノ疾患ニ關係スルハ稀ニメ通常近接臟器ニ發生セル膿瘍ノ胃腔ニ潰決スルニ由來スルモノタルハ既ニ之ヲ記載セリ

（ホ）膽汁嘔吐　*Galliger Erbrechen.*

膽汁ノ吐物ニ混スルハ屢〻遭遇スル所ニメ吐物ハ之カ爲メニ帶綠色若クハ帶黃色ヲナシ劇シキ苦味ヲ呈スルニ至ル然レモ這般ノ嘔吐ハ診斷上特殊ノ關係アルヿナシ

腹腔臓器ノ炎症殊ニ穿孔性腹膜炎ニ於テハ屢〻稠厚ニメ一種草綠色或ハ銅綠色ノ物質ヲ吐スルヿアリ其外觀ニ從ヒ爛草嘔吐 *Vomitus aeruginosus.* ノ名アリ其綠色ハ吐物ノ胃ノ遊離酸ニ由リテ綠變セル膽色素ニ富饒ナルニ因シ試ニ硝酸ヲ以テ其色素反應ヲ檢スルトキハ容易ニ之ヲ證明スルヲ得ヘシ又其反應ハ「フオン、フレーリヒ」氏ノ發見ニ從ヘハ酸性ニメ異重ハ一〇〇五ナリト云フ其他草綠色ノ液中ニハ磚狀及圓柱狀上皮、脂肪滴及無形ノ粘液ヨリ成レル絮狀片ノ浮遊スルヲ見ル凡テ是等ノ諸成分ハ膽色素ニ由リテ著明ニ綠色ヲ帶フルモノトス

(ヘ) 吐糞 *Kothbrechen.*

吐糞ニ由テ排泄セラレタル物質ハ殊ニ糞臭ニ依リテ之ヲ徵知シ得ヘク其色ハ帶綠若クハ糞樣帶黃色ニメ通常流動性ヲナス然レ𪜈亦固性ノ糞塊ヲ吐出スルヿナキニアラス而メ此症ハ腹膜炎及窒扶斯ノ爲メニ腸管ノ局部痲痺ヲ起セシモノニ於テ腸管不通トナルヿナクメ發生セルノ實驗アリト雖𪜈多クハ腸管ノ器械的閉塞ヲ示スモノトス又「ナツセ」氏ハ脂肪ヲ含有セル食物ヲ攝取セルノ證跡ナクメ脂肪ヲ嘔吐セル一患者ヲ實驗セリ

食道ノ狹窄ヲ惱メルモノハ絞約ニ由リテ其內容ヲ逆出スルヿアリ宜シク眞性ノ吐物ト區別セサルヘカラス是レ食塊ノ大ナルト硬固ナルトニ由リ狹隘トナレル食道ヲ通過スル能ハスメ其上部ニ停滯セル食物ノ成分ヨリ成レルモノニメ時トメ食道ノ膨出部ニ堆積シ屢〻數時間停滯スルヿアリ而メ這般ノ食物ハ多クハ軟化シ且消化セリト雖𪜈其性質ヲ診定スル𪜈ハ之ヲ區別スルヿ易シ